

**2007年度**

**渥美国際交流奨学財団年報**

Atsumi International Scholarship Foundation  
Annual Report



渥美健夫氏遺影

渥美国際交流奨学財団は故渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志に基づき  
日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて、  
1994年4月1日に設立されました。

当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に  
奨学援助をいたします。

日本にやって来た留学生の皆さんが、学問を成就するだけでなく、  
豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができますよう  
お手伝いさせていただきたいと思います。

若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、  
人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、  
やがては世界平和への道が開かれてゆくことを願っております。

# 2007年度 渥美国際交流奨学財団年報

## 目 次

|                                        |            |
|----------------------------------------|------------|
| ◇ 理事長のことば「最も近い隣国とのさまざまな小さな交流」          | 渥美伊都子 …… 2 |
| ◇ 常務理事オピニオン「砕かれた日本ドリーム」                | 今西淳子 …… 3  |
| ◇ 交流事業・思い出                             |            |
| ・見学会                                   | … 5        |
| ・軽井沢旅行                                 | … 7        |
| ・渥美奨学生の集い 講演：平川 均 選考委員「鹿島守之助とパン・アジア主義」 | … 10       |
| ・新年会                                   | … 11       |
| ・研究報告会                                 | … 12       |
| ◇ 2007年度渥美奨学生のエッセイ                     | … 15       |
| ◇ 2008年度渥美奨学生の自己紹介                     | … 29       |
| ◇ 2007年度海外学会派遣プログラム参加報告                | … 43       |
| ◇ A I S Fネットワーク                        |            |
| ・ラクーン会                                 | … 51       |
| ・日韓アジア未来フォーラム                          | … 55       |
| ・S G R Aチャイナ・フォーラム                     | … 57       |
| ・関口グローバル研究会 ( S G R A )                | … 60       |
| ■ 渥美奨学生2007年度著作・発表論文・特許リスト             | … 62       |
| □ 付録                                   | … 73       |
| ・設立の趣旨について                             |            |
| ・2007年度収支決算、貸借対照表                      |            |
| ・財団人名簿                                 |            |
| ・奨学生名簿                                 |            |
| ・2009年度渥美奨学生募集概要                       |            |

## 「最も近い隣国とのさまざまな小さな交流」

渥美伊都子



渥美国際交流奨学財団はこの4月、新たに第14期生12名を迎え今までに奨学支援させていただいた方の総計が166名となりました。年々少しずつネットワークの輪が広がり30ヶ国に及ぶ事業が着実に伸びているのを感じ大変嬉しく思っております。これも一重に設立以来ご支援ご協力下さいました皆様方のおかげと心から感謝しております。

毎年韓国のソウルでは帰国した元奨学生の皆さんが、ラクーン会と呼ぶ同窓会を開いてくださいます。主人が手遊びによく狸を描いていたので、それに因んで第1期奨学生の皆さんが、そう名付けてくださいました。私は設立以来たびたびソウルのラクーン会に出席しましたが、一昨年4月に参りました時は、15名という大人数で、活気にあふれたにぎやかな会でした。韓国からの奨学生は総計41名となりましたが、大学で教鞭をとりソウル近郊に住む方々が多いため比較的集まりやすいのかもしれない。各々のお仕事の様子や生活の話聞き、私も日本のことを話したのですが、折しも韓流ブームの真っ盛りでもあり会話が弾みあっという間の3時間でした。

思い起こせば韓国との付き合いは古く、主人が鹿島建設の社長、会長時代、今から30余年前になりますが何度か韓国を訪れたことがあります。海外建設業協会(海建協)の会長であった頃、石油ショックを受け建設業は冬の時代でしたので、建設業も海外市場へ眼向け始め国際化を図らなければならなくなりました。その時主人は出遅れている建設輸出の環境を整えるため危機管理や輸出保険、優遇税制などを検討していました。

その折海建協が属している「アジア西太平洋建設業協会国際連盟」(IFAWPCHA)の第13回大会が東京で開催されることになり、主人がその会長を引き受けざるを得なくなりました。1974年の春のことです。アジア

太平洋15ヶ国から約千名の建設業者が集まり帝国ホテルで盛大な大会が開催されました。その時韓国の団長として来日されたのが大韓建設協会の会長の崔鐘煥さんです。初めてお会いしたにもかかわらず大変親しみやすく日本語も流暢でした。彼は日本の旧陸軍士官学校のご出身であることを後で知りましたが、主人と意気投合し、以後東京に来られる度に夕食を共にして語り合うのを楽しみにしていました。その後世界建設業連盟などの国際会議でたびたびお会いしているうちに、日本と韓国の建設業者間の民間協力機構を作ろうではないかということになりました。中東産油国の国土開発の仕事をする為に、日本の優れた技術力と海外工事の受注実績が2倍もある韓国とが協力する必要があると考えたからです。1977年4月に設立総会がソウルで開催され、以後毎年交互に会を重ねて現在まで続けられ、第22回総会は本年秋に東京で開催されるということです。

渥美財団ではもうひとつの交流事業があります。日韓アジア未来フォーラムと云うもので、韓国未来人力研究院と渥美財団が共同で事業を進めており、毎年交互に研究会を開催しています。

日本と韓国との間には歴史問題などギクシャクする事もありますが、最も近い隣国として昔から相互の交流は盛んに行われていました。また近年では漫画、音楽、映画などを通じて若者たちの熱い文化交流が益々盛んになって来ました。韓国の方々の暖かい心は日本人にも通じるところがあるといます。各々の小さい交流がお互いの信頼関係を築くものと信じています。今後、アジア共同体構想を実現させる為にも隣国、韓国との交流は最も重要なことと考えております。

## 「砕かれた日本ドリーム」

常務理事 今西淳子

元渥美奨学生の皆さんが中心となって活動している知日派外国人研究者ネットワーク「関口グローバル研究会（S G R A :セグラ）」では、S G R A フォーラム等のお知らせや、世界各地の会員から送られてくる日本語のエッセイや、会員だよりを「S G R A かわらばん」（註）として、毎週火曜日と金曜日に、電子メールで配信しています。

先日届いた「私の日本ドリーム」（S G R A エッセイ #118）という文章には、筆者の金政武さん（2000 年度渥美奨学生）のくやしさと怒りが滲みでていました。

中国人の彼は 31 歳になって人生の再出発のつもりで 2 つめの博士号をめざして日本に留学しました。学生時代は切り詰めた生活で、あらゆる即席ラーメンを食べつくし、月末にはお金がなくて何も食べられない日もあったそうです。それでも希望を持って、一生懸命「日本ドリーム」に向かって突撃しました。学位をとり、国立の研究所を経て大手電気メーカーで働くサラリーマンになり、日本で結婚し、子供を育てました。彼にとって、人生の一番重要なイベントは全て日本で起こったのです。日本はもう彼の故郷であるように感じました。そして、自分でも普通の日本人と何も変わらない、日本ドリームがついに実現したと思っていました。

来日して 10 年が過ぎたし、年を取って病氣療養中のお母さんと一緒に住まなければいけなくなったので、永住権か日本国籍を申請した方が良いと思い、入国管理局と法務局に相談に行きました。「答えは見事にノーでした。」帰化しても両親との永住同居は認めないとの事でした。「ショックだった。このような規定の理屈は十分理解できるものの、感情的にはどうしても受け入れられなかった。」そして、「どうがんばっても日本は私を受け入れない事を悟った。腹が空いても希望を持って徹夜し

ながらがんばっていたのは何のためだったのか、仕事が忙しくて、父の最期を看取ることができなかったのは何の、誰のためだったのか。実質両親を捨てたような形で、夢中にひたすら日本ドリームを求めて来た自分と家族の 10 年間はあまりにも空しく感じた。」そして彼のエッセイは「もう帰る時だ。一人で寂しく老後を送っている母が待っている。母と日本、私は母を選ぶ事にした」と結ばれています。

2005 年 11 月 23 日に開催された第 21 回 S G R A フォーラム「日本はどう外国人を受け入れるべきか：留学生」で、2005 年度渥美奨学生の王雪萍さんが発表した「改革・開放後中国政府派遣した元赴日学部留学生の日本認識」というご研究は、1980 年代に中国政府から日本に派遣された留学生を対象にした追跡調査に基づくものです。王さんのご研究よれば、もともと対日感情が悪かった人たちが、中国における準備教育で日本語を習い日本を知る過程で日本イメージが改善し、来日 1 年目に最高に達したことがわかりました。そして、少し慣れてくると悪いイメージもできますが、来日 6 年目と 9 年目あたりで突然悪化するという結果がでているそうです。王さんは、「なぜこの時にマイナス評価がプラス評価より上昇するか」といって、日本で働きたいと考える人が増えてきたのに、1980 年代なので外国人の就職の受け入れはあまりなかったのです。特に女性の留学生はほとんどこの時期悪い評価をしています。『女性に対する差別がある社会だ』という話がよくあります。就職 1 年目までこの傾向が続きます。例えば、就職してから会社の中で『よかったですね、中国人なのに我々と同じ給料をもらっていますね』などという話を聞くと非常に彼らは嫌な気分になります」と説明しています。差別される、排除されるという気持ちが、日本という国に対する評価を非常に大きく左右していることがわかります。

時代は大きく変化し、ここ数年は留学生が日本の企業の高級人材として注目されるようになっていきます。昨年からは始まった「アジア人財資金構想」は、経済産業省と文部科学省が「我が国企業に就職意志のある、能力・意欲の高いアジア等の留学生に対し、奨学金や人材育成から就職支援までの一連の事業を通じ、産業界で活躍する専門イノベーション人材の育成を促進する」と謳っています。具体的には「ビジネス日本語」や「日本企業文化」について、学習の機会を提供するとともに、インターシップの実施、各種就職支援などが含まれるのだそうです。対象は、来日から学位取得までの手厚い日本国政府奨学金、あるいはそれと同等の高額な奨学金を取得してきた留学生で、高度で実践的な人材を育成する事業として注目されています。

しかしながら、経済産業省がいくら旗を振って日本の企業に就職させても、外国人の高度人材を日本人と同様に受け入れる制度が日本になれば、やがて「どうがんばっても日本は私を受け入れない」と失望する高度人材が増えるばかりではないでしょうか。金さんの問題についていえば「日本人の配偶者等」が「家族滞在」という資格を得る場合の「等」は子供だけで親は含まれないということです。一方、アメリカ市民は親と兄弟姉妹に対しても永住権を申請できます。オーストラリアでは、10年間は年金をもらわないという保証をして医療保険費という名目で寄与金を払うと長く待たずに父母の永住権をもらえるとのこと。このような情報に接すると、日本を選んで来日し、日本に帰化してもいいとまで思った人たちさえ「留学先を間違えた」と思うようになってしまいうでしょう。そもそも母国の大学の同期でアメリカに留学した人たちは、既に芝生つきの一軒屋に住み、そこで生まれた子どもたちは自動的に市民権を取得します。最近では、留学せずに母国に留まった同期の方が広いマンションに住み、しかも資産価値が購入時より倍増していたりするのです。

2001年渥美奨学生の範建亭さんが送ってくださった「上海における人の国際化」(SGRAエッセイ #115)によれば、「80年代以降は海外留学がブームとなり、沢山の若者が夢を胸に出国した。『せっかく海外に出たので、故郷に帰ることを考えるな』と家族や友達に言われるばかりではなく、心の中でそう決心して留学した人も非常に多かったに違いない。ところが、近年では事情が一変し、留学先から帰国して仕事に就く人数がますます

増えている。新聞報道によると、1978年以降出国した留学生は昨年末で約100万人、そのうち帰国して就業している人は全体の三分の一に達しているが、大半はここ数年帰国したのである。そして、これらの留学生が帰国するときに、上海を選ぶ傾向が強いと見られるという。その理由は様々であろうが、沢山の元留学生がまた夢をみて上海で新たな生活をスタートさせた」ということですが、次のように続きます。

「奇妙なことは、同窓会の仲間の中には実際日本人に帰化した者も多いことである。彼らは身分上もう中国人ではないが、ずっと上海で暮らしている。日本には何も残っていないから、戻ることはもうないだろうと思う。そして、中国の国籍に戻ることも不可能である。当初は日本で暮らすために帰化したのに、今は外国人として祖国で暮らす。その現象は日本留学の仲間に限らず、親戚や周りの人々にもそのような『日本人』や『アメリカ人』などがよく見られる。昔はみんな逃げるような気分で出国したことを思い出すと、その変化は本当に感慨無量である。」

グローバル時代の高度人材たちは国境を越えて自由自在に飛び回ります。日本政府が少子高齢化対策のひとつとして高度人材の移民に期待しているのであれば、彼らに「差別された」とか「排除された」とかいう失望を与えないよう諸制度を整備することが大事でしょう。日本の社会は清潔で安全で秩序があつてとても暮らしやすいですが、世界的に流通性が高いとはいえない日本語を学習した末に、国籍によってその社会から排除される可能性が高いのであれば、彼らにとって魅力的ではないでしょう。

しかしながら、グローバル時代の高度人材たちを本当に惹きつけるためには、何よりも「夢」を持つことができる社会を作らなければいけないと思います。それは、外国人のためだけではなく、日本人にとっても大切なことなのです。

(註)SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読していただけますので、ご希望の方は渥美財団事務局へご連絡ください。現在購読者は約580名です。

# 交流事業・思い出

## 見学会

### 2007年度奨学生、首都高速中央環状新宿線シールド工事現場を見学

2007年7月3日、それは2007年度の渥美奨学生にとって忘れない一日となりました。渥美財団と鹿島建設のおかげで、一般の方が普段立ち入ることのできない大規模地下トンネル工事の首都高速中央環状新宿線の現場を見学することができたからです。都心の地下の高速道路を作るこのプロジェクトは東京都の交通および環境の改善に大きな意義がありますが、世界でも最先端のシールドトンネル建設技術を使っています。

午後2時、今西常務理事、嶋津事務局長はじめ、世界各地からの留学生は工事現場事務所に到着し、鹿島建設の方々から暖かい歓迎を受けました。今回参加した奨学生は世界から集まった留学生であり、大学院博士課程で土木に限らず様々な分野を専攻しています。日常生活に係わっている道路や水道、電気などインフラの作り方は知りませんから、今回の見学に興味津々でした。鹿島建設工事事務所の森口所長からの説明は30分の予定でしたが、たくさんの質問によって大幅に延長されました。また、施工現場で使ったカッタービットやセグメント継手用のボルトを見たり触ったりすることができ、トンネルの現場を見る前に、留学生たちはもうすでにすっかり感心してしまいました。

森口所長の説明によると、鹿島が担当している首都高速中央環状新宿線の工区は、初台立坑から2660m先の到達点松見坂到達立坑の区間です。今回の見学ルートは神山換気所から50m地下に下りて、渋谷の到達立坑まで約1kmの完成したトンネルです。この工区に使用したシールドマシンは外径約13m、重量約2500t、機長12.8m、マシンを前進させる総推力は約17万kN、土を削るカッターの回転トルクは約24000kNm。このマシンは先端技術—カッタービット交換装置を採用しています。土の掘削により磨耗したカッタービットや切羽状況に応じてカッタービットを、機内中央バルクヘッド部に設けたマンホールから作業員がカッターディスク内に入り交換作業を行うことができるのです。これにより約1600mの礫層区間を含む2660mを、中間立坑なしで掘進可能となり、工事のコストが削減できました。また日本初のエアバブル方式を採用しています。これはチャンバー内にエア室



を設け、エアーの吸排気調節によって切羽の水圧を制御でき、緊急圧がかかった場合もその圧を抑止する役目を持っているそうです。

留学生からは、「どうやって穴を掘るか、掘った土はどうやって出すか」、「マシンはどうやって前に進めるか」、「どうやってトンネルを造ったか」など質問が次々出され、森口所長は皆が納得するまで丁寧に答えてくれました。「穴を掘るのはシールドというマシンを使う。外から送った泥水により先頭のカッターを付けた円盤(カッターヘッド)の安定性を図りながら、カッターヘッドが回わって土を削り、その掘削土が泥水状として、排泥ポンプと排泥管により外の処理設備へ運ばれる。処理した泥水をカッターチャンバーに再び運んで再利用する。1リングの長さの穴を掘ったら、セグメントをマシン中に組み立てトンネルの本体を造り、それがシールドマシンの前進の反力台となってジャッキによりシールドを前進させる。」最後には、質問から議論にかわり、東大の鄧さんが、シールドマシンの胴体は、深い地下の土水圧に耐えるために、今研究中の飛行機に使われる CFRP 先端材料を使えばよいのではないかと提案しました。議論の末、結局はコストが高いので、残念ながら断念されました。

午後3時半、いよいよ見学が始まり、皆ヘルメットをかぶり軍手をして、神山換気所に到着しました。そこから階段で、地下50mのトンネルに降りました。最初感じたのは地下の涼しさと土の匂いでした。トンネル中でも、森口所長の説明を聞きながら、松見坂の立坑方向へ歩きました。留学生からの「セグメントはどうやって組み立ててるのか」という質問に対して、「セグメントを最初両側から下から上の順に組み立て、最後に楔状の系Kセグメントを使って、一リングのトンネルを完成させる」と丁寧に教えてくださいました。終点に到着したとき、見学者は、本物のシールドマシンの直径約15mのカッターヘッドの前で、驚き、感心の様子を隠せず、森口所長の解説を聞きながら、記念写真をたくさん撮りました。午後5時、現場見学が終わり、再び工事事務所に戻って、鹿島建設の皆さんに感謝しながら、工事現場事務所を後にしました。

今回、地下道路トンネルの建設を勉強でき、日本のもの造り技術の素晴らしさを改めて感じることができました。留学生一同、この有意義な社会勉強の機会を提供して下さった鹿島建設と渥美財団に、深く感謝します。

見学会の後、奨学生たちは新宿京王デパートの屋上のビヤガーデンで、長い階段の昇降と、長い地下トンネルを歩いた体を休めました。話題は次第に「中国に今、民主主義は必要か」に移り、白熱した議論とともに中ジョッキの注文数も増したのです。(文責：王剣宏 2007 ラクーン)



## 軽井沢旅行

### 軽井沢旅行に関する不完全な報告或いは告白？

私が今年の軽井沢旅行について報告するなんて、どう考えても申し訳ない気がする。あまりにも不完全すぎる気がする。まずその所以を告白しなければならない。私の軽井沢旅行は、7月20日からの日程を翌日に遅らせて駆けつけることで始まった。しかも、新幹線の軽井沢駅を乗り過ごし、長野の風景を眼にするという、またとない機会までつくって、財団の方々を心配させながら、だった。こんなわけで、私の旅行報告なんて、当然不完全すぎるに決まっている。なのに、こんな私に今度の旅行を語ることが許してくれた、今西さんをはじめみなさん、ありがとうございます！（これが二つ目の告白！）

さてさて、長野駅から慌しくたどり着いた軽井沢は、東京の強烈な緑とは一段と違う神秘的な淡い緑色で染まっていた。駅からタクシーで5分ほどかかる研修センターは、まるで別世界。嶋津さんと谷原さんが笑顔で迎えてくれた。午前中の自由時間を過ぎて、食堂に集まっていた同期たちは、軽井沢の空気にすっかり馴染みきった顔で、前日の軽井沢巡りやオリエンテーションについて楽しげに話してくれた。その和やかな雰囲気に包まれ釜飯を食べながら、私も段々軽井沢に、そして今年度の渥美財団旅行に馴染んできた。

ゆったりとした昼休みの後に、午後2時から研修センター会議室で第28回SGRAフォーラム「いのちの尊厳と宗教の役割」が開催された。普段の生活で当たり前のように見過ごしてしまう「いのち」の問題を、さまざまな視点や身近な事例から問い直し、食後の眠気に襲われていた脳を強く刺激するものだった。研究領域や仕事の分野を全く異にする人々によって行われた、人間の生と死に迫る議論は、会場を活気付けた。



この活気は夕食時間にもつづき、食堂は様々な声のリズムで快く満たされた。そのなか、嶋津さんの呼び声で出てみたところ、研修センターの前庭は、前日に雨のため出来なかった花火でお祭りのようだった。庭を駆け回る子供たちに、大声で笑う大人たち、そして飛び散る火花。ちなみに、私のお気に入り「チョー地味な」線香花火で、人々と競って何回もそれを楽しんだ。

花火の余韻を漂わせながら再開したパネル・ディスカッションは1時間半ほどで幕を閉じ、その後、再びロビーに流れ込んだ人々は、用意された冷たいビールを飲みながら、それぞれのテーブルを囲んで話しはじめた。軽井沢の夜は、いくつかの国境を何回も越えたかのような意気込んだ話し合いであっという間に過ぎてしまった。遠くから朝が訪れることに気付いて、部屋に戻り、眠れたかどうか。

朝食に行く人々の足音に目覚め、急いで朝食を済ましてからは、詹彩鳳さん、李垠庚さん、金玟淑さんと一緒に軽井沢巡りに出かけた。研修センターの南側にある塩沢湖を散策しながら写真を撮ったりペイネ美術館の可愛らしさに騒いだりした後、一行は、20世紀美術のコレクションを誇るセゾン現代美術館に向った。立派な正門と彫刻庭園の奥に位置する美術館で、普段はなかなか見られない作品たちに出会い、随分興奮して展示室を駆け回った。そして、軽井沢旅行の3日目のイベントとなるバーベキュー・パーティに期待を膨らませながら、理事長の別荘に足を運んだ。軽井沢の淡くてきれいな緑に囲まれ、すでにバーベキューは始まっていた。アブドシュクル・メジデさんのウィグル式バーベキューとにんじんライスに、原嘉男さんのおでん、韓国人の先輩たちが用意した焼肉、そしてテーブルの上にずらりと並んだ各種のサラダとキムチ等等は、きっと皆を幸せにしてくれただろう。それにスイカ割りと井上ウィマラさんの素敵なお歌。もちろん、最後は、谷原さんのカメラの前で記念撮影! だった。



これが私のあまりにも不完全な旅行報告であるが、最後にもう一つ告白。こんなに楽しいとは思わなかった。また、多様な人々の世界に接し改めて自分をかえりみることができた、ダイナミックで充実した時間だった。理事長をはじめ渥美財団のみなさん、そしてこんなに貴重な旅行と一緒に楽しんだみなさんに、ありがとうございます! と申し上げたい。(文責: 朴昭炫 2007Raccoon)

□ 離れ山ハイキング



□ 花火&スイカ割り



□ SGRA フォーラム「いのちの尊厳と宗教の役割」



□ BBQ



## 渥美奨学生の集い

2007年度の「渥美奨学生の集い」は、11月2日（金）午後6時より、渥美財団ホールで開催されました。今年の特色は、本年度奨学生、元奨学生、財団役員に加えて、鹿島建設の関係者や鹿島家の親戚の方々も参加したことでしょう。というのも、今年は、渥美財団の選考委員で名古屋大学教授の平川均先生が「鹿島守之助とパン・アジア主義」というテーマのご研究の成果を発表してくださったからです。ご講演の後、渥美奨学生との活発な質疑応答があり、議論はそのまま懇親会に至り、参加者全員にとって、非常に有意義で楽しい集いとなりました。



渥美伊都子理事長の父、鹿島守之助博士は、戦後、鹿島建設を世界一の規模の会社に発展させた昭和期を代表する卓越した実業家として知られていますが、同時に外交史研究者であり、政治家でもありました。研究者として多数の出版物を残し、日本の外交研究とそれに関する活動にも多大な貢献を果しましたが、守之助が外交官としてドイツに赴任し、パン・ヨーロッパ思想を提唱していたクーデンホーフ・カレルギー博士に出会った1920年代後半以降、生涯を通じて、独特なアジア主義者として「アジア連盟」あるいは「アジア共同体」の理想を追求した人物であったことはあまり知られていないかもしれません。守之助が1973年に、生家・永富家の一角に「わが最大の希願は、いつの日にかパン・アジアの実現を見ることである」と刻んだ碑を建立していたことを知れば、意外に思う人がほとんどでしょう。平川先生は、守之助の国際政治や外交に関する膨大な著作や政治活動の軌跡を辿り、彼のアジア主義はどのような思想であり、その思想に駆り立てたものは何か、彼の思想が「大東亜共栄圏」によって象徴される日本のアジア侵略の試練とどう関り、その試練をどう潜り抜けてきたか、彼の構想が戦後むしろ省みられないできたのは何故かなどを、パワーポイントを使いながらわかりやすく説明してくださいました。そして、東アジア共同体への関心が21世紀に入って急速に高まっている現在、鹿島守之助のパン・アジア論をもう一度正しく評価すべきではないかと結論づけられました。

質疑応答では、今年度奨学生からの「当時のロシアはそうのように脅威を感じる必要はなかったのではないか」「日本の知識人が戦争をどう乗り越え、戦後どのように対応していったかは大きな課題なのではないか」「インドを含



む旧植民地の独立戦争支援ではなかったが、関心はあったのではないか」「鹿島氏は最晩年になってアジア太平洋共同体からパン・アジアへ戻ったが、その考え方は現在反映されていると思うか」などの質問に対して、平川先生は丁寧にお答えくださいました。

後半の懇親会では、参加者全員が美味しい中華料理を楽しみ、歓談と交流の宴は例年より遅く午後10時ころまで続きました。（文責：今西淳子）

## 2008 新年会

2008 年 1 月 12 日 (土) 12 時から午後 4 時半まで、渥美国際交流奨学財団新年会が開催され、奨学生とラクーン会員及び家族 40 人が、同財団ホールに集まりました。参加者は皆、おせち料理やおもち、焼き鳥、小籠包などおいしい料理によって、寒い雨の中でも家族の暖かさを深く感じました。中国からの五糧液酒 (アルコール度数は 52 度) はとても珍しいもので、独特な香りが出て、飲まない人もその香りを楽しむことができました。

おせち料理と理事長の挨拶の後には、特別なプログラムが用意されていました。それは有名な馬頭琴演奏家のチ・ブルグッドさんと西郷美炎子さん夫妻、そしてピアノ演奏家、則岡徹さんたちのすばらしい馬頭琴演奏でした。馬頭琴演奏を見たのは生まれて初めてだったので、本当に感動しました。特に、今年の北京オリンピック開幕式にも演奏されるチ・ブルグッドさんが作曲した『東の空』という曲はとても魅力的でした。もし機会があれば、もう一度聞きたい気持ちです。

参加者全員の紹介以後、恒例のビンゴのゲームをしました。今年は第一期奨学生の王立彬さんの息子シンさん (慶應義塾大学経済学科 2 年生) が担当しました。参加者全員が熱心にビンゴを完成していったのに、今年度の奨学生スラヴァさんだけがビンゴにならなかったのですが、最後まで頑張って賞品をもらうことになりました。ビンゴを完成して喜んでいる子供たちの顔が本当にかわいかったです。来年は僕も子供を連れて参加しようと思いました。



今年の 1 月 25 日には、渥美理事長が 80 歳のお誕生日 (傘寿) を迎えられることになりました。突然なお知らせでしたが、全振煥さん (2001 狸) がリーダーシップを発揮して、李済宇さんと梁明玉さん (ともに 2004 狸)



が協力して準備したバースデーケーキとお祝いの花束を、参加者全員が心を込めて理事長に差し上げました。そしてお祝いのシャンパンとともに、日本語、英語、中国語、韓国語、台湾語、ウイグル語、ロシア語、スペイン語で誕生日のお祝いの歌を歌いながら、みんなのお母さんである理事長のご健勝とさらなるご活躍を心からお祈りしました。(文責：李成日 2006 Raccoon)

## 2007 年度研究報告会

2008 年 3 月 1 日（土）午後 2 時から、東京都文京区関口の渥美財団ホールにて、2007 年度渥美財団研究報告会が開催され、恒例の当期渥美奨学金受給者 12 名の研究成果の発表が行われました。参加者は今期・来期の渥美奨学生、ラクーン会（同窓会）会員、財団役員、留学生支援財団の方々など、約 50 名でした。

最初は、渥美伊都子理事長の挨拶で、今年理事長が 80 歳になったこと、1 月の新年会でいろいろな国から来ている渥美奨学生からそれぞれの母国語でバースデーソングを歌って祝ってもらったことへのお礼と感慨、そしてホールに飾ってある雛人形についてお話がありました。次は、2007 年度渥美奨学生 12 名の博士論文の研究内容発表がありました。発表者には事前に「子供にもわかるようにやさしく」、「研究に対する情熱を伝えて」、さらに「15 分以内で」という 3 つの大きな課題が与えられておりましたため、開場前には発表者の間で緊張感が漂っていましたが、自分の順番が回ってくると皆堂々たる雰囲気になっていきました。特に、今回のプレゼンテーションは奨学生全員がカラフルで綺麗な図版を用いた上で、説明とのリンクも上手く、自分の専門外の発表でも楽しみながら聞くことができました。しかし、議論が好きな人や喋るのが得意な人が多いことで有名な 2007 年度の渥美奨学生にとって 15 分という時間の制限は厳しく、質疑・討議なしの発表のみでも予定時間より一時間近くオーバーしてしまいました。

研究発表の後、渥美奨学生の王剣宏さんの指導教授である小泉淳先生（早稲田大学理工学研究科教授）と（財）ロータリー米山記念奨学会の坂下博康事務局長、渥美財団選考委員の平川均先生（名古屋大学経済学部教授）よりコメント及び励ましの言葉を頂きました。先生方は半日で様々な分野の研究の話を聞ける贅沢を味わったとおっしゃった後、世界の国々から来た留学生が何年もかけて研究してきた博士論文の内容を日本語でプレゼンテーションする、それもたっ



た 15 分で説明しなければならない難しさについて述べられ、母国語なら大丈夫でしょうと励ましてくださいました。温かい目で見守ってくださって、ありがとうございました。

最後に、S G R A 運営委員のマックス・マキトさん（95 狸）による S G R A（関口グローバル研究会）の紹介がありました。その後、懇親会が開かれ、参加者は渥美財団で用意して下さったご馳走を食べながら歓談は続き、気が付くと時計の針は夜 10 時に向けて走っておりました。とても楽しくて、有益な時間を過ごした一日でした。来年度も、引き続き 2008 年度渥美財団研究報告会が開かれると思いますが、どういう話が待っているか、またどういいう出会いが待っているか、想像するだけでわくわくします。

理事長をはじめ渥美財団の皆様、そして今回ご多忙中にも参加くださった関係者の皆様、ありがとうございます。来年度も宜しく願い申し上げます。（文責：キム・ミンスク 2007Raccoon）

□ 来賓挨拶



早稲田大学理工学研究科教授  
小泉淳先生



(財)ロータリー米山記念奨学会  
坂下博康事務局長



名古屋大学経済学部教授  
当財団選考委員 平川均先生

□ 2007 年度奨学生



□ 懇親会



■ 発表テーマ

アブドシュクル メジテ「肝移植におけるリンパ球の免疫抑制薬感受性に関する検討」

詹 彩鳳「ネルー政権におけるインドの北東辺境及び少数民族政策：ナガ問題を中心に」

鄧 飛「航空宇宙分野に用いる軽くて強い新材料の開発および評価」

ガンバガナ「日本の対内モンゴル政策とモンゴル人の対応（1933-1945 年）－日本の外交政策からのアプローチ－」

金 玫淑「植民地朝鮮における歴史的建造物の保存と修理工事に関する研究－修徳寺大雄殿修理工事を中心として－」

李 垠庚「近代日本女性キリスト者の思想、生活、そして戦争－羽仁もと子とその時代－」

朴 昭炫「『近代美術館』をめぐる公共性の歴史的構造」

オスカル ポラス ロハス「中米地域における海難事故での死者および行方不明者数削減策の研究」

権 明愛「広汎性発達障害をもつ子どもの発達支援における『手がかり』要素に関する研究」

シュラトフ ヤロスラフ「日露戦争から第一次大戦までの日露関係（1905-1914）」

王 剣宏「大深度水道管の座屈挙動および設計に関する研究」

顔 海念「先天性サイトメガロウイルス (CMV) 感染の分子疫学的研究：ウイルス遺伝子型と臨床病態の関連」

写真は研究発表の 2007racon の皆さん（上段より、左から右へ発表順）



## 2007年度渥美奨学生のエッセイ

|              |                              |         |
|--------------|------------------------------|---------|
| アブドシュクル メジテ  | 「臓器移植と倫理問題」                  | ---- 16 |
| 詹 彩鳳         | 「博論を生む、子供を産む」                | ---- 17 |
| 鄧 飛          | 「研究者になることとは」                 | ---- 18 |
| ガンバガナ        | 「故郷」                         | ---- 19 |
| 金 玟淑         | 「日本の茶室空間」                    | ---- 20 |
| 李 垠庚         | 「韓流とともに歩む」                   | ---- 21 |
| 朴 昭炫         | 「春が消えてゆく、という感覚について」          | ---- 22 |
| オスカル ポラス・ロハス | 「私と日本の縁」                     | ---- 23 |
| 権 明愛         | 「私の留学生活」                     | ---- 24 |
| シュラトフ ヤロスラブ  | 「日露学生会議」                     | ---- 25 |
| 王 剣宏         | 「持続的な発展をめざした都市開発～日本の経験に学ぼう～」 | ---- 25 |
| 顔 海念         | 「日本で学んだ大切なことと良い思い出」          | ---- 27 |

## 臓器移植と倫理問題

アブドシュクル メジテ  
**Abuduxukuer Mijiti**

東京医科大学・博士（外科学）

東京医科大学研究員

私は日本へ来る前、中国の新疆ウイグル自治区で一般外科・肝胆臓器外科医として12年間勤務しました。その頃は外科学会への参加や医学雑誌などを通して臓器移植に関する知識を学びましたが、実際に臓器移植の手術に関わる事はありませんでした。そんな私が臓器移植に興味を持つようになったのは日本へ来てからのことです。2002年11月から北里大学病院の外科の臨床研究生として留学中に幸いにも当病院第5例目の生体肝臓移植手術を見学させて頂きました。手術は16時間で無事に終わり、重い肝臓病で寿命が半年間と診断されていた患者さんが、手術の2週間後に食事をとり、自力で歩くことが出来るようになり、40日後に退院されました。1年後に元気な姿でお会いした時、半年前に仕事に復帰したとのことでした。私は大変驚くと同時に臓器移植に興味を持ち、東京医科大学移植・一般外科の博士課程に入学しました。この外科講座に在籍している間に、28例の肝臓移植と33例の腎臓移植に参加することが出来（外国人医師が日本で臨床修練を行う場合は厚生労働省の外国人医師臨床修練許可が必要であり、私は外国人医師臨床修練許可書を取得しました）、研究も順調に進んで博論も早い段階で出来上がりました。近く帰国して臓器移植の臨床と研究を行うことになりましたが、臓器移植は臨床知識だけでなく、臓器移植倫理の知識も臨床知識以上に重要であると思っています。そこで、臓器移植と倫理問題について少し書いてみたいと思います。

臓器移植は21世紀の外科の頂点とされていますが、医学的な問題以外に倫理的な問題が社会的な議論になっています。例えば、脳死の判断基準（国によって違います）、生体移植の妥当性、臓器売買等です。

先進国の多くは脳死を人の死として認定する方向へ進んできています。日本でも1997年に脳死が認められるようになりました。当時、日本でも脳死が認めら

れたことで臓器移植医療は大きく発展すると思われました。しかし、脳死臓器移植法が認められて10年経った今でも脳死からの臓器移植件数はあまり増えていないのが現状です。これは、死生観という極めて個人的な事を、国などが決定する権利は無いと感じる人が多いからです。また、それ以外に土着の風習や慣習、倫理、道德感、伝統等にも大きく影響されていると考えられます。

こんな状況の中、生体移植が増えることになりましたが、脳死移植も含めた臓器移植の件数は、アメリカと比べると非常に少ないです。2005年のデータで＜アメリカ：日本＞は腎移植が16478：994件で、肝臓移植は6444：566件、心臓移植は2160：7件です。

何故日本の臓器移植数はこんなに少ないのでしょうか？他の国々とこれほどに差があるのは、日本の臓器移植法が「本人の生前の署名」を臓器提供の必要条件としていることが大きな理由です。このような条件をつけている国は他に無く、世界保健機構（WHO）でも本人の生前の意志が判らない場合には、提供は家族の判断に従うことが示されています。臓器提供を受ける側の立場に立って考えると、日本でも本人の生前の意志が判らない場合には、家族の判断に従うことを推進すべきであると私は考えます。

生体臓器移植には消極的意見も少なくありません。健康な人から臓器を摘出するのは医者或いは提供者にとっては大きなプレッシャーであるからです。いい結果が得られなければ、せっかくの好意も無駄になる可能性もあります。日本では生体（肝、腎）移植が主流で、世界的にもリードしていますが、臓器提供者の安全問題が無視できないのは、非常に少ないながらも提供者の後遺症や死亡例があるからです。このような問題をどう解決するかは、今後の臓器移植医療に大きな影響を与えると考えられます。

2006年には、腎臓移植がマスコミで大きく取り上げられ、賛否両論に割れて大きな議論になりました。擁護する側は主にレシピエント側から、否定的な立場はドナー及び倫理的な問題を主張しました。厚生労働省は腎移植は現時点では医学的妥当性がないとして、臨床研究以外の腎移植を原則禁止する方針を打ち出しました。皮肉にも、日本の腎移植に関する論文が今年のアメリカ移植関連学会で受賞し、日本の腎移植が国際

的に認められました。この問題に対して、私は賛成の立場であります。

最後に臓器売買の問題ですが、アジア、アフリカの一部の国で、生体腎移植のための腎臓の売買が行われているのは事実です。これらの国では極度の貧困問題が存在し、貧困がもたらす非人道的行為は臓器売買に限りません。このような問題の解決は容易ではありませんが、国際移植学会の倫理委員会は看過できない問題として、臓器売買を禁止する倫理指針を発表しました。欧米では臓器売買は法律で禁止されており、日本でも臓器移植法案で明確に臓器売買の禁止を定め、罰則規定を設けることになっています。家族の幸せのために自分の腎臓を売するという考え方は決して正しいとは言えません。臓器移植の臨床と研究を行う一人の医師として、私は今後大変難しい問題に直面する場合がありますが、倫理問題を決して忘れてはいけないと思っています。

## 博論を生む、子供を産む

せん さいほう  
詹 彩鳳

東京大学（地域文化研究）

私は来月（5月）の中旬に第二子の出産を控えている。本来、論文を完成してから出産を迎える予定だったが、それは甘い誤算だったようで、順番が逆になってしまった。どうも博論より、子供を産む方が易しかったようである。

指導教官は、里帰り出産する前の最後の面会の席で、予定通り私が論文を提出できるとっておられたようだ。だが、それには間に合わなかった。失敗の原因は過去一年間、私が余計なことをやり過ぎたことにあるのではないかと指導教官に指摘された。先生が私の妊娠のことも含めておっしゃっているのかどうかはわからない。確かに去年は忙しすぎた。前半は論文投稿に追われ、そして学会発表にも申し込みをした。結局、学会への参加は指導教官に止められたが、その後、生まれて初めての本格的な就職活動も欲張って行ってき

た。しかし、自分としては、博論もそれなりに頑張っていたつもりであった。

ふりかえってみれば、私は他の最終学年の友人たちと全く同じようにやっていたと思う。計算通りうまく行かなかったのは、やはり己の能力の問題なのではないだろうか。それとも妊娠したことが間違いだったのだろうか。

こうした疑問に対して、今の私には答えを出すことができない。だが、考えるより、早く論文をまとめる方が現実的であると思う。なぜなら、人生のシナリオは何回も書き直したり、やり直したりできるものではないからだ。人はそれぞれ異なる信念を持ち、最善を尽くし、総合的に判断して行動し、その上で結果を待つしかないのである。

以下に、博論を書いた過程を振り返りながら、日本での留学生活の最後の1ページを綴り、お腹の子と共に頑張ってきた10ヶ月間の記念にしたいと思う。

私が本格的に博論の執筆に取り組みはじめたのは、2006年の夏に上の子を台湾の保育園に入れてからである。わが子と離れ離れの辛さに耐えて、2007年の初頭によく研究の最初の成果を投稿論文にまとめた。しかし論文の出来は期待通りにはいかず、編集者の先生のご好意で、何度も貴重なご意見をいただき、書き直し作業が夏まで続いた。年末に出版された雑誌を見たときは、出産以来久しぶりの業績に感激した。

その後、博論の執筆にも少し自信が付いてきた。心身ともに多少余裕ができた矢先に、第2子の妊娠が判明した。高齢のため、授かったら喜んで受け入れることしか考えなかった。だが去年の残暑の格別な暑さと悪阻には悩まされた。それでも私は、寮で唯一冷房のきいた地下食堂に避難し、9月末まで暑さを凌いだ。10月に1回台湾に帰り、初期検査で胎児の染色体に異常なしという結果をうけ、ほっとした。その後日本での健診で、胎盤の位置が低い、胎児が比較的小さいと言われても、さほど心配にならなかった。博論のことで精一杯で、他のことに気を配る余裕がなかったからである。

今年の3月の最終審査に間に合わせるためには、博論の予備審査を年内に開かなければならず、2007年はそのことに迫られる毎日だった。結局、初稿を書き終えて予備審査を開いていただいたのは今年の1月25

日であった。その時、もうすでに出遅れていたとわかってはいたが、まだ希望は捨てられなかった。審査の5人の先生方から予想以上の厳しい意見をいただいたことは、素直に受け入れざるを得なかった。その結果、論文の3分の1以上を2ヶ月余りで書き直すことになった。

決して未だ満足できる博論とは言えないが、やっと指導教官に8割程度の出来と認められ、ここまで辿り着いた自分に「お疲れ様」と言いたい気持ちだ。また、過去1年の間、お世話になった先生方、英語や日本語を一所懸命添削してくださった方々、渥美財団と奨学生の皆さん、台湾にいる家族、そして最後に10ヶ月間近くお腹にいるわが子に感謝を捧げたい。

## 研究者になることとは

テン フィ  
鄧 飛

東京大学（先端エネルギー学・ナノ複合材料）  
学術振興会外国人特別研究員

私は現在、東京大学大学院新領域創成科学研究科でナノ複合材料に関する研究（勉強）をしています。これは運よくも優れた研究環境に恵まれています。“運よくも”というのは、私は実験系の研究をしております、高額な実験設備を要するにもかかわらず、それを自由に使えることです。これは運がいい以外の何ものでもありません。良く「東大はお金があるから実験設備はたくさんあるよね」って言われますが、それは結果論でありまして、研究費の獲得はどの大学にも平等であるからです。私の研究室には多くの学生が在籍し、それぞれ異なるテーマを受け持ち、それぞれ違う実験設備が必要です。これだけの設備を有する研究室で研究ができることは本当に運がいいことだと思います。

「研究者は崇高な人たちである」と私はずーと考えていました。その人たちは聖人であり、現実問題など考える必要がないものと思っていました。それが今は、研究にとってお金や人脈は必要不可欠と考えるようになりました。一体何がどうなってしまったのかと思い

ます。そもそも私が研究者になりたいと本格的に思うようになったのは高校生の時からです。研究者である父の影響が主だったと思います。大学受験の時も迷わず工学系を選び、卒業のときもごく当たり前のよう大学院に進みました。修士を終了すると、使命を感じながら博士課程に来ました。研究者とはどのようなものであり、どうでなきゃいけないのかをそれほど考えませんでした。おそらく小さいころからのイメージがあり、最近までその像が変わっていなかったからだと思います。研究は崇高なものであると。

私の同期や友人で博士課程に進んでいる人たちに進学した理由を尋ねると、二通りの答えが返ってきます。それは、日本人と中国人の答えであり、見事に違います。日本人は理想であり、中国人は現実である。日本人はきまって「研究することが好きだから」、中国人は「将来いい生活をしたいから」になります。しかもほとんどがこのような答えです。本来研究者に求められるのはオリジナリティなのに、こうも同じことしか考えていないようでは、考えものでもありますが、それを議論することはやめましょう。私はどちらに属するかと言うと、ちょうど真ん中だと思います。

この研究者になる理由の違いには多くの要因があると思いますが、個人の家庭環境が多く影響しているのは間違いないと思います。留学している中国人は、現実問題に常に直面しながら進学をしている人がほとんどです。現実問題とは、在留ビザ、日本で生活することや親類の期待などが挙げられます。日本人の中で親戚に期待されているから博士課程に来たという人はいないと思います。親戚と自分の将来は何も関係がないからです。これも一種の現実問題ではないでしょうか。いくら中国が経済発展を遂げてきたとはいえ、日本や先進国とはまだ大きな経済ギャップがあり、中国では営むことのできない生活をするには海外へ行くしかない、海外で人並みに生活するには知識の頂点である博士号を取ることで成し遂げられると多くの中国人は考えています。これはまさに現実です。人類の役に立ちたい？それは自分の役に立ってからの話です。

果たして本当に研究者になれば、“人並み”の生活ができるのか？私が博士号を取り、実証してみたいと思います。

## 故郷

ガンバガナ  
Gangbagana

東京外国語大学（地域文化研究）

これは10年ぶりの生まれ育った故郷への訪問だ。ここには幼い頃の数多くの思い出が残っている。当時、私は山のぼりが大好きで、よく山に入って杏、モイル、ウレル、オラーガナなど、野生の果物を拾って食べていた。時にはキノコ採りに行ったり、家畜を探しに行ったりもしていた。今回、私が里帰りを決断したのは、時間の流れにつれて薄れていく少年時代の記憶の再現と、故郷の土から新たなエネルギーをもらうためである。

しかしながら、私のその思いがいかにも愚かで、なおかつ幼稚であったかということ、私が故郷の土を踏むや、悟ったのである。というのは、この10年の間に、私の故郷は余りにも大きく変化していたからである。

翌日、私は車で草原へ出かけた。そこは私にとっては知恵と命の源であり、昔は至る所が家畜の群れであふれていた。ところが、今は、その風景はまったく変わっていた。群れる家畜どころか、人の影さえほとんどなかった。その瞬間、私の心が空しくなった。その原因を隣に座っていた運転手に聞いたところ、彼は、「近年、環境保全型移民政策の導入によって、多くの人々が故郷を離れ、町に移住することを余儀なくされた」と、説明してくれた。なるほど、最近、話題となっていたいわゆる「生態移民政策」とはこんなものなのか、以前本で読んでいたことを、こうして身体で実感することとなった。だが、正直に言えば、こうした現実を素直に受け入れる勇氣は私にはなかった。とりわけ、生まれ育った故郷から追い出された人々の現状を考えると胸が痛くなった。

私は、せっかくの里帰りなので、変なことを考えない方がいいと、自分に言い聞かせるように呟き、現実から逃避することを試みた。まさに自分との戦いであったが、思い通りにいかなかった。西の方を眺めてみた。列車が走っていた。鉄道ができたことがわかった。何のためのものか、私の方ではさっぱり分からなかった。

そうしたら、運転手が、北のほうで露天炭鉱が発見されたからだと教えてくれた。昨夕テレビで、これからは産業開発を重点的に行うというニュースが流れていたことを思い出した。

だけど、そこは私にとっては、思い出の場所なんだよ。当時、そこには、「ボログース」という柳の枝のような植物が大量に生えており、冬になると、ウサギの罾を仕掛けただよ。今は砂漠と鉄道以外はなにもない。その変化の速さに私は驚いた。

いったい、なぜこんなに猛スピードで砂漠化が進行しているのか、最近の研究、記事などについてちょっと考えてみた。海外の研究では、漢人の入植と開墾に一因があると主張しているのが多いが、中国では、家畜の増産、とりわけヤギの繁殖にその原因を求めているようだ。またも政治と学問の癒着か。運転手の見解も後者であった。私は反論しようと思ったが、途中であきらめた。彼には彼の事情、私には私の人生があるからだ。

しばらくして喉が渇いたことに気づいた。この辺で、誰かの家に寄ってお茶でも飲ませてもらおうかと、運転手に聞いた。みんな移住してきているからおそらく無理だろうとの返事だった。仕方がない。なら、先祖から祭られてきたあの聖なる山に登って、祈りをささげてから帰ったらどうかと聞いた。彼は同意してくれた。

二人で山へ向かって車を走らせた。まもなく検問所に行き当たった。「自然保護区」との看板が掛けられ、観覧するだけでも、料金を払わなければならないことになっていた。さらに、不思議なのはその経営に当たっていたのは、南の方からやってきた開発商人であった。違和感があったが、従うしかなかった。私はその検問所に立っていた人をじっと見つめた。どう見ても違う顔であった。それが私にできる唯一のことであった。自分の無力さを痛感させられた。

もう充分、私は何も語らずひたすら山頂へ向かった。頂上に着くや、モンゴル人の慣習どおりオボー（石を円錐状に積み上げたもので土地の守護神が宿るとされている）を三周回り、合掌しながら祈りをささげ、最後に、自分のもってきた供物を供えておいた。すると運転手が、「気持ちを表すぐらいでいいじゃない。何を供えておいてもすぐ持って行かれちゃうから」と言っ

た。よく理解できなかった私とそのわけを聞くと、彼は山の右側のふもと方を指しながら、説明してくれた。その方向に目を移すと、そこには大勢の人が石の採掘作業をしていた。彼らはみんな外地の労働者で、開発商人が連れてきたのだという。

私の気持ちはもはや限界に達した。「だって、ここは自然保護地域でしょう。だって、我々は料金を払って入ってきたでしょう。だって、これが我々の聖なる山でしょう」。私はいきなり多くの質問を運転手さんに向かってぶつけた。なんの返事もなかった。当然のことだ。私は狼に押さえられた子羊のように、最後の力を搾り出して、大声で叫んだ。それでも反応はなかった。戻ってきたのは山の響きだけであった。それも当然といえば当然なことだ。なるほど、ここではすべてのことが当然のように行われているようだ。

## 日本の茶室空間

キム ミンスク  
金 玫淑

早稲田大学・博士（建築学）

早稲田大学理工学術院総合研究所客員研究員

六畳一間。今、私が住んでいる部屋だが、畳の数で部屋を呼ぶのは日本の一般的な言い方である。畳六つ分の広さと考えれば簡単に判りやすく、合理的にも聞こえる呼び方であるが、日本で生活を始めようとする外国人には「平方メートル（㎡）へ換算するとどのぐらい？」という疑問が生じる。その大きさに対する実感が湧かないからである。畳の寸法が京間と江戸間で違うことを知れば、頭の中はますます複雑になる。

しかし、外国人が畳の部屋に対して抱くイメージの頂点は茶室ではなかろうか。四畳半を基本とし、三畳や二畳、あるいは台目畳を用いた最小一畳台目まである。写真や図面から見るそのイメージは整然としているが、実際覗いてみると狭くてよくこんな所に人が入れるなどか、中に入ると息苦しそうと、建築学を専攻していてもそう思ってしまう。

「茶の湯（茶道）」の文化を持っているのは日本だけ

ではない。そもそもお茶は中国から伝来されたもので、中国や韓国にもそれぞれの茶道がある。しかし、日本では「茶の湯」文化は独自に発展したために皆が誇りとし、紹介のみに止まらず、そのオリジナリティが強調される。「韓国でもお茶を飲みますか」「あなたはお茶が好きですか」「韓国にも茶室がありますか」などの質問は頻繁で、「侘び」「寂び」の解説や、千利休が韓国から受けた影響などの話もよく聞かせてもらう。しかし、残念ながら、韓国には現存茶室もなければ、茶室研究家もいない。理解できる範囲にも限度があるわけである。私にとって茶室はいつまでも難攻不落の対象のように見えていた。

ところが、今年の3月、千利休が秀吉に捧げたわずかに二畳の究極の茶室と呼ばれる「待庵」を見学することができた。現在、京都府大山崎町妙喜庵に移築されている国宝であるが、度重なる改修などのため、創建当時の姿が分かりにくくなっていると言う。待庵を見るのは初めてではなかったが、室内に入れないため、茶道を学んでいる友人に頼んで平成2年に利休の指図を基に待庵の当初の姿を復元したという大徳寺瑞峯院の「平成待庵」も見学し、見比べる機会を得たのはラッキーであった。特に、平成待庵では住職さんが直接点ててくれた茶をいただきながら茶碗や茶の湯の世界に少し触れた後、二畳の空間を吟味する時間まで頂いたからである。同じ空間でも単に覗いてみることと入って身をもって感じることの差の大きさを実感した贅沢な時間であった。

平成待庵を訪れた日はあいにくの雨。灯りもなく、真っ黒な苅壁に囲まれ、天井すら低い二畳の空間に足を踏み入れた瞬間、「狭い」「どこに座れば良いかしら」と慌ててしまった。しかし、障子窓から入っている僅かな光を頼りに躡口の近くに正座し、部屋の隅々を見渡すと、立っていた時の息苦しさは自然と去っていき、心が穏やかになってきた。真っ黒の苅壁に囲まれ僅かな光しか存在しないそこは外の世界と完全に分離された別世界。急に谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』で称賛する薄暗い黒の世界を思い起こし、ここにあるのではないかとうなずけた。物静かで澄んだ空気、雨水の音だけ響く中、私の五感研ぎ澄まされてゆき、室床の掛軸も目に飛び込んできた。

茶室では、わずか数畳の空間にさまざまな工夫が込

められ、日本が長い時間積み重ねてきた感覚が凝縮されているのである。六畳の私の部屋も狭いけれども、茶室のように日本での生活の思い出が詰まっている。

## 韓流とともに歩む

イ ウンギョン  
李 垠庚

東京大学（地域文化研究）

私が高校生の頃、我が家ではいわゆる「スポーツ新聞」を購読していた。主にスポーツ関連記事や芸能界のゴシップで埋められたスポーツ新聞を、店や会社でもない一般家庭で購読することは、韓国でスポーツ新聞が創刊された直後の20年前はもちろん、今も滅多にない。そのためか、ポストからスポーツ新聞だけが狙われてなくなることも度々あった。友達との飲み会でも、私がその事実（スポーツ新聞購読）を明かすと、聞いていた皆が啞然として、「あなたの芸能界に関する雑学の源泉がようやくわかった」といわんばかりの顔をしていたのを覚えている。

それから相当の時間が経過した21世紀の日本・東京、私はある韓国語塾の「上級韓国語クラス」の映画を用いた授業を行っていた。10人弱の日本人に対し、毎週末に、毎回約10分程度の分量のディクテーションを中心とし、セリフの表現について説明し、使い方の練習を行った。すでに韓国語をマスターしている人々なので、韓国語という語学だけではなく、時には俳優の裏話、映画の秘話、韓国の時事ニュースに関する説明を加えた。韓国についてかなり詳しい彼らでも、さすがに20年近く前から情報を蓄積して来た私には及ばなかった。「先生、先生の専攻は何ですか。何であっても、その専攻より、韓国の芸能界に関する文章や講演のようなことをした方が売れるんじゃないでしょうか」。ある日、授業後の飲み会の中で、真剣な顔でそう言われたことは今でもはっきりと覚えている。

その2年後、平日の夕方に社会人が通う大学の生涯教育センターで「初級韓国語クラス」を教えることになった。前の上級クラスとは違って、日本語を使って

韓国語のイロハから教えるクラスである。ほとんどが韓国ドラマを見てファンになって韓国語を学びに来た人々なので、私の芸能情報はそこでも非常に歓迎された。一日の仕事と厳しい韓国語の勉強に疲れ、眠くなっている彼らの目を覚ますためには何よりだった。

どちらも韓国語を教えるという仕事は同じであるが、二つのクラスの雰囲気の違いは、最近の日韓文化交流が活発になったことによる、日本における韓国ファンの性質の変化を象徴している。すなわち、韓国に関心をもって交流しようとする日本人層がどのように変わったのかを表わしているのだ。上級クラスの学生たちは、日本で韓国文化が流行る以前から、各自の様々な理由による関心から、韓国経験をしていた。彼らは、いわゆる「典型的な日本人」とは異なっていた。彼らは、悪びれもせず授業に遅れたり、授業中に食べ物や飲み物（しかもアルコール）を持ち込んだり、無遠慮な言い方で無理やり飲み会に誘った。悪意のない彼らの態度は、かえって韓国人気質に似ているものだった。実際に、彼らは韓国での生活体験を懐かしがり、辛い食べ物や、ジェット・コースターを連想させる韓国の市内バスを恋しがった。そのクラスの中では、「先生（すなわち私!）がもっとも日本人らしい」とよく言われた。

それに比べると、初級クラスの学生たちは相当異なっていた。彼らは、日本社会の中流階級の平凡なおばさんや、会社員、管理職を退職した年配の方々だった。韓国のドラマを通じて韓国文化に出会うまでは、韓国に接したことはほとんどなく、今も映像に映る韓国の荒っぽい生活と刺激的な食べ物に、好奇心と恐怖心を半々に抱いていた。長い間勉強から遠ざかっていた人々が、まったく新しい外国語に向き合うことは容易なことではない。日本人にとっては、どうしても難しい発音のために、筋肉に微かな痙攣を起しつつ必死に頑張る様子からは、私も感動と励みを感じた（ある人は、韓国語の一部の発音が、日本の女性にとっては一生したこともなく、抵抗感を感じさせる発音なので、どうしても素直に出来ないと言訳をしたが、真偽は定かではない）。彼らは、非常に丁寧で（個人差はあるものの）私に対しても絶対に無礼な言動をしなかった。また、日本人は必ず一つ以上の特技を持っていると言われる通り、茶道、生け花、三味線、私が聞いたことのない外国のダンスなど、必ず一つ以上の趣味を持っていた。

韓国では想像さえ出来ないほどのちっちゃなプレゼントを照れずにいただくことに慣れたのもこのクラスのおかげであった（一言では説明できないが、日本と韓国のプレゼントの文化はかなり異なっている）。

上級クラスの学生の中では、韓国の光州民主化運動（1980）を見たことや、「在日」問題に関わるようになったことがきっかけで韓国に関心を持ちはじめたという「重い」動機から韓国と付き合うようになったケースが多かった。韓国旅行の計画をのぞいてみても、私でも行ったことのない歴史的な遺跡地と地方文化探索を試みるものだった。その反面、初級クラスからは、韓国芸能人の日本内活動やファンクラブの動向に関する情報を得ることができた。

この対照的な二つのクラスは、私個人の偶然な体験だけとは言い切れない。昔、日本で韓国に興味を抱いて学ぼうとした人々は大抵、日本社会に息苦しさを感じ、それとは対照的な韓国人気質や歴史に興味を抱き始めた人々、ある意味では「変わり者」やアウト・サイダーが多かった。ところが、最近、新たに現れた韓流ファンは、平凡な日常生活を送りながら、黙々と家庭と社会を支えてきた人々である。昔は、韓国語を教えるところが少なかったゆえに、韓国語を勉強しようとすれば、必ず（前述した塾をはじめ）いくつかの限られた場所にたどり着くようになっていたが、昨今では、韓国語を教えるところが「雨後の筍のように」出来たので、伝統あるところは「古臭い」と度外視されている。その結果、韓国に対する関心があまりにも軽く、興味本位へと傾いてしまうのではないかと懸念する声もある。日韓交流におけるこのような変化の意義はともかく、私の在日期間中にこのような変化が起こり、自分のもっとも身近なところでそれを目の当たりにできたことを非常に意味深く感じている。

高校時代、夜遅く家に帰り、疲れを抱えて、間食を食べながらスポーツ新聞を読むことを一日の楽しみにしていたあの頃は、まさか 21 世紀、東京の片隅で、自分が日本人の前に立って、その新聞で得た情報をもとにして韓国の言葉と文化について教える日がくるとは想像すらしなかった。今でもたまに不思議な気持ちになる。そして今、21 世紀初頭の日々を東京の隅っこで過ごしながら見聞し、考えたことが、また想像も出来ない「何か」で実ることを期待する。

2001 年、韓流のはじまりと共に始まった私の留学生活は、そのうねりとともに歩み、そのかげりが見え始める今、そろそろ終着地点が見えようとしている。偶然か必然かは、今後、開かれる道によって証明されるだろう。

## 春が消えてゆく、という感覚について

パク ソヒョン  
朴 昭炫

東京大学・博士（文化資源学）

韓国芸術総合大学非常勤講師（在ソウル）

私は、今年の 2 月からほぼ 6 年ぶりにソウルで生活するようになった。季節の変わり目にあって、依然として肌寒い空気に背中を丸めながら新しい生活の準備にばたばたしていた。しかし、わずか 2 ヶ月前のそういう感覚は、ずっと前のことのように遠く感じられる。なぜかという、もうとっくに春だから、しかも今はその春さえも消えてゆこうとしている。春に浸かっている感覚は、真冬の寒さの感覚を思い出せない。季節の移り変わりは、それぞれの季節が誘発する感覚を、いとも奇麗に忘却させてしまう。その忘却の力は、ふしぎなだけに、魅惑的でもある。

おそらく、地球温暖化による気候の変化は、冬が長くなる反面、春と秋はだんだん短くなる、といわれる。だから、われわれの感覚は、真冬の感覚を忘れきったかと思いきや、また春の感覚を忘れることを強いられているのかもしれない。季節の感覚のリズムあるいは速度感は、今までのような均質なものではなく、緩急の不均質なリズムに変わりつつある。それゆえ、われわれは、短くなりつつある春を、春に変わったとか春を迎えたという感覚よりは、春が消えてゆくという感覚をもってしか感じられない人間になっていくだろう。

「消えてゆく」という感覚でしか捉えられない季節というふうに言ったところで、ロマンチックな悲壮感や、喪失や頹廢に結び付けられる虚無の美学を唱えるつもりはない。ただ単に、マスメディアを騒がせた様々な事件、特に殺人など人間の生命に関する事件を、ふと今

年の春という季節の感覚を意識しながら眺めた、私の感覚的交差の経験から言うだけである。「消えてゆく」という感覚が一種のスピード感に係るならば、それには奇妙にも、先鋭な敏感さよりは、「消えてゆく」ことへの頓感さと呼び覚ます。そう、奇妙なのは感覚がなくなる、という感覚が研ぎ澄まされることなのだ。ところが、この感覚を減退させる感覚は、短くなった春によるだけではないだろう。さまざまなテクノロジーのおかげでわれわれは、たぶん、われわれの間の距離を縮めてきたし、各々の間にあるはずの時間的なずれへの意識も無化してきたのだから。そう、和辻哲郎が己の哲学において定義した「間の存在」としての「人間」は、ますます存在することが稀で困難な事態となっているのだ。短くなった春、これからは過去の自然現象だと記憶されるかもしれないこの春から、感じられない感覚が先鋭になるのを感じながら、人間の生の条件を今一度考えているこのごろである。

## 私と日本の縁

オスカル ポラス ロハス  
**Oscar Porras Rojas**

東京海洋大学・博士（応用環境システム学）

コスタリカ大学航海・水産学部長

（在コスタリカ、Puntarenas）

私は今回、二度目の日本への留学だった。

私が日本と出会ったのは何時だったのか。幼い頃、日の丸の付いたタクシーのおもちゃで遊んでいた。TVでは、鉄腕アトムやウルトラマンを見ていた。しかし日本とは意識して見ていなかった。大阪万博、広島と長崎の原子爆弾、富士山、首都東京は情報として知ってはいた。

初めて日本を意識したのは、チリ留学を終えコスタリカ大学に勤務し始めた時、突然一人の日本人が来たのが最初である。彼は日本の青年海外協力隊員だった。その後、最初の日本への留学を挟んで、合計四人の青年海外協力隊、二人のJICA専門家と仕事をして、最後は日本人の下宿人を迎えることになってしまった。

どの人も私が依頼したのではなく、向こうから私の所に飛び込んできたのである。しかし彼らのおかげで海の関係の仕事の成果が上がった。私一人では何も出来なかっただろう。このように、私は日本と縁が非常に深かった。

今回の留学は、本当はスペインへ行くはずだった。しかし2001年9月11日米国での同時多発テロによりスペインでの私の勉強するはずのコースが急遽なくなってしまった。そのコースは武器の使い方という恐ろしいコースに変わってしまった。そこで日本の恩師に相談したところ母校の大学院の試験を受けるように薦められ、そうして二度目の日本留学となった。再び日本への線路に乗った。テーマは命に関すること。もしスペインへ行っていたなら研究テーマは正反対のことだったろうし、言語は母国語なので研究生活は日本よりもっと楽だったかも知れない。しかし永世中立国のコスタリカ人が戦争の手伝いをするわけにはいかない。平和な国日本へ来るよう導かれたのだ。

日本では多くの先生方と20年ぶりに再会し、ご指導を賜り、有難く思うのと同時に多くのことを学んだ。ここでも先生方との縁を感じた。日本の研究生活は大変だった。朝から夜中まで学校にいてもまだ時間が足りなかった。研究資料を集めるために来日前の一年をかけパナマ、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカで調査をした。命に関することなので、現地人皆が真剣であった。ここでも現地の人々との縁が出来たと感じた。

日本と知り合えて良かった。全部の日本人が良い人なのか、知り合った日本人は良い人ばかりだった。日本との縁で中米の人々とも縁が出来た。この研究により彼らを少しでも幸せに出来るかも知れない。この縁がぐるぐる回って大きな円になっていく。人々の小さな幸せを守ることから大きな世界平和に繋がっていくことを夢見る。今後はこうした成果を少しでも実現出来るように努力をして行きたいと思っている。

## 私の留学生活

チェン ミンアイ  
権 明愛

日本社会事業大学（社会福祉学）  
白梅学園大学非常勤講師

大学で、夢を失い、勉強も嫌いになり、日々がつまらなくて仕方がない時期に、自閉症の子どもとの出会ったことや、恩師との出会いをきっかけに、大学卒業後、私費留学生として日本という未知の国の土を踏んでもう7年目に入った。周りの留学生に比べると長くも短くもない7年だが、私にとっては本当にいろんな思い出がたくさん詰まった充実した一年一年だった。

日本でも中国で学んだ専攻と同じ専攻である障害児教育を引き続き学んで来たが、日本ではなぜか勉強が苦に感じることはなかった。

私費留学生という大変な立場で、辛いこともいっぱいあったが、今まで障害児を援助する学問を続けて来られたのには、ずっと心の支えとなったものがあったからこそであることに最近気が付いた。それは、自閉症の子どもたちと関わる中で段々子どもたちに受け入れてもらえたという喜びであろう。自閉症の人たちは、人からの働きかけを拒否したり、言葉がなかったり、言葉があったとしてもコミュニケーションの手段として使えなかったり、さらに行動にも通常では理解しがたい変わった行動が多いため、いくら可愛がって関わろうとしても、相手にしてもらえなかったり、拒否されてしまうことすらよくある。そのたびに、辛くて、心の葛藤が多かった。しかし逆にその難しさがあったからこそチャレンジしてみようと言う意欲が持てたかも知れない。今になってみれば、自閉症の子どもたちの不思議に思えた行動の一つひとつには、実は自分の意思を相手に伝えられなくて混乱してしまったとか、自分の要求が叶わなくて困ったとか、何らかの行動の引き金となる原因があり、不思議に思えたのはただ関わっている人が理解できなかっただけであることも認識できるようになった。段々と自閉症の子どもたちの謎のようだった正体も見えてくるようになり、子どもに寄り添った関わりができるようになると、子どもたちも

次第に懐いてくれたり、頼ってきてくれたりするようになってきた。ここまで来るのには何年の悪戦苦闘があったんだろう。

中国の大学施設でも、自閉症の子どもと関わった経験はあるが、当時は実践に詳しい専門家もいなかったため、何もできない自分が子どもたちとどう向き合ったら良いか迷うばかりだったが、幸いに、日本では良き先生方に恵まれ、挫折したり、迷ったり、辛い時にはいつも支えて、見守ってくださる先生方がいらっしやったことが、一つの大きな心の支えとなり、多くの難関を乗り越えることができた。先生方には本当に感謝している。人間は一人では生きていけない。人生の中でのものごとくもいつも順風満帆に運ぶとは限らない。辛い時や苦しい時には、支えて助けてもらえる人がいるというのは何より幸せで心強いものである。そういう意味でも、私は日本で尊敬できる先生方にめぐり合えて幸せだった。

また、自閉症の子どもからも多くのことを学ぶことができた。あんなに幼くて人を拒否しているばかりであった子どもたちも、相手がちゃんと自分のことを理解してくれるということが分かった瞬間、相手に心を開いて、身を寄せてくれるということに何より感銘を受けた。障害児を援助するという難しい専門を選ばずに、他の道を歩む選択もあったが、私はこの人たちを援助する社会福祉学を選んで良かったと思う。これを選んだことによって生命の価値を実感できただけではなく、人の痛みを知り、たくましく、強く、そして優しい心で生きようと意欲も持たされたといってもよいだろう。

日本は、私の第二の故郷でもある。文化の違いはあるものの、日本人の静かで、安心感のある優しい心に包まれて、今の私が育ったと思う。この7年間どれぐらいの日本人に助けられたか数字では表現し難いが、心の中ではいつも感謝の気持ちがいっぱいだった。学業を終えた後は、日本で結ばれた縁を大切にしながら、何らかの形で日本に恩返しができるたらと願う。

中国と日本は近隣で歴史的な繋がりも深い。留学生は学問だけではなく、民間大使として文化交流を深めるような活動も心がけて行うべきだと言うのが私のこれまでの主張だった。学業を終えるまで、もう暫くの時間が掛かりそうだが、将来自分がどのような形で両

国の文化交流のために活動するかを楽しみにしながら、論文の執筆に励みたい。

## 日露学生会議

シュラトフ ヤロスラフ  
Shulatov Yaroslav

慶應義塾大学（政治学・歴史学）

私が初めて東京を訪れたのは、10年前のことであった。その前に、ロシア極東のハバロフスクと直行便のある新潟と青森には行ったが、大都会の東京に出たのは1998年の夏であった。

そのとき、私はハバロフスク教育大学東洋学部日本語学科の2年生であり、東京に来た理由は日露学生会議に参加するためであった。この「日本・ロシア学生会議」により、私の日本との付き合いが大きく変わった。

実際にこの「会議」は、学生によって運営され、日露両国の学生のための組織である。1988-89年、上智大学の学生たちが、激変しつつあるソ連邦の同世代はどんな人達なのか、どんな生活をして、どのように人生のことを考えているかなど、非常に大きな興味を持ち、ソ連の学生たちと交流する機会を作ろうとした。勿論、最初はどうすればよいのか、だれもわからないままであったが、いきなり大学構内の公衆電話からモスクワ大学に電話することにした。それで、あらゆる「調整」や「挑戦」を乗り越え、1990年にモスクワとレニングラード（現在サンクト・ペテルブルグ）で第1回日ソ学生会議が開催された。

その後、ソ連が崩壊し、当団体の名称が「日露学生会議」に変更された。主に経済的な理由でモスクワとレニングラードの学生組織の活動が存続できなくなり、ロシア側の開催地は次第に極東のハバロフスクとウラジオストックとなった。日本側のメンバーは新潟と東京の諸大学の学生達であった。

組織の原則は最初から、無政治・無宗教・無営利と決定された。このようにして、日露間であらゆる問題が存在しても、両国の学生達は政府の立場と線を引き、援助していただける機関・企業を問わず、様々な問題

について自由に議論しながら交流が出来るような基盤が成り立った。

また、会議開催地の大学生達は会議実行委員会を設け、自ら相手を招待し、寮やホームステイ、2週間にわたって生活と自由討論ができるような環境を整えることになっていて、将来を担っていくであろう若者にとって極めて貴重な経験となっている。

私が参加したのは第10回会議であった。初めて見た東京、新宿や浅草の風景、初めてできた日本人友達。そして、ハバロフスクに帰ってから、翌1999年にロシアで開催予定の第11回日露学生会議の準備に一生懸命に取り組んだ。

今まで、この会議に数百人を越えるロシアと日本の学生達が参加してきた。そのうち多くの人々は会議のおかげで親友のみならず、嫁や旦那を見つけてきた。日露青年の架け橋となった会議は、ソ連崩壊やクーデター、アジアとロシアの経済危機を耐え抜き、両側のメンバーに異文化との対話によって様々な困難さを乗り越えるチャンスを与えた。

今年8月、第20回会議が開催される予定である。ロシアと日本の間、草の根交流のストーリーが今も続いている。

## 持続的な発展をめざした都市開発 ～日本の経験に学ぼう～

オウ ケンコウ  
王 剣宏

早稲田大学（建設工学）

早稲田大学理工学術院創造理工学研究科助手

中国は80年代から都市化が進みはじめ、2005年までの25年間に都市化水準は2倍以上となり、全国の都市化率は44%に達しています。2025年までに中国の都市化率は66%に達し、人口が1000万を超える巨大都市が上海や北京の他にも幾つか現れるだろうと予想されています。また、都市の人口密度は上海浦西区が3.7万人/km<sup>2</sup>、北京都市部は1.4万人/km<sup>2</sup>です。（世界の主要大都市の人口密度は、東京が1.4万人/km<sup>2</sup>で

あり、ニューヨークやロンドンの高いところでも0.85万人/km<sup>2</sup>にすぎません。)

都市化に伴い、全国各地で高速道路、高層ビルなどの都市施設が次々建設されています。しかし、都市の空気はますます悪くなり、交通渋滞もますますひどくなるばかりでなく、都市犯罪が増えつつあり、都市の住宅価格は都市住民の手が届かないほどの高値にまで伸びています。将来ますます都市の人口が増えることを考えると、都市の持続的な発展を考えなければいけません。

日本は戦後わずか数十年で、瓦礫の廃墟から現在の大都市を作り上げました。当時の日本も現在の中国と同じように全国の農村から人々が都市に入って、都市化が早いスピードで進みました。しかし、日本には中国のような都市戸籍と農村戸籍を分ける戸籍制度がなかったため、戸籍による問題、例えば子供の就学などの社会問題もありませんでした。また、各地の地方公共団体による公営住宅や、国・地方公共団体による政策主導の団地建設が行われ、低所得者でも賃貸できる住宅が提供されました。

一方、当時は環境保護の意識が殆どなかったため、深刻な環境問題が生じましたが、1960年代から様々な環境政策や法律によって、人々の環境意識を高め、現在は世界的にも環境のよい国の一つになりました。また、大都市ではJR、私鉄、地下鉄など軌道交通を中心に発展し、都市の住民に便利な交通を提供するとともに、環境を守っています。特に都市の交通渋滞や車の排気ガスによる大気汚染が大幅に減少しました。さらに地下の有効利用によって環境を保全し、都市の機能を高めています。

このような日本の都市発展の経験に基づいて、中国の都市が持続可能な発展を遂げるために、以下の三点を提案します。

まず、戸籍制度を改善し、人々が暮らす場所を確保せよ。中国は2025年に都市化率66%に達します。これは、さらに約4億人が農村から都市に移って生活することを意味しています。どうすれば彼らの安定した生活を確保できるかが大きな課題となっています。現在の戸籍制度を続ければ、この4億人は都市で住んでも都市の住民の福祉や生活保障が得られませんから、社会不安が生じる可能性があります。安定した社

会を得るために、今の戸籍制度を改善して日本の住民登録制度のように、どこに居ても国民として平等に扱われるようにする必要があります。そもそも農村から移入してきた人たちは都市の弱者層として、政府から優先的支援が必要です。もし日本の戦後復興の段階の経験を生かして、政府が主導して安い住宅を提供し、彼らに安定的な生活基盤を与えることができれば、都市における貧富格差を縮め、犯罪を減らし、社会の安定を図ることできると考えられます。

次に、コンパクト都市を目指せ。中国の国土総面積は世界第三位ですが、国民一人当たりの土地面積はわずかに777 m<sup>2</sup>しかなく、これは世界平均の1/3に相当します。また、一人当たりの耕地面積は世界平均の1/10に相当します。こういう状況の中で規模を大きくするだけの都市開発は、国の長期的な利益を損なうばかりです。日本が戦後やってきたように、広い道路をやめ、軌道交通を発展させること、また地下の空間を有効利用することが正しい発展の道だと思います。都市建設にかかる投資額は非常に大きいので、個人や外国の資金を有効利用するために、PPPs (Public-Private Partnership) などの制度を導入する必要があります。私鉄など、民間セクターを発展させるのが健全な都市化に有効な道かもしれません。

最後、一時的な発展ではなく、長期的な都市発展を目指せ。都市の建設はあまりに膨大な社会の資源、資金がかかるので、一時的な発展のための建設は社会の資源を浪費するだけではなく、将来の負担となります。事前に専門家による十分な検討、検証をしたうえで、長期的な発展目標を定め、発展計画をすることが都市の発展には不可欠です。

中国政府は既に持続的発展をめざす都市開発の重要性を認識しており、今後の開発計画に大きな転換があると思います。私はこの数年間日本で勉強した先端知識や経験を生かして、将来は中国の都市発展に貢献したいと考えています。

## 日本で学んだ大切なことと良い思い出

イエン ハイネン  
顔 海念

東京大学・博士（国際保健学）  
（株）中外製薬安全性データマネジメント部

私は中国の医科大学医学部において基礎課程と臨床課程を修了した後、大学病院で小児科医として勤務しておりました。アジアの子どもたちの重要な感染症を制圧することを目的に国際保健分野での研究を希望し来日しました。日本語学校と上智大学で日本語や医学専門用語を学び、視野が広がり、学問を追求する意欲がさらに強くなりました。2002年より東京大学大学院医学系研究科に入学して、母子感染にかかわる重要なウイルスの研究生生活をスタートさせました。研究生1年、修士課程2年、博士課程3年を経て2008年3月に研究成果をまとめ博士学位を取得しました。

私は実験研究に没頭しました。順調なときも困難に直面したときも退屈を感じたことがありませんでした。乗り越えて前へ進んだら素晴らしいと思う一心でした。なぜならば、先生や研究メンバーの頑張るお姿を見ると勇気が湧いてくるからです。良い指導者の牛島廣治教授と教室の皆様に恵まれた充実した研究の日々は本当に楽しかったです。

振り返ると、日本へ留学に来て10数年が経ちました。最も印象に残ったことは何かと考えてみると、沢山のことが思い出されます。ここで面白い体験や感動したこと、学んだことを話したいと思います。

### ■大きくショックを受けたこと

毎年11月後半に入ると、東京の街中はクリスマス飾りで特にきれい。来たばかりのある日私は実姉について渋谷へ買物に出かけました。活気溢れる人込みの流れの中でのんびりと歩いてわくわくした気分でした。ところが、ある店の前でスクリーンに映ったお相撲さんは裸同然の姿ではないですか！私は自分の目を疑いました。公的な場で全国放送なのにお尻を出すなんて、びっくりしました。姉が平然と見ながら説明してくれましたが、私は心拍数がかなり上がっていたと思います。

す。そのときは初めて自分は異国に来たなと意識しました。

### ■日本で迎えた初めてのお正月

初めての大晦日の夜は姉とテレビを見て過ごしました。見た番組は紅白歌合戦です。この歌合戦に登場した歌手は皆選ばれた優秀な歌手だと聞いたので、興味津々で見ました。年越しそばを食べ、除夜の鐘と新年の初詣の様子もテレビで見ました。元旦に、私は初詣に明治神宮に行きました。広くてこんなに大勢の人がいるけど、秩序がよくとれていて、ただただ長い列でした。若い女性の和服がとても綺麗だったので、1人の若い女の子に声をかけて一緒に記念写真を撮らせてもらいました。人々は初詣でいろいろな願いを伝え、より良い年になるようにと祈っています。おみくじを引くのも楽しみの1つでした。これが日本の新年の雰囲気だと分かり、とても気に入りました。平和の中、希望と活力に満ちた日本のお正月が、今でも一年中で私のもっとも好きな祝日です。

周知のように、中国では旧正月をお正月とします。大晦日の夕食は一年中で最も大事な食事です。家族全員が家に集まってお酒を飲んだり、ワイワイと話をしながら食事をしたりします。どの家でも家中楽しい雰囲気になります。食事の後で大晦日の夜の番組を見ます。元旦の朝、あん入りのもち団子を食べるのが習慣です。一家団欒を意味すると言われています。昼間は福を招く意味のワンタンや餃子などを作ります。たくさん食べるとお金持ちになるといわれています。お正月は一年の中で一番大事な日です。お正月には賑やかに1日を過ごして、美味しいものをいっぱい食べることが確かに楽しいです。

### ■成人式がいいなあ～

私の国には成人式がありません。でも若い人たちが18歳になると、法律上選挙権を得、いろいろな選挙活動に参加できます。私が18歳になった時は、大学の1年生でした。大学は全寮制なので、クラスメートとの共同生活が一般的でした。クラスメート及び親切な大学の先生はみんな気持ちの良い人でした。それに甘えていた自分は成人になった感じがありませんでした。時がたって、大学4、5年生になり、卒業時期が近くなっ

て、自然に人生のことについて考え始めるようになり、成人になったのかなと感じました。

本当に成人になったと思ったのは大学卒業後、勤務先の仕事を始めたときからでした。患者への責任を持ち、専門的論文を書き、実習生への講座を担当し、本当に毎日仕事が忙しかったからです。日本に来てから初めて成人の日があることを知り、何度もカレンダーで成人の日を見て過ごしました。成長の自覚を持たせ、自立を意識をさせる日本の成人式はとても良い行事だと思っています。

#### ■美しい心情—日本人の特質について

印象深い初めてのツアー観光のことを思い出しました。それは国際文化交流協会が主催した富士山ハイキングに参加したことです。母の広いところのような美しい富士山の頂上から流れてきた雪解けの水は何百年という年月を経て、山の麗で湧き水となります。私は日本人の皆さんと一緒に、そこの湧き水を一口飲みました。「美味しい」「美味しい」日本人の女性の声が聞こえました。私は視線をみんなの顔に移し、本当に皆の嬉しそうな表情が顔に出ているのを見て、「ほら、うそではないわ」と感じました。日本人がただの水を飲んでも美味しいと思うことに私は感動し、またその美しい心情にも私は感動しました。中国では何か食べ物美味しいとかお茶が美味しいとは言いますが、水が美味しいとか言ったら、みっともないくらいのことです。

美の意識が日本人の特質のもう1つとも言えます。日本人はおしゃれです。男性も女性も服装をきちんとして職場に行きます。日本の大学で先生たちと会うたびに分かりました。一方、中国では授業中、先生はほとんどネクタイを着けません、女性の先生は一般にお化粧をしません。また、日本人の若い男性がよくダイエットしたり、唇のクリームを付けたり、眉毛のお手入れをしたりするのも珍しくありません。男女ともおしゃれ好きだなと思います。日本人の特質はたくさんあると思います。良い特質が日本人に存在することこそ日本の科学技術と経済が発達して立派になるもとだと考えております。

#### ■留学を通じて得た人生の宝物

日本での留学生活を通じて、私は多くの素晴らしい人々に出会うことができました。最も幸運なことは博士課程3年目に渥美財団の奨学生として選ばれたことです。財団のご支援のお蔭で、私はさらに研究に集中することができ、念願の博士学位を取得致しました。渥美伊都子理事長及びご家族と財団の皆様は心から感謝しています。今年、傘寿を迎えられた渥美理事長は私が日本で出会った最も素敵な日本人の女性の1人だと思っています。私ども留学生はお会いするたびに彼女がまさに広いところをもつ母親のような存在だと感じていました。財団の活動を通じて人のネットワークが広がり、私はさらにたくさんの優秀な人に出会うことができました。成功と幸せという共通のゴールに向かっている人々から、私はいつも希望と情熱と努力し続けるエネルギーを与えてもらいました。私にとって、これらの人々との交流は一生忘れられない宝物となると思っています。今年5月より、私は中外製薬（株）で医薬品安全性評価の業務を携わることになります。私は製薬・創薬の将来性と業務にとっても魅力を感じており、是非、精力的に医薬品安全性に関わる仕事に取り込み、国際社会に貢献したいと思っています。

日本での留学生活を通じて得たものはとても大きいことです。それは出会った人たちに学んだ前向きな姿勢、他人の立場を考える思いやり、異なる文化や習慣を尊重する寛容性、心の平和を保つ力です。世界の人々の健康と長寿を願い、自分が身に付けた知識とチャレンジ精神をもって頑張っていきたいと思っています。世界中の人々とともにより豊かでより幸せになることは、私がこれからのめざす夢です。

## 2008年度渥美奨学生の自己紹介

|                                        |    |
|----------------------------------------|----|
| 馮 凱 「機械の研究をやっている私」 ----                | 30 |
| 洪 琬伸 「日韓両国に『沖縄』から、『うりずん』の精神を伝えたい」 ---- | 31 |
| フローニ フリデリケ カウチ 「先駆者と御土産」 ----          | 32 |
| ハグワスレン ハムスレン 「10年前を振り返る」 ----          | 33 |
| ネメフジャルガル 「危惧とともに生きる世代」 ----            | 34 |
| プアン キムチャイヤラシー 「私の夢は水処理の専門家になること」 ----  | 35 |
| 宋 剛 「東遊記――夢の起点之巻」 ----                 | 36 |
| ヘリ リース ヴェルノ 「雪像に惚れて」 ----              | 37 |
| 王 偉 「悔いのない人生を」 ----                    | 38 |
| 修 震 「国際舞台への一步一步」 ----                  | 39 |
| 陸 載和 「失われた時間を探して」 ----                 | 40 |
| 張 建 「日本留学の道」 ----                      | 41 |
| 劉 健 「漢字でつながる言葉・文化でつながる両国」 ----         | 42 |

## 機械の研究をやっている私

フェン カイ  
馮 凱

出身国：中国

在籍大学：東京大学大学院工学系研究科機械工学専攻

博士論文テーマ：マイクロガスタービン用オイルフリーフォイル軸受の設計論の構築



私は馮凱（フェンカイ）と申します。現在、「マイクロガスタービン用オイルフリーフォイル軸受の設計論の構築」を研究テーマとして東京大学大学院工学系研究科機械工学専攻博士後期課程に在籍しています。

子供の頃から機械製品に興味を持っていた私は1999年に高校を卒業して、中国でも有名な華中科学技術大学機械工学科に入学しました。4年間も機械工学に関する知識と技術を勉強し続けて、私は機械工学に対する興味が深くなってきました。そして、一生をかけて機械の研究を続けていくと決めました。卒業する時、私は優秀な成績を修めた上、卒業論文の優秀賞も得ました。さらに、西安交通大学大学院機械工学専攻へ推薦入学を許されました。私は回転機械潤滑分野で一番有名な研究所「西安交通大学軸受研究所」に入って、発動機の軸受の研究を選びました。修士論文では、「中国西域で使われるエンジンのダイナミクスとトライボロジー」をテーマにしており、砂漠で問題となる砂が軸受の寿命に与える影響について研究しました。研究成果を雑誌論文2篇にまとめました。軸受の重要性を意識しながら、私はこの分野に関する知識がまだまだ足りないと感じました。そして、軸受の研究を続けるため、この分野でもっと良い研究室に入りたいと思いました。

偶然ながら、私は東京大学の金子先生が研究しているフォイル空気軸受に深く興味を引かれました。そして、フォイル空気軸受について金子先生に尋ねて、いろいろ教えていただいた上、金子研究室で軸受の勉強を続けることを許されました。しかし、その時には、日本文部科学省奨学金の申請は締め切られており、大きな問題になりました。だけど、研究のため金子研究室に行く価値があると信じて、私費留学生として日本に来ることにしました。

来日してから1年余り経過しましたが、この1年間は私にとって、凄く意味がある1年でした。正直に言うと、経済的な問題は私の想像以上に厳しくて、特に日本語があまり話せない私にとって、すごく辛いことでした。日本に来てから、一日も早く日本での生活に慣れ、自分の研究をうまく進めるために、忙しい毎日を送りました。文献調査、計算モデルの提案など、日本語の勉強を継続しながら、査読付き英文雑誌論文1篇（掲載済み）、査読付き国際会議発表4件（国内2件、海外2件）を行っております。特に、海外で国際会議に参加したことが、非常に勉強になりました。1回目はサンディエゴで開かれた米国機械学会（IJTC2007）でした。その会議のおかげで、フォイル軸受の分野で最も有名な科学者と交流して、自分の研究に役立つとともに、自分の研究が褒められ自信をつけました。私はこの分野での新人であるのに、NASAの専門家も含めて多くの専門性が高い方々と連絡を取っています。2008年6月、私はドイツで国際ガスタービン学会（IGTI2008）に参加することになっております。ガスタービンに関する非常にレベルが高い会議であり、私はフォイル軸受の研究を発表する3人のうちの1人に選ばれており、大変光栄に感じております。これからもっと頑張りたいと思っています。

東京大学を卒業した後も、フォイル軸受に関する研究を続けるつもりです。中国では、この分野に関する研究は数年前から行われていますが、その研究成果はまだ十分ではありません。そのため、卒業後は中国に帰り、大学または企業においてこの分野に関する研究を続けようと考えています。

## 日韓両国に「沖縄」から、「うりずん」の精神を伝えたい

ホン ユンシン  
洪 琬伸

出身国：韓国

在籍大学：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際関係学専攻

博士論文テーマ：戸惑う人間のための安全保障学を求めて

ー朝鮮人と沖縄人が経験したアジア太平洋戦争と米軍占領の体験を中心にー



2001年、私は「日本と韓国におけるナショナリズムを問い直す」という大きな夢を持ち研究への道を選んだ。私が注目したのは沖縄の歴史である。沖縄は、第二次世界大戦期日本のなかでも唯一、地上戦を経験した地域であり、たくさんの朝鮮人軍夫や「慰安婦」が強制動員された地域でもある。そして、現在も米軍基地施設の75%が存在している。私は沖縄を、第二次世界大戦期における人間の様々な困難と、それを乗り越えるための平和思想を見出す地域として注目した。

日本の中のもう一つの日本、つまり「加害者でもあり被害者でもある日本」。私は少なくともこの島において、第二次世界大戦の最後の日に人々が感じた「恐怖」を、愛国という言葉を用いて説明するのは不可能であると考えている。日本人としてでも、韓国人としてでも表現し切れない、国民というカテゴリーで説明し切れない、ただ死の恐怖のなかでの人間の姿に、あくまでもこだわりたい。その人間の姿を、学問の場で研究し、日本や韓国に伝えることが、沖縄語でいう「うりずん」に繋がるものだと考えているのだ。「うりずん」というのは、古い沖縄のおもろ時代からの沖縄語で、「大地のうるおい」を指す言葉である。日韓関係におけるナショナリズムによって凍ってしまった日本人や韓国人の感情に、沖縄の体験を伝えること。それは、日韓関係の大地にうるおいを与える「うりずん」になれると私は確信している。そして、この「平和」や「人間」こそが、現在私を支えてくれる価値観である。

私はこれらの自分が構築してきた「沖縄」という価値観を博士論文で書き上げ、博士論文執筆後にはしばらく沖縄の平和教育の現場で勤めたい。最終的には、日韓の大学・研究機関において沖縄を知らせるための学問分野を構築して行きたいと考えている。学問分野においても職業においても、私のキーワードは一貫して「平和」や「人

間」を対象とした「沖縄」である。それを日韓両国、欧米諸国、そして数々の側面から具体的に実らせる第一歩が、今回の博士論文である。博士論文で私は、沖縄での現地調査を通して、沖縄に住む多くの沖縄人（自分を沖縄人と名乗る人々）、朝鮮人、そして日本人といったアイデンティティの文節に注目してきた。戦争が残した傷痕でもあるこれらのアイデンティティの混乱は、私の論文ではアイデンティティ以前に「平和」や「人間」として接近すべき対象と考えている。

現在に至るまで応援してくださった沢山の方々、そして本研究に対する貴財団のご支援に心から感謝し、これから、日韓関係のナショナリズムを超える「うりずん」の可能性を求め続けたい。

## 先駆者と御土産

フローニ フリデリケ カウチ  
**Vroni Friederike Kautzsch**

出身国：ドイツ

在籍大学：東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学

博士論文テーマ：桃山時代における高台寺蒔絵の技法と意匠

ー東京藝術大学美術館「秋草蝶蒔絵料紙箱」の再元模造製作を通してー



私の曾祖父は医師として中国のジナンに病院を開業し、夫妻で20年間西洋医学を実践しながら、東洋医学（漢方薬）を研究しました。祖父は現地で生まれ両親の他には中国人の家庭教師と乳母に強い影響を受けて育ったそうです。祖父はドイツで医学を学び曾祖父の後を継ぎました。曾祖父も祖父も仕事で度々日本を訪れたと聞いています。その後第二次世界大戦が勃発したため家族はドイツに帰国しました。

私の家には日本と中国の品々が多く、東洋風な環境に囲まれて暮らしていました。東洋への関心は強くなり、私は高校時代から大学は日本に留学したいと考えました。しかし、親が心配して認めてくれなかったのも、まずはドイツで文化財保存修復専攻に進み、スイス・バゼル歴史博物館のアトリエに就職し、キリスト教絵画と彫刻を修復しました。そんな時、ミュンヘンの国立民俗学博物館で修復した『大名駕籠』（江戸時代、シーボルトコレクション）に出会い日本の絵画工芸技法の美しさを知りました。その出会いがきっかけとなり、私は漆芸修復を学ぶため、奨学金を得て東京藝術大学美術学部工芸科漆芸研究室の研修生になりました。

漆芸研究室で1年間、蒔絵・螺鈿技法の授業を受けながら、夏休みに岩手県の漆器工房で勉強しました。1年間で多くの技術を学ぶ事が出来たと思いましたが、それでも漆の技術者になるには20年は掛かると先生に言われました。その後大学院修士課程に進み、現在博士課程に在籍しています。たとえ博士号を取得しても一人前の仕事ができるようになるには、研究ばかりではなく実際の文化財保存活動に携わっていかないと考えています。

今年の夏に、ドイツ・ムンスター漆工芸博物館のモニカ・コップリン館長に、後継者候補として学芸員になることも薦められましたが、今月亡くなられた江里佐代子先生（截金の人間国宝）から受けた教えを思い、考えを新たにしました。先生がフランスに研修旅行に行く前にお手紙と大切な道具をいただきました。手紙には「截金の筆または竹刀等大切な道具を入れてお使いくだされば嬉しいです。御国を離れての東京での勉強をなされます貴女の熱心なお姿に私は学ばせていただいております」とありました。敬愛する先生からのこのお手紙が最後になるとは夢にも思いませんでした。先生の最後のお言葉を受け、私は先生の期待に答えるためにも、日本に残り漆芸文化財保存における正技術者になるために研鑽を積んでいきたいと強く願っております。

## 危惧とともに生きる世代

ネメフジャルガル

Nemekhjargal

出身国：中国（内モンゴル）

在籍大学：亜細亜大学大学院 経済学研究科経済学専攻

博士論文テーマ：農業構造調整下の牧畜地域経済に関する研究



僕は1973年、内モンゴル自治区ジョウウダ盟（現赤峰市）の定住した牧畜民の長男として生まれた。文化大革命は終息に近づいていたが、中ソ対立が激化し、戦争はいつ勃発してもおかしくないという噂が広がっていた。父は村の民兵隊の隊長を務め、家を空ける日が多く、僕は5~6歳のころから家畜の世話を手伝いながら育った。小学校2年生の時、「農家請負経営」と言われる農村改革の風が草原にも吹き渡り、僕の家族も自分の家畜を請負って放牧できるようになった。分配された羊を追って帰る両親の興奮を今もなお鮮明に覚えている。小中は地元で、高校は赤峰市のモンゴル族高校で、モンゴル語の教育を受けた。大学は東北地方の黒龍江大学に進学し、完全中国語での教育を受けることになる。

高校進学から大学卒業までの7年間、夏休みと冬休みの2か月だけを故郷で過ごすことができた。休みで帰省する度に故郷の変化はあまりにも大きく、毎回ショックを受けていた。小さいころ羊を放牧していた緑の丘が砂漠になったり、馬を走らせていた谷が畑に姿を変えたりしていた。1990年代から砂漠化が深刻化し、地元の人々の生産、生活のスタイルが急激に変化した。所得は少し向上したものの、兄弟3人は同時に学校に通っていたため生活のゆとりがなかった。父は私たちの学費を払うために、長年飼っていた愛馬を売るしかなかった。僕の少年時代に付き添ったその馬を思うと今も悲しい気分になる。そして帰るたびに、両親の顔のしわと故郷の大地の傷が増える一方だった。

大学進学率が低かったにもかかわらず、都市でコネクションを持たない田舎出身者は就職が困難だった。僕は大学を卒業してから2年間正式な職に就くことができず、現在日本で問題視されているフリーターに似た生活を経験した。自治区の首府フフホトでアルバイトをしながら

一生懸命日本語を勉強した。後に公務員試験に合格し、市役所で国際交流担当として働くことになる。中学生交流で度々日本に出張し、周りに羨ましいと言われるようになった。2年間のフリーター経験は、自己と社会を認識し直すきっかけとなり、困難に対してあきらめずに頑張ることを教えてくれた。

フリーター時代に出会った日本語が運命を変えることになり、4年間勤務した市役所を退職し、2002年3月に亜細亜大学に留学するために来日した。最初は国際関係を勉強しようと志していたが、大学院の事情があって経済学を専攻することになった。開発経済学という専門分野に出会い、草原と草原の人々に対する少年時代からの思いが目覚め、牧畜経済に関する研究を選択した。

問題は草原の砂漠化だけではない。内モンゴルでは、モンゴル人の言語と伝統文化が「砂漠化」し続けている。僕の同年代の内モンゴル人は、自然環境の急速な悪化と伝統文化の喪失という2つの大きな危惧を背負い、物理的にも精神的にも逃げる場所をなくしている。日本の大学院での留学を通じて、学問だけではなく世界を見る新しい目を獲得したい。そして危惧とともに生きる宿命を甘受し、土地も文化も荒廃し続ける民族のために、なんらの形で役に立つことをしたい。

## 私の夢は水処理の専門家になること

キムチャイヤラシー プアン  
**Kimchhayarasy Phuong**

出身国：カンボジア

在籍大学：宇都宮大学大学院工学研究科物性工学専攻

博士論文テーマ：排水処理における微生物の凝集現象の解明



カンボジアはポルポト時代を経て、多くの学者が殺されたため、現在では技術者が不足し、国の再建には優秀な人材が必要となっている。私は高校の時、日本の科学技術の進歩を知り、最先端の技術をぜひ学びたいと切望した。また、カンボジアで放映された“おしん”というドラマを見たことがあり、日本の文化や生活習慣に関心を持ち、日本への留学をしたいと決心した。大学1年生の時、難関の文部科学省の試験に合格し、1997年に日本国の国費留学生として来日した。

最初、1年間は東京で日本語を勉強した。その後、佐世保高専の物質工学科の3年次に編入学し、3年間化学に関する専門知識を修得した。その時、佐世保市水道局で実習をしたことがきっかけで、日本の優れた水処理技術に興味を持ち始めた。日本では工業排水、家庭下水からの水環境汚染が問題になっているが、水資源不足や非衛生的な水の使用が問題になっているカンボジアでは、劣悪な衛生環境のために、実際に、コレラやチフス、赤痢に代表される水系感染症の流行も度々報告されている。5歳未満の乳幼児ではそれらの感染症が致命的になるケースが多く、国連人口基金 (UNFPA) の報告データによると、実に8人に1人の子供が5歳の誕生日を迎える前に命を落としているとされている。このような問題はカンボジアだけではなく、アジアやアフリカの国々も抱えており、それらの問題の解決に取り組みたいと思い、大学に進学した。はじめに信州大学で化学的処理法を学び、さらに現在では宇都宮大学で生物学的処理法の研究を行っている。

博士の学位取得後、母国に帰国し、国の機関で水質改善プロジェクトの仕事に就き、水処理の専門家として活躍したいと考えている。日本で学んだ水処理技術を基に母国に適切な水処理法をぜひ確立し、カンボジアに適した水環境づくり、上水道、下水道を全ての地方に普及するのが夢である。日本の水処理技術をカンボジアに移転

するためのモデルを作り、この事に関する文献を書くとともに若い世代にこの分野の知識を広めるために母国語で教科書を書くつもりである。また、他の発展途上国においても適用できるような手法を開発していきたい。今後水処理技術を通して、人々の生活環境が快適になるよう私の力を役立てたい。

今まで勉強に励むと同時に、小中学校国際理解授業や国際交流会や身障者自立支援センター等でのボランティア活動にも積極的に参加してきた。日本とアジアの人々の間にある見えない国境の壁を少しでも低くし、国際交流の架け橋となることも私の願いだからである。

以上のように、現在は日本でしか経験できないことに取り組んでいる。将来、水処理技術者として活躍すると同時に日本で積んだ経験を母国に伝え、アジアのさらなる発展に貢献できる人物になることが私の夢である。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

## 東遊記——夢の起点之巻

そう こう  
宋 剛

出身国：中国

在籍大学：桜美林大学大学院国際学研究科環太平洋地域文化専攻

博士論文テーマ：魯迅と夏目漱石—日本の自然主義文学を背景とする比較研究—



### ①小さな王朝の誕生と崩壊

1979年に、「一人っ子政策」の実施とともに生まれた一人っ子です。両親の話によると、もう一人女の子がほしかったそうだが、封建制度を覆した政府のおかげで、私は我が家の「小皇帝」——中国では、一人っ子の代名詞——になった。

両親は弟と妹を持つ長男と長女です。しかも、二人とも「長男父の如し」という古い教訓の忠実な実行者です。父方の叔母が結婚した時に、月給56元しかなかった母が500元の洗濯機を買ってあげた美談もあるくらいです。

宋家の血を引く唯一の男児として、当然ながら、この優秀な伝統を受け継がないわけにはいかない。私の決意を試すかのように、4歳の時に母方の叔父の息子が生まれた。そればかりでなく、各地を転々として、商売をした叔父夫婦は、なんと息子を私の家に預けたのだ。

一人っ子なのに、弟を持つことになった。私の王朝は短命に終わった。しかし、そのおかげで、一人っ子らしくない、思いやりがあるといわれる今の私がいるのかもしれない。

### ②日本遊学

当時、母は珍しくも大学の中で日本語を教えていた。日中国交回復後もなく、大学に入った母は、国の需要に応じて日本語を勉強することにした。卒業後、後に勤めた大学へ配属されたのだ。

叔父夫婦の負担を軽くするために、甥の面倒を見ると自ら言い出したような、世話好きな母だから、休日になると、家は賑やかだった。担当したクラスの学生もいれば、日本人留学生も多かった。その時に、私は母に教えられた「こんにちは」、「ありがとうございます」などの生活用語を使いまくっていた。

そのような母の影響で、私は日本が好きになった。中学校と高校は北京市で唯一の日本語を教える学校に入った。大学も日本語専攻だった。大学卒業後の3ヶ月は今までの人生の中で一番忙しくて、一番重要な時期だった。

2002年の7月31日に大学を卒業し、8月18日に長年付き合った恋人と結婚し、9月10日に妻を連れて日本に来了。

思えば、飛行機に乗った時、妻は私にこう言った。日本留学を私たちの新婚旅行にしようと。辛い留学生活の中で、その話は私たちを忍耐強くさせてきた一つの宝物だった。

正直にいうと、その時に日本留学を決めた具体的な理由はなかった。今から考えれば、母などの家庭背景の下での自然な成り行きだったかもしれない。もしくは、憧れの第二の故郷への回帰ともいえよう。

### ③目指せ！中国のベネディクト

時は2005年だった。前年のサッカーアジアカップ期間中、中国人サポーターの日本代表に対するブーイング、小泉前首相の靖国神社参拝による中国人の「反日」デモは未だに記憶に新しい。一方、日本のメディアも中国人犯罪を大いに報道していた。

以前は文学の世界に身を浸していこうと決めていた。しかし、この一連の出来事によって、私は自分の将来について考え直した。日本と中国は地理的に近い割には、心が遠いのだ。だから、趣味としての文学をやるより、人と人の心を結ぶ文学をやったほうが有意義だと。

当時、ちょうど『菊と刀』を読んでいた。著者のベネディクト（Ruth Benedict）は文献と米国内での聞き取り調査だけで本を完成させたことにいたく感心した。妻も一人っ子のため、私たちはいずれ帰国して親孝行をしなければならぬ。けれども、博士号をとるための6年間の留学生活を通じて、私は徐々に日本を真剣に凝視して、日本人の心を理解するようになった。

そこで、私はこう決心した。帰国後、母のような日本語教師になって、学生たちに日本語を教えるだけでなく、文学を通じてできるだけ中国人に本当の日本と日本人を教えたい。たとえ『菊と刀』のような本が書けなくても、私は中国の行動者のベネディクトになりたいのだ。

## 雪像に惚れて

ヴェルノ ヘリ リース  
VÖRNO, Heli-Liis

出身国：エストニア

在学大学：学習院大学大学院人文科学研究科哲学専攻

博士論文テーマ：天台密教思想研究



はじめまして、Vörno(ヴェルノ),Heli(ヘリ)-Liis(リース)と申します\*。エストニア共和国の首都、UNESCO世界文化遺産にも登録されているタリン市の出身で、タリン市育ちです。

最初から始めますと、日本への興味は一枚の写真から始まりました。母親のペンフレンドから札幌雪祭りの写真が送られてきて、雪像は雪達磨しか知らない幼い目には日本が摩訶不思議な国として映りました。

二十歳になって愈々日本語を学び始められる機会を得ましたが、そこでは更なる不思議に出会いました。言語学的には、エストニア語も日本語も同じアルタイ・ウラル語族の言語であり、両国の人々は同じく数千年間農耕社会で生きてきました。習慣にも、贈り物を渡す際「くだらないものですが…」と謙譲表現を使うなどの多くの共通点があるという不思議でした。

しかし、その後は西洋各国で「日本」が大変人気であることに気づきました。漫画や禅(とされているもの)、漢字やジャパニーズ・フード。京都議定書。日本は極めてポスト・モダンな社会であると思われると同時に、日本と言えば、芸者や刀にヘルシーやエコロジーというイメージが一般の西洋人の頭の中に浮かび上がります。大学に入学したばかりでも、「それだけが『日本』?!」と疑問に思い、本当の日本を見つけるため、日本へ留学する決意を固めました。

来日したのは、平成11年3月28日でした。その当時の第一目標は、まずネイティブ・レベルの日本語能力を身につけることでした。第二の目標は、日本文化の一面でもその底まで潜ろうと、鎌倉時代仏教思想について学ぶことでした。後者が現在の天台密教思想研究まで続いています。

博士号取得後は、研究発表を続けながら教壇に立つことになると思いますが、専門的な文献の読者数が少ないので、一般向けの書籍や講演活動等も視野に入れていきます。

教職に関しては、既にエストニア人文大学から博士課程終了後の教職の可能性について打診されていますが、できる限りエストニア国内より幅広く考えたいと思います。

異文化理解というのは、海外で日本の文化を紹介することのみならず、相互的なものではなければ、正当な理解を得られないと考えていますから、日本国内で活動を続ける可能性も念頭においています。

\*母国であるエストニアでは現在 Heli-Liis Vörno とファーストネームを先に書きますが、日本では日本の習慣に従いまして、苗字を先に書くことにしております。

## 悔いのない人生を

おう い  
王 偉

出身国：中国

在籍大学：千葉大学大学院自然科学研究科人工システム専攻

博士論文テーマ：情報収集用超小型飛行体の自律飛行制御



私は中国東北地方にある小さな町に生まれ、両親と二人の姉に可愛がられて無憂な幼年時代を過しました。しかし、小学3年生の頃、父親が脳梗塞に倒れて半身不随になり、母は父を看護するため、仕事を辞め、生活が一変しました。災は重なるもので、高校三年の時に、二番目の姉が、風邪薬の副作用で赤血球の寿命が通常の十分の一しかなくなり、昏睡状態になってしまったのです。二人もの重病人を抱えて治療費を集めるため、住む家を売却し、更なる借金をせざるを得ませんでした。こんな困難な状況でも、母親と一番上の姉の努力で、私は大学に入ることができました。

卒業後、私はハルビン電力設備総工場で働くことになりました。家族の借金返済を早めようと、夜と週末にクラブでギターを演奏していました。帰宅は常に終電も終わった深夜で、冬は地面が凍り、マイナス30度の寒さを耐えて歩いて帰宅するしかなかったのです。手足が寒さで硬くなり、ドアの鍵を開けることすら困難でした。部屋に入った後も、しばらくの間は寒さではっきりしない意識は回復できません。このような状況で、よっぽど意志の強い人じゃないと二、三日でやめてしまうでしょう。しかし、私は六年間くらいやり続けていました。

このように家族全員の努力で、1997年によく借金を全額返済できました。家計がある程度落ち着いたところで、私はもう一度大学に戻り、体系的に電子機械技術を学ぶという意を固めました。しかし、中国では一旦学校から離れ、職に就いたら、正規大学に入学するのがなかなか難しいのです。人生に悔いを残さないように、色々考えた末、25歳になった私は日本への留学を決意しました。

1998年春に来日した私は、アルバイトをしながら、

2年間留学生別科で日本語を勉強した後に、千葉大学の工学部電子機械学科へ進学しました。大学の充実した教育環境に私の勉学意欲がより引き出されました。4年生の時に、応募倍率が最も高い野波研究室に入り、本格的に小型飛行ロボットの自律飛行制御の研究を始めました。人命救助等に活用できるこの研究は、テレビ取材や学会・論文発表で社会全体に注目されます。これらを励みにし、そして研究をもっと深めていきたいという気持ちで、博士コースまで進めてきました。

小型ロボットの先端を走る私の研究は、これまでビジョンによる室内自律飛行やGPSベースの屋外自律飛行等の成功で飛躍的な成果を収めました。実用できるレベルまで、まだ程遠いのです。このため、私は博士コースを卒業した後も、専門の研究機関に入り、今の研究を続け、一日も早く実用できるようにさせたいと思っています。その後は中国に戻り、寂しい母親に息子としての念願の親孝行をしようと思います。一度しかない人生をどうやって送るかは、一人ひとりの人間にとって非常に意味深い問題ですが、私は自分が将来偉い人物になるとか、すばらしい研究者になるというような夢ではなく、ただ悔いを残さない人生を送っていければよいだろうと考えています。

## 国際舞台への一步一步

しゅう しん  
修 震

出身国：中国

在籍大学：東京工業大学大学院理工学研究科機械制御システム専攻

博士論文テーマ：インターネットを用いたマルチ利用在宅リハビリシステムの開発研究



私は中国から来ました修震と申します。現在博士課程の学生として東京工業大学大学院理工学研究科機械制御システム専攻に在籍しております。

振り返って見れば、8年前私がまだ大学2年生の頃に初めてアメリカからきた学生と会いました。私は中学時代からもう英語の勉強を始めたのですが、彼らとの交流は思った通りにはできませんでした。国際交流における言語能力の重要さを身を持って感じ、英語の勉強に励みました。そして、子供の頃から科学者になろうという夢を抱いていた私は、念願の大学院に入学し、いつか海外で博士号を取ろうと思いました。

正直、当時の私はまだ日本語が全然分らなかったため、留学先をアメリカと考え、TOEFLとGREの試験を受け、留学の準備をしていました。そして、修士2年を迎えたとき、現在の指導教授北川能先生が当時私が在籍していた北京理工大学を訪問され、私は先生と話をすることができました。この出来事が私の人生にとって大きな転機となりました。私は、自動車産業やロボット研究のトップクラスを誇る日本にずっと興味を持っていました。機械工学専攻の私にとっては、一度でいいから、世界第二の経済国日本の強さを身近に感じてみたい、そして中国人の日本留学の歴史を100年以上（110周年にあたる）も持つ、日本という国の文化や社会を他人に言われたままで受け入れるのではなく自分の目で見たい、自分の手で感じたいと思い、北川先生の誘いを受け、日本への留学を決めました。

2004年10月、東京工業大学に入学し、博士課程の学生として北川研究室に所属しました。三年間研究の面でも生活の面でも、人一倍の努力をして来たと思います。研究テーマは機械工学、通信情報工学と医療福祉3つの分野に関係するので、今まで勉強して来た機械工学だけではなく、通信情報工学と医療福祉の知識も必要となったため、私にとっては高い壁のようなものでした。特に苦手分野の医療福祉に関しては全くの素人で、ゼロから勉強しなければならませんでした。努力の結果、今までの研究成果をロボット業界トップレベルの国際会議IROSを含め、いくつかの学会で発表できました（国際発表5本、国内発表2本）。近いうちに、ジャーナルへの

投稿も予定しております。これからは、研究の実用化に向け、リハビリ専門家の理学療法士に意見を頂いて、まだ解決されていない難関を乗り越え、最後まで努力し研究を完成させたいと考えております。

そして、生活の面では、せっかくの日本留学のチャンスなので、自分の力で日中友好に何か役立つ事ができないかという思いで、副会長として中国留学生学友会という留学生支援ボランティア団体に入り、様々なイベントや交流会に積極的に参加したり、リーダーとして東工大留学生会連合会TISAの設立を促進したり、アジア地域担当として国際流体制御FPNI青年協会の会員たちと活動したりしています。人と触れ合うことから、人の困難を解決してあげることまで、留学生の1人として多彩かつ意義のある留学生生活を過ごしています。

将来に関しては、いままで自分が学んだ知識を生かし、日本の自動車やロボットの会社で働いてみたいと考えております。日本の社会にもっと馴染みたいし、国際社会の一員としての役割を果たしていきたいと思っております。そして、経験を積んだ私は、さらに広がったグローバルの大舞台に飛び出し、さらなるキャリアアップを目指して行きたいと考えております。

日本に来てから、私にとってもう一つの人生の転機が訪れました。それは同じく日本に留学している妻と出会い、2007年の6月に結婚しました。今は毎日がとても幸せです。親元を離れ異国に来てから、いろいろ親切な方にお世話になりました。時々私は思います。人の一生でどれほどの人から助けられることになるのでしょうか？そして、その人たちにちゃんとお礼を言えることは出来るのでしょうか？少なくとも私はこの感謝の気持ちの全てを伝えることはできませんでした。ですから、私はその気持ちを力に替え、人一倍、元気よく生きることにしたいのです。その元気な自分が、さらに周りの人を幸せにすることは一番の恩返しだと思います。渥美国際交流奨学金を申し込み、渥美の大家族に入りたいと思ったのも、この思いがあったからかもしれません。国籍、人種、言語を越えて、より多くの人たちに幸せになってもらいたいから、今の自分は頑張れるのだと思います。

## 失われた時間を探して

ユク ゼファ  
陸 載和

出身国：中国

在籍大学：武蔵野美術大学大学院造形研究科造形芸術専攻

博士論文テーマ：四天王像の図像の成立と展開―統一新羅から高麗初期の作例を中心に―



私は韓国の東国大学校において学部で4年間インド哲学を専攻した。また、インド哲学の中でも主に仏教哲学に興味を持っていたが、その研究はインドの経典や学術論文など、文字資料の考察が中心となっていた。このような中で3年次の時に行ったインド旅行は、私に哲学というものを研究する新たな考え方を与えてくれた。インドのアジャンタ石窟やエローラ石窟などで目にすることができた多くの仏教彫刻やヒンドゥー教彫刻の中にはインドの精神と哲学が形として顕現されていた。解釈し難いものであった経典の内容が造形作品というフィルタを通して見ることによって、一層親密に伝わってきた。そのような経験を機会に私は、造形物の解釈を通じた新しい観点から仏教に秘められた真義にアプローチしてみることにした。しかし、当時韓国は未だ美術史の歴史が浅く、美術史に関する研究方法が整っておらず、造形作品が持つ真義を読み取ることは困難であった。

仏教美術の研究ができる良い環境を求めている私は、学会誌などを通じて日本の研究状況を知ることができた。当時日本では国内の仏教遺跡や仏像に関する基礎データの収集がほぼ終わっており、文化財の保存・修復も積極的に行っていた。また、日本は漢訳経典に関する世界一の理解者としてインドや中国、韓国、東南アジアなどアジア全域の仏教遺跡においても活発な研究活動を進めていた。そのような環境は仏教美術を勉強しようとする私の心を惹くに十分たるものであった。

このような理由を以て1999年3月に日本に留学し、現在武蔵野美術大学博士後期課程2年において仏教美術の中でも「四天王像」というテーマを挙げて現場での実地調査とその調査資料のデータ化を中心に研究を進めている。

博士課程終了後は、博士後期課程まで行った古代遺跡の実地調査や研究の経験を生かし、韓国の博物館や研究機関などにおいて古代美術品の研究および保存修復に関する仕事に勤めたい。私が実地調査をしながら調べた結果、未だに韓国には遺跡の調査や保存に関する方法論が定まっておらず、多くの文化遺産が放置されていることがわかった。日本留学中に習った研究方法は、韓国の文化遺産を調査したり、保存・修復するに当たって役に立つに違いないと思う。

また、自分の研究においては、博士後期課程まで行ってきた四天王像に関する研究をさらに進め、アジア全域における守門神像の研究にまで領域を広げたい。そこで得られた成果を韓国のみならず、日本や中国の学会で発表し、アジアの守護神像に関する研究に貢献したいと思う。

## 日本留学の道

ちょう けん  
**張 建**

出身国：中国

在籍大学：東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化専攻教職開発コース

博士論文テーマ：中国都市部における社会階層と高校段階教育



私は1969年に中国山東省済南市に生まれ、日本に来る前までは、この町で過ごしていました。山東省は孔子が生活した国であり、儒教の影響が強く残っています。そのために、私は子供の頃から学校の「先生」になることを夢見ていました。大学へ進学の際にも、迷わず師範大学を選びました。師範大学生として、学問と精神力を高めるだけではなく、健康な体を作るために、バドミントンクラブで4年間の練習を重ねました。卒業後、山東省初のスクール・カウンセラーとして6年間山東師範大学の付属高校で実践と研究を行いました。しかしその間に、多くの相談事例から、生徒の問題は単に個人的な心理問題だけではなく、中国の社会変化に強く関係していると感じるようになりました。その時から、経済体制の転換による中国社会構造の変化と教育平等問題について興味を持ち始め、研究しようという意識が強くなりました。その後、同大学大学院の修士課程で教育社会学を研究することとなりました。

1999年3月、大学から日本への国費留学生として推挙され、日本で学位を取得するように要請されました。多くの教育社会学研究の資料から、日本の社会階層変動と教育についての研究が多数存在することを知り、特にSSM調査(社会階層と社会移動全国調査)のような素晴らしい調査と研究が、すでに50年間続けられていることに、大変興味を持ち始めました。考えてみると、文化の面では中国と関係が深く、すでに同じく「圧縮された近代化」を経験した日本の社会理論とその研究は、欧米のそれより、必ず中国のこれからの社会発展と研究に役立つと感じました。熟慮した結果、思い切って、日本への留学を決意しました。

1999年10月に、東京大学で留学生としての生活を始め、2001年4月に修士課程に進学しました。日本での留学生活は、緊張感にあふれる一方、いろいろな面で充実した感覚を覚えました。ゼミでのディスカッション、学会での発表、来日した中国人生徒への支援活動、奨学

金財団のワークショップ、2年ごとの中国での大規模な調査などの活動を積極的に行い、これらのすべては私に刺激を与え、自分の学問世界と国際社会への探索を導いてくれました。早くも日本に来て8年目になりますが、「社会変動期の中国における社会と教育達成」をテーマに研究を進め、中国ですでに4回実施した調査の分析を踏まえて、2008年10月の博士論文の完成を目指しています。

博士号を取得した後は、中国に戻り、大学への就職を希望しています。日本での長い留学経験を生かして、国際舞台で活躍できる人材を育てると共に、中国社会の教育機会の平等問題に関する実証研究を深め、中日両国の学術と民間交流の促進に尽力したいと考えています。

## 漢字でつながる言葉・文化でつながる両国

りゅう けん  
劉 健

出身国：中国

在籍大学：北京大学外国語学院日本語文化学部博士課程 [早稲田大学日本語教育研究科]

博士論文テーマ：日本語サ変動詞のアスペクトに関する研究



北京大学日本語言語文化研究室の劉健でございます。1998年、山東大学に入って、日本語を専攻として勉強し始めましたので、日本語と出会ってから今年ちょうど十年間であるということになります。当初、どうして日本語を専攻にしたかという、それは、中国から遠からず近からずにある日本という国でも漢字を使っていることを不思議にまた興味深く思っていたからです。昔、韓国でもベトナムでも漢字を使っていましたが、今は中国と日本だけです。また、その書き方と意味は違ったりする場合もたくさん存在しています。両国で共有している漢字、そして漢字の基盤となる両国の文化現象などを、いつか、自分の力で探ってみようと心の中で決心しました。ですから、修士課程のときも、博士課程もずっと日本語を専攻として勉強してきたのです。

大学の時の勉強と修士課程、博士課程の勉強とは異なるところがあるように思います。大学のときは、毎日先生から新しい知識を教えていただき、また新しい単語を覚えるのが精一杯でした。日本、あるいは日本語のどこに一番興味を持っているかの問題はあまり考える余裕がなかったのです。修士課程に入ってから、やっと学んだ日本語を道具にし、自分の興味深く思っていることが味わえるようになりました。初めに気になったのは、日本語の「～は～です」という文は中国語の“…者…也”の文に似ている構造を持つことです。このことによって、日本と中国との間に存在するこのような似たり異なったりする言語現象の重さを実感します。その最も顕在的表現は漢字であると思います。日本語の中の漢字は古代中国語の「活化石」（生きている化石）とさえ言われています。それは、古代中国の言語や文化の多くは日本語の漢字に強く反映されていることを指します。ですから、今度の博士論文として、日本語の漢語に関する研究について考察したいと思います。

私は、来年(2009年)7月に博士号を取る見込みですが、博士号取得後、日本語の教師になりたいです。というのは、三つの理由があります。一つは、せっかく十数年間身につけた知識を他人と分かち合いたいのです。日本語を習得している中国人の数は年々増えつつありますが、留学や仕事のために勉強しているのが大多数です。日本語の会話や文法知識だけでなく、日本語そのものの背後で働いている文化的要素、日本語と中国語の関係なども中国人日本語学習者に知ってほしいのです。もう一つは、大学の教師になったら、考える時間も十分持つことができるのです。中日両国が共有している漢字およびその背後で働いている文化的要素についての研究は、時とともにその発見が多くなるのですから、ただ一つの博士論文で収めることは不十分で、絶えず考え、自分の研究を引き続き進めたいと考えています。最後に、ささやかでありながらも、私の力でできるだけ多くの中国人に中日両国の歴史・文化そして生活習慣などの面における異同点を理解してもらえることは、私にとってこれ以上ない有意義なことだと思います。

## 2007年度

### 海外学会派遣プログラム参加報告

禹 成勳 「ベトナム最後の都城フエ」 ----- 44

Olga Khomenko 「ハワイの国際学会参加報告」 ----- 46

李 済宇 「GEOACADEMY- 軟弱地盤改良技術に関する国際技術講習会 - への参加報告」 ----- 48

## ベトナム最後の都城フエ

ウ ソンファン  
禹 成勳

博士（建築学）東京大学  
学術振興会外国人特別研究員  
2006 年度奨学生

ベトナム中部、ダナンから 100km ほど北西にはフエ（HUE）という都市がある。フエの市街は、15 キロメートル下流で南シナ海に注ぐ香江（フオンジャン）を挟んで北岸の旧都城と、南岸のフランス植民地時代の建物が並ぶ新市街とに二分される。私は、ここを調査するため、2007 年 8 月に初めてベトナムを訪れた。

ベトナムは紀元前から中国の影響下にあったため、その政治形態や文化は多く中国に倣ったものになっている。ベトナム最後の王朝、阮朝（グエン、1802 ～ 1945）の都城フエも、清の都城制度、つまり中国の都城制度に基づいている。つまり、その城内は碁盤状街路によって 95 箇所の坊に区画され、各坊には王宮、官庁、離宮、庭園、軍舎、官僚や市民の住宅などが配された。が、こうした城内は、中国のような羅城ではなく、フランス人、レー・ヴァン・ホクが設計したヴォーバン式とよばれる多角形の城壁が廻しており、その外側には、香江から引かれた幅 40m の護城河（ホタインハ）と呼ばれる濠が巡らされている。さらに、護城河から各々城内に導かれた水路の御河（グーハー）が、城内を南北に両分しながら流れており、その南側に王宮が築かれた。

かつては偉容を誇ったこの都城も、フランスの植民地やベトナム戦争を経験し、その一部は廃墟となり、王宮背後の城内や城壁の上は、住宅や畑に占められたところもある。フエが都城であることを示していた数多い施設のなかでは、園宅（ニャーヴオン）と呼ばれる旧貴族・皇族の住宅、そして城外の東北側には、道路に沿って昔の商店街が残っており、1993 年には王宮南門、宮殿、帝廟などが世界遺産に登録された。

だが今のフエは、新たな時を迎えて変化しつつある。町のいたるところに市場や商店はもとより、P.C. バン（ネット カフェ）やカラオケなどができており、新市街

ではホテルの建設がラッシュとなっている。そこで生活を営んでいるベトナム人は、携帯を持ち、自転車やバイク、あるいは車に乗って市街地を走っている。しかし、そこから城外の東側に行くと、香江沿いに停泊している数多い船が目に見え。それは、いまだに貧しい生活に極める、いわゆるポートピープルたちの住居である。彼らは、そこに生まれ、そこから育てられ、そこで死ぬかも知れない。そういっても、そうした状況は、彼らの住宅である船から汚れている香江へそのままダイビングし泳いでいた子供たちから笑顔を奪うことはできない。彼らは、車に乗って市街地を走っている人たちより、実に素晴らしい笑顔の持ち主であった。

私は、中国の都市制度を基にしながら展開した東アジアの歴史的都市に興味を持って研究している。こういった観点から見るとフエは、まさに私の研究テーマに適している都市と考えられる。それはまず、中国を始め、日本や韓国など、同じ制度に基づいて建設された異なる場所における都城の似ている点と異なる点、そして、そうした結果を生み出した背景や原因は如何なるものであるかがうかがえるためである。次いで、王宮や官庁、宗廟や社稷などの中国都城制度と、ヨーロッパから入ったヴォーバン式という城壁とで一つの都市が建設されており、時代ごとに都城のあり方や姿に対する変化した要求そのものが理解できるためである。

東洋と西洋との出会いからできたフエでは今、資本主義と社会主義が出会い、過去と現在が出会い、貧と富が出会っている。それが明日のフエを開くに違いないが、その元肥（原動力）となるものは、今も汚れている香江で泳いでいるだろう子供たちの笑顔ではあるまいか、と私は考えている。



王宮南門



市街地の市場



城内の古民家



船上住居



城外旧商店



子供たちの笑顔

## ハワイの国際学会参加報告

オリガ ホメンコ

**Olga Khomenko**

博士（地域文化研究）東京大学

早稲田大学研究員、学術振興会外国人研究員

2002年度奨学生

今年の1月にハワイのホノルル市で開催された2008 Hawaii International Conference on Art and Humanitiesで、ジュリアン・シブルカ教授と一緒に、"From Passenger to Driver: Comparative Study of Advertising Automobiles to Women in America and Japan, 1910-1970" という演題の発表をしました。私が以前に博士論文の一部として纏めた日本の自動車広告の資料や研究成果と、アメリカの広告史の専門家であるシブルカ氏の資料を比較することによって得た、新しい研究成果の発表だった。

20世紀を通じて、アメリカと日本の自動車業界は、女性向けに様々なマーケティング戦略や広告を考えていた。20世紀初めのアメリカで使われた戦略や広告と、戦後の日本の状況は同じだったか、それとも違っていたか、どんな共通点や違いがあったかを明らかにすることが、今回の研究課題だった。様々な資料を比較した結果、アメリカで1910年代、1920年代に起きたことと、日本で1950年代から1970年代にかけて起きたことの間には、同じような傾向が見られたといえる。つまり、その頃、婦人雑誌に掲載された自動車の広告では、車の使いやすさ、色、可愛さ、車を持ったライフスタイルの美しさ、あこがれた階級やジェンダーが強調されていた。

このような自動車広告にみられる日米の傾向の一致や、戦後日本の婦人雑誌広告で描かれる女性が経済復興に伴って変化していく姿は、一見したところ、1910-20年代のアメリカの広告に影響されているように見える。自動車を運転することによって自信をつけ、行動範囲を広げ、「主婦」以外の「自分」のイメージに気づく女性が誕生する。「車のある生活は、新しい生活スタイルです」と強調する広告を見た日本の婦人雑誌の読者たちは、強い憧れを感じたに違いない。同じような状況や描き方は、

戦前のアメリカにもあった。日本では戦後からそのような描き方が現れたという事実は、アメリカから日本への影響であり、コロニアリズム、またポストコロニアリズムにしか見えない。戦後、アメリカから多くの大衆文化を受け入れた日本では、戦前に成功したアメリカ広告業界のやり方を学んでいたに違いない。

しかしながら、時間的にも地理的にも歴史的にも離れている他の国においても、自動車広告に現れる女性像の変化や広告手法に同じような幻想が見つかる。それもポストコロニアリズムといえるかどうか問題だ。現在、経済的に急成長している中国、ロシアやウクライナがその例である。そこで私達が考えているのは、どの国においても、「良い生活」への人々の強い願望が、ある時期に、物質的な「もの」の購入への強い願望に変わるということである。身の回りの必需品が揃うと、人々はブランド品に手を出し始める。車はその一つである。また、女性は、新しいものにとっても敏感な存在ともいえる。国や伝統文化に関係なく、彼女たちは「新しく良い生活への願望」という共通点を持ち、社会を変えていく中心とある。彼女たちは「Global-looking class」といえる。消費行動の研究によると、それはポスト・アメリカニズムではなくポスト・マテリアリズムとえる（Michael R. Solomon, Consumer Behavior&: Buying, Having and Being, 2007）。

私達の発表はとても好評だった。たくさんの外国の歴史、文化、マーケティングの専門家と知り合って意見交換することができた。学会でいただいた意見やコメントを踏まえて、さらに研究を進めていきたいと思う。その後、ハワイ大学の図書館で研究資料を調査し、ハワイ大学が出版しているアジアや日本の文化、歴史、消費経済の発展、女性研究に関しての最も新しい本を現場で購入した。今後の課題として、今回の研究にウクライナの

1990年代以降の自動車広告の資料を加えて、より広い領域の研究にしたいと思っている。

以上のように、今回のハワイ国際学会では、非常に大きな成果を得たが、さらにもう一つのとても貴重な経験をした。大陸生まれでの私にとって、初めてハワイという太平洋の孤島の自然や文化に触れるという新しい経験ができ、とても良い思い出となった。東京からの飛行機がホノルル空港に着陸する時に、空から見た島は「海に疲れて寝込んでいるマンモス」に似ていると思った。空から見た島の土の色が、昔博物館で見たマンモスの灰色のしわだらけの皮膚に似ていて可愛かったからだ。しかも隣にいくつかの島があったので「疲れた家族」に見えた。着いた日に少し時間があったので少し観光した。エ

メラルド色の海は本当に美しかったし、緑のいっぱいの真珠湾など歴史に触れることもできた。それから勉強不足でショックだったこともある。今まで、パイナップルは木にできるものと思い込んでいた。だから、畑に行ったら驚いた。パイナップルはウクライナの赤カブかぼちゃみたいに、土に半分まで埋まって育つものだったからだ。早速、ウクライナの友達が間違えることがないように、写真を撮って送った。

今回ハワイの学会発表のおかげで、自分の研究に関する意識だけではなく、世界観も広げることができてとてもよかったと思う。なぜなら、研究者は自分の研究活動を支える力を色んな「元」からもらうのだと思うからである。



## GEOACADEMY- 軟弱地盤改良技術に関する 国際技術講習会への参加報告

リ ジュウ  
李 済宇

博士（建設工学）早稲田大学  
鹿島建設技術研究所主任研究員

2004年度奨学生

2008年4月8日から10日にかけて、オランダのデルフトにおいて Deltras(旧 GeoDelft)の主催により、GEOACADEMY- 軟弱地盤改良技術に関する国際技術講習会 - が開催され、講習会およびテクニカルツアーに参加しましたので、その概要について報告いたします。

幼い頃から聞いていた堤防決壊から町を救った少年の話や大きな風車、そしてオレンジ軍団と呼ばれるサッカーチームを思い起こさせるオランダは、国土の総面積が日本の九州地方の面積に相当する小さい国でありながら、フランス、ドイツ、イギリスに囲まれヨーロッパの交通・商業上の要地となってきました。オランダは、ヨーロッパでは勿論世界を舞台とした貿易に早くから力を注ぎ、日本とも1600年代から交易が始まっていたことはよく知られています。また、オランダは、ライン川、マース川下流の低湿地帯に位置し、国土の1/4は海水面より低い陸地であるため、オランダ人は長い間海水とたたかって、国土をひろげてきた結果、国土の多くをポルダーと呼ばれる干拓地が占めるようになりました。これに不可欠な堤防を築くようになったのはおよそ600年前の中世の中ごろまで遡ります。湿地帯を堤防で囲んで海水が入るのを防ぎ、風車の力で水をかき出して干拓地としてきたわけです。干拓地は海成粘土からなる肥沃な土地となり、オランダの競争力となる園芸や農業の発展を促してきました。今でも、チューリップとチーズはオランダを代表する名産品であることは常識といえるでしょう。このような長年の経験から培ってきた築堤技術は、今日の土木技術において軟弱地盤の処理として継承されてきており、オランダ国内では勿論世界中の多くの国においてその技術が多く活用されています。そのオランダの土木工学に関連する技術のうち、特に地盤工学分野でのトップランナーとして今まで活躍してきたのがデルフ

ト工科大学です。オランダの行政の中心となっているデン・ハーグと第2の商業都市ロッテルダムの上に位置する小さな町デルフトに本拠地をおいたこの大学は、1842年1月8日、オランダ王のヴィレム2世によって設立されたオランダで最古・最大の工科大学であり、オランダの優れている科学・工学技術力の源となっています。

今回、デルフト大学の土木工学科・地盤工学研究グループを中心に半世紀前に設立された世界的に有名な地盤工学分野のリサーチ・コンサルティング専門機関である Deltras(旧ジオ・デルフト、オランダ・デルフト工科大学内に併設)にて、軟弱地盤における改良工法の最新技術について技術トレーニング(GeoAcademy)プログラムが開催され、ヨーロッパを中心に世界中から計11か国、総勢46名の参加がありました。講習会では、軟弱地盤の有限要素法変形解析プログラムとして実績の多い PLAXIS(プラキシス)の開発者であるシュツットガルト大学のベルメール教授を筆頭に、ヨーロッパで一流の学識経験者・エンジニアが講師陣となり、国際的に実績のある工法並びに欧州で普及・発展している工法を対象に、それぞれの施工技術と設計手法が講義形式で紹介されました。さらに、ロッテルダム駅再開発地区の現場見学を行うなど、最新地盤改良技術について有益な情報を幅広く修得することができました。なお、本講習会は、今後注目されるのであろう地盤改良工法のトータルエンジニアリング、すなわち地盤構造物のライフサイクルエンジニアリング、ヘルスマonitoring等長期的性能保証のニーズに対応したエンジニアリングに対しても非常に有益な情報であると感じました。

また、筆者がオランダに滞在した時期は、彼らが世界に誇るチューリップの満開するシーズンであることに気

がつき、講習会の合間を縫って、毎年4月になると鮮やかなチューリップで埋め尽くされるキューケンホフ公園を訪れました。今年は、気候が思わしくなく、気温が例年より下回っていたため、まだつぼみの状態が多いということでしたが、数え切れないほど多い種類のチューリップを含め多種多様な花が咲き誇る中、綺麗な空気を吸い込みながら、散歩を楽しめたことは、なにより贅沢な幸福であると感じました。なお、以前から念願であった

アムステルダムのごッホ美術館にも足を伸ばし、オランダが生んだ印象派巨匠の名作を堪能して参りました。

今回得られた技術的知識と、人的ネットワークを生かし、今後ともより安全な社会作りに貢献できる技術開発・普及に努めていきたいと思います。



デルフト工科大学本部 (和蘭・デルフト)



穏やかに落ち着いているデルフトの町



現場見学中の筆者 (和蘭・ロッテルダム)



キューケンホフ公園 (和蘭・リッセ)

## AISF ネットワーク

- ラクーン会 ..... 51
- 第7回日韓アジア未来フォーラム in グアム  
「東アジア協力の過去、現在、未来」  
～日韓アジア未来フォーラムのあり方を念頭に置きながら～ ..... 55
- 第2回SGRAチャイナ・フォーラム  
「黄土高原緑化協力の15年」  
～無理解と失敗から相互理解と信頼へ～ ..... 57
- 関口グローバル研究会（SGRA） ..... 60



## ラクーン会レポート

常務理事 今西淳子



### ■ 第7回韓国ラクーン会（K S R）

2007年4月21日（土）、夕方7時、ソウルの江南区にある焼肉のお店サリウォン（沙利院）で第7回韓国ラクーン会（K S R）が開かれました。毎回一つずつ学ぶことがあるのですが、この沙利院とは北朝鮮の地名で、光復後（終戦後）に黄海北道に出来た新生都市だそうです。ちなみに道庁所在地。店名の由来は未調査です。

江南駅周辺は主にオフィス街なのですが、若者たちでごったがえす街でもあります。幸いこのお店は南にちょっとはずれた落ち着いた大人の雰囲気でしたといいたところ、奥では（あまりにもうるさくて奥とは思えませんでした）日本からの若い子たちがどんちゃんさわぎをしていて……。

前は北朝鮮の核実験で大騒ぎの中でのラクーン会でしたが、今回はアメリカの銃乱射事件後の重苦しい雰囲気の中での会となりました。渥美財団常任理事の今西淳子さん、李来賛さん（K S R会長、96狸）金雄熙さん（96狸）南基正さん（96狸）鄭成春さん（00狸）李炫瑛さん（01狸）金賢旭さん（K R S幹事、03狸）韓京子（K R S幹事補助、05狸）の8名が集まりました。（あ！2期の参加率、すごいです）

会では、意外と既存のメーリングリストのデータではうまく連絡がつかないということがわかりました。メールを送っているはずなのに、相手に届いていなかったり、戻ってきたりということがあのようなので、一度すべて確認をとる必要がありそうです。

また、会の後でしたが、食事だけで終わるというもの物足りないというお話もありました。わざわざ遠くから（？）いらっしゃる今西さんに何かお見せしなければいけないのかと思ったりもするのですが、難しいものです。今回の写真は、現在写真にはまっておられる金雄熙さん

の作品です。どうぞ前回の写真と比べてみてください。趣味ということからいうと、わが会長イネチャン（李来賛）さんがゴルフにはまっています、ウェストが2インチもダウンしたらしいです。腰にくびれができてますます「いいねーちゃん」として磨きがかかっておられます。

精神的にも身体的にも健康にすごしましょう！

（文責：韓京子 2006 ラクーン）



### ■ ラクーン会 in アメリカ

フィラデルフィア市にある日本伝統建築「松風荘」の保存修復の工事が終わり、千住博画伯の滝の襖絵が奉納されることになり、日本松風荘友の会の代表として奉納式に出席した今西淳子常務理事は、アメリカ東海岸で活躍する狸たちとラクーン会を開催しました。

4月28日（土）午前11時、喬辛さん（96狸）と張紹敏さん（97狸）が、今西真帆が在籍するペンシルベニア大学まで来てくださり、アメリカの歴史を感じさせる獣医学科の建物を見学した後、フィラデルフィアで初めてのラクーン会が中華街のレストランで開催されました。東工大で博士を取得した喬さんは、カナダに移住した後アメリカの大学に移り、現在は半導体関係の企業

に勤めています。東大医学部で博士を取得した張さんは、エール大学でポスドク研究員として働いた後、今年からチョコレートで有名なハーシーのペンシルベニア州立大学付属病院に移りました（詳しくはS G R Aかわらばんを参照してください）。



張さんの車でニューヨークへ戻り（約2時間）、ちょっと行き違いがありましたが、午後8時から許曉原さん（98狸）ご夫妻と一緒に、Shun Lee Palace でラクーン会 in ニューヨークを開催。数年前に開催したラクーン会もこのレストランでした。コロンビア大学ゲノム研究所に勤める許さんは、ご主人も同大学の研究員、お嬢さんは同大学経済学部を卒業するところで就職活動中。もうすっかりニューヨークに落ちついた様子です。



4月30日（月）午後6時、ボストン空港に孫艶萍さん（98狸）がお友達のアルバート教授と一緒に迎えに来てくれました。その後、ボストンの一番古い地区にある、今ボストンで評判のモロッコレストランで、ラクーン会 in ボストンを開催。王岳鵬さん（97狸）夫妻と2

人の子供たちも含め、参加者は7名でした。孫さんは東大医学部に在籍中から行き来していたハーバード大学ブリガム病院放射線科研究員で、現在は自分の研究室を任せられ、非常に忙しい毎日を送っているようです。タフツ大学付属のマサチューセッツ総合病院心臓病科研究員の王さんは、仕事の傍ら医師国家試験を受験し、これから研修医としての生活が始まるそうです。アメリカで医者資格をとる決心をしたのは、タフツ大学の研究員を努める奥さんと、中学校1年生の息子さんの強い希望があったためとのこと。「この年になっての受験は本当に大変」とのことでした。



最近は、日本語を使うことがあまりないアメリカへ渡った中国人ラクーンの皆さん、でもすぐに思い出して下さって、渥美財団の懐かしい話、競争の激しいアメリカでキャリアを追求する苦労話、子供の教育問題などで話がはずみました。皆さんが、グリーンカード（永住権）や市民権（国籍）を申請中でした。皆さん、またアメリカでお会いしましょう！

そういえば、日本の大学院で博士号を取得した後、アメリカへ行くラクーン会員が減ったような気がします。アメリカでポスドクをした後日本の大学に就職した人も居ます。また、まだ実例はありませんが、中国へ戻ることも選択にはいつてきたようで、日本留学後の進路はますます多様化しているようです。

## ■ 韓国ラクーン会 in ソウル

2007年10月21日（日）の夕方、ソウルでラクーン会が開かれ、メンバーが久々に集まりました。場所は、グランド・インターコンチネンタルホテルの近くにある、こじんまりとした韓国料理の店でした。この日は今西常務理事が参加できなかったため、あいにく我々だけの集いになってしまいました。

一人ずつ近況を報告することはなかったのですが、皆さんそれぞれ忙しい日々を過ごしているように見受けられました。食事がある程度進むと、誰となく留学の思い出話をしはじめ、それぞれ留学していたころの日本について語りました。その中でも面白かったのは約二十年前の日本における米不足の話でした。つい最近留学を終えて戻ってきた玄さんをはじめ、後輩たちには興味津々でした。最後に、家族づれで集まろうという提案があり、それについて話しあいました。まだ具体化されてはいたのですが、実現しようという声が高まりました。

今西常務理事にお会いできなかったのは、とても残念でしたが、集まったメンバーは久しぶりに顔を合わせることができ、楽しいひと時を過ごしました。

参加者：李來賛（奥様、お嬢様）、南基正（お嬢様）、高熙卓、鄭在皓、朴栄濬、金賢旭、玄承洙

（文責：金賢旭 2003 ラクーン）



## ■ 韓国ラクーン会の皆様

10月21日にソウルで開催された韓国ラクーン会をドタキャンしてしまい、大変失礼しました。忘れ物をしたので家にとりに戻ったことが飛行機に乗り遅れた第一の原因ですが、羽田の国際線は上海便も加わり大変混雑

していて国内線ターミナルの駐車場に行かなければならなかったこと、激安チケットは無駄にして次の便にとびのろうと思ったけどどの便も満席で乗れなかったこと、なども理由です。東京⇄ソウル⇄上海の人の移動はものすごい！韓国ラクーン会に参加できず、私も本当にがっかりしました。せっかく集まってくださった皆様、ごめんなさい。

結局、月曜日も羽田→キンポのJAL便は満席だったので、成田→仁川で行きました。ラクーン会は逃してしまいましたが、国民大学の日韓学生歌謡祭の審査員と、私のもうひとつのボランティア活動であるCISVの用事も無事に済み、水曜日に東京に戻りました。国民大学では、すっかり南さんにお世話になり、また日本学研究所の活発な発展の様子もかいま見せていただきました。皆さん、これに懲りず、来年の春にはまたソウルでラクーン会をしましょうね。

（文責：今西淳子）

## ■ ラクーン会 in 広州

2007年11月25日（日）、胡炳群さん（2002 狸）の案内で、広州トヨタの工場のある南沙へ行き、胡さんが勤める日豊興業（広州）商貿有限公司の工場と事務所を見学しました。参加したのは、奇錦峰さん（2001 狸）、叶盛さん（2004 狸）、そして広州訪問中の今西常務理事でした。胡さんの会社は、トヨタの工場の生産ラインの設計やメンテナンスをする会社で、工場と事務所を見せてくださいました。トヨタの工場の前で記念撮影をしたら、警備員に注意されたのでびっくりしました。胡さんは名古屋と広州と天津を飛び回っているそうです。南沙では3つの島のひとつがほとんどトヨタとその下請企業



の工場のために使われる計画のようですが、片側 4 車線  
くらいの広い道路にはまだ車の数が少なく、人が突然車  
道を歩いているのはまだしも、自動車まで赤信号を無視  
するのにはびっくりしました。トヨタは既に「もとがと  
れた」ほど車が売れていて、第二工場の建設も始まって  
いるということです。

（文責：今西淳子）

## ■ ラクーン会 in 名古屋

2007 年 12 月 8 日（土）のお昼、名古屋の駅前の「柔  
らかひつまぶし 割烹 うな善」で、ラクーン会が開催さ  
れました。参加者は、渥美伊都子理事長、今西常務理事、  
名古屋大学の胡潔さん（1998 狸）、梁興国さん（2001 狸）  
と奥さんとお嬢さん、名古屋市立大学のランジャンナさん  
（2002 狸）と、広州でもお会いした日豊興業の胡炳群さ  
ん（2002 狸）と奥さんの 9 名でした。久しぶりにお会  
いした方の近況や、最近の名古屋の様子や中国に進出す  
るトヨタの話で盛り上がりました。皆さんそれぞれ名古  
屋で活躍されている様子を伺い、嬉しく思いました。

（文責：今西淳子）

## 第7回日韓アジア未来フォーラム in グアムを開催

### 「東アジア協力の過去、現在、未来」

#### —日韓アジア未来フォーラムのあり方を念頭に置きながら—

日 時：2008年2月23日（土）午後2時～6時

会 場：Sheraton Laguna Guam Resort(<http://www.sheraton.com/guam>) 会議室

2001年に始まった日韓アジア未来フォーラムが今年度で7年目を迎えた。本フォーラムではこれまで日本と韓国をはじめアジアの平和と繁栄、共通の文化、そして望ましい国際交流のあり方などについて幅広く話し合ってきた。今回のフォーラムでは日韓両国で3回ずつ行われたこれまでのフォーラムの成果と意義、問題点などについてふりかえりながら、東アジア協力の過去、現在、未来について議論するとともに、これからのフォーラムの進め方などについて考えることにした。具体的にはフォーラムの成果、政治安保、経済、文化分野における東アジア協力の展開と新たなビジョンについて報告をし、その後、自由に意見交換を行なった。

#### ■ プログラム：

総合司会：李 元徳（国民大学国際学部副教授）

【開会の辞】李 鎮奎（未来人力研究院院長、高麗大学経営学部教授）

【挨拶】今西淳子（SGRA代表、渥美国際交流奨学財団常務理事）

【報告1】これまでの日韓アジア未来フォーラムの成果

韓国開催分：金雄熙（仁荷大学国際通商学部副教授）

日本開催分：嶋津忠廣（SGRA運営委員長）

【報告2】北東アジア経済協力の展望：李鋼哲（SGRA・北陸大学未来創造学部教授）

【報告3】東アジア地域協力におけるアセアンの役割：マキト（SGRA・テンブル大学ジャパン講師）

【報告4】東アジアの安全保障と共同体論：木宮正史（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

【報告5】東アジア協力におけるソフトパワー：韓準（延世大学社会学科副教授）

【パネルディスカッション】「これからの日韓アジア未来フォーラムの活動方針」

フォーラム参加者全員：

○ SGRA：足立、石井、今西、木宮、嶋津、マキト、李鋼哲

○ 未来人力研究院：宋復理事長夫妻、李鎮奎院長、韓準、金雄熙、李元徳

#### ■ 概要報告

2008年2月23日（土）、季節を忘れて、グアムのシェラトンホテルで「東アジア協力の過去、現在、未来：日韓アジア未来フォーラムのあり方を念頭に置きながら」をテーマに第7回日韓アジア未来フォーラムが開催された。7年目を迎え、一種のsabbatical leaveという性格もあわせもった今回のフォーラムでは、日韓両国で3回ずつ行われたこれまでのフォーラムの成果と意義、問題点などについて振り返りながら、東アジア協力の過去、現在、未来について議論を行った。また、これからのフォーラムの進め方についても自由に意見を交わした。

グアムという場所の制約やテーマの性格などを考え、今回のフォーラムは非公開で行われた。米国領のグアムを訪れる観光客の7割以上が日本人であるが、近年は韓国人が増えているという。また、地理的には東南アジアに近く、日韓アジア未来フォーラムを開催するのにぴったりであった。

フォーラムでは、韓国未来人力研究院の李鎮奎（イ・ジンギョ）院長と今西淳子（いまにし・じゅんこ）SGRA代表による開会の挨拶に続き、4人の研究者による研究報告が行われた。まずSGRA研究員であり北陸大学の李鋼哲（り・こうてつ）氏の研究発表は「北東アジア経済協力の展望」をより具体的に明らかにするものであった。SGRA研究員のマックス・マキト氏は、「東アジア地域協力におけるアセアンの役割」について力説した。東京大学の木宮正史（きみや・ただし）氏は「東アジアの安全保障と共同体論」について、そして最後の発表者として延世大学の韓準（ハン・ジュン）氏は「東アジア協力におけるソフトパワーの役割」について発表を行った。



3時間に及ぶ報告と討論の後の第2セッションでは、嶋津忠廣（しまづ・ただひろ）SGRA運営委員長により、これまでの日韓アジア未来フォーラムの成果について報告が行われた。10ページほどの写真付の資料をもとに、これまでの楽しく有意義な研究交流活動を振り返る良いきっかけとなった。

嶋津氏の報告を土台に、これからのフォーラムのテーマや進め方などについて様々な提案があり、議論が交わされた。とくに注目すべきは、SGRAと未来人力研究院が異なるアプローチを互いに尊重しつつ、それぞれの強みを生かしながら、これまでのパターンを守り続けていくことで一致しているのが確認できたことである。また、「東アジア協力」と「ソフトパワー」というキー概念を念頭に置きながら、これからのテーマを決めていくことにも合意が得られ、次のテーマは、東アジア協力の大きなファクターとなる中国に対する見方の日韓の違いに注目し、今後具体的に検討していくことにした。

フォーラム終了後の夕食会は、市内の韓国料理店で、野菜もない牛肉だけの焼肉に焼酎バクダンを一気飲みするというややタフな食事会であった。前回の葉山フォーラムと同じく、まもなく「狂乱」の飲み会に変わってしまった。週末ということもあって店の人は呼んでも来ないし、お酒とお肉以外には殆ど品切れ状態だったのでそれが最善だったようにも思われる。2次会は音楽の賑やかなホテル内のバー、そして三次会はフィリピン海を見おろすプールサイドであった。

24日（日）は、自信満々の韓国系グアム人のガイドさんの案内で3時間ほど市内ツアーを楽しむこともできた。とくにツー・ラバーズ・ポイントは、「2回目のハネムーン」中の宋復理事長ご夫妻に思い出の場所となったに違いない。渥美財団主催の夕食会では主催側のご配慮でバーベキューにちょっと贅沢な日本酒を楽しんだが、前日の食事会に比べたらほんとうに穏健だった。この夕食会で「『次の7年目（＝第14回日韓アジア未来フォーラム）』にはハワイでまた『3回目のハネムーン』を！」というすばらしいご提案があった。

次の第8回日韓アジア未来フォーラムは、2009年2月に東京で公開で開催する予定です。（文責：金雄熙 1996 ラクーン）

## 第2回SGRAチャイナ・フォーラムを開催

講演：高見邦雄（緑の地球ネットワーク事務局長）

### 「黄土高原緑化協力の15年」

～無理解と失敗から相互理解と信頼へ～

2007年9月14日・北京大学生命科学学院

2007年9月17日・新疆大学図書館2階報告庁

プログラム

総合司会：孫建軍（北京大学日本語文化学部助教授、SGRA研究員）

祝辞：国際交流基金北京事務所 小島寛之副所長

開会挨拶とSGRA紹介：SGRA代表 今西淳子

■ 講演：高見邦雄（緑の地球ネットワーク事務局長）

■ 質疑応答

閉会挨拶：SGRA運営委員長 嶋津忠廣

#### ■ 概要報告

中国における第2回SGRAフォーラムは、2007年9月14日（金）に北京大学生命科学学院報告庁にて、9月17日（月）に新疆大学図書館二階報告庁にて開催されました。昨年10月、「若者の未来と日本語」というフォーラムを、中国で初めて、北京大学の同じ会場で開催しましたが、今回からは、NPOやNGO等の市民活動を紹介するフォーラムを中国で開催することにしました。今年は、まず、中国で緑化協力の活動をしている日本のNPO法人「緑の地球ネットワーク」事務局長の高見邦雄さんに講演をお願いしました。朝日新聞で見つけた高見さんの文章がとても面白かったので、是非お話を伺いたいと思ったのがきっかけですが、その後、SGRA会員の中村まり子さんにご紹介いただき、このように北京とウルムチで実現できたのは、大変嬉しく思います。また、日本語学習者ではない中国の学生さんたちにも聞いていただくために、北京大学日本語文化学部を通じて最高水準の同時通訳をお願いしました。



緑の地球ネットワーク（G E N）は1992年以来、山西省大同市の農村で緑化協力を継続しています。大同市は北京の西300kmほどのところにあり、北京の水源地、風砂の吹き出し口でもあります。そこでは深刻な沙漠化と水危機が進行しています。高見さんはパワーポイントで写真をたくさん見せながら（1）沙漠化防止のための植林、（2）小学校での果樹園作り、（3）自然林の保護という大同で展開する事業を紹介してくださいました。また、非常に厳しい自然条件の上、歴史問題をかかえた大同で活動することの難しさを話してくださいました。初期は失敗つづきでしたが、その後、日本側の専門家や中国のベテラン技術者の参加をえて、だんだんと軌道に乗ってきたということです。また、日本側も中国側も失敗と苦労を通じ、お互いを理解し、信頼しあうようになり、いまでは「国際協力の貴重な成功例」とまで評価されるようになっています。高見さんのお話は、参加者を引き込み「3時間があっという間にたってしまった」というコメントをいただいたほどでした。



その他にも、「黄土高原の厳しさを再認識、日本を再認識できた」「民間協力の実態を知った。一般の日本人の友好的な心が分かった。緑化に関する国際協力の大切さを知った」「高原の水不足の実態を知った。水を節約しなかったことを恥ずかしく思う。今までそのような土地があることすら知らなかった。今後何かしてあげたい」「環境問題はどんどん深刻化している。フォーラムを通じてハイレベルの教育者たちが努力されていることを知り、希望が見えた」などの感想が寄せられており、参加した北京大学と新疆大学の学生さんに対して、大きなインパクトを与えたと思います。



北京では、珍しい大雨にもかかわらず、協賛をいただきました国際交流基金北京事務所の小島寛之副所長はじめ、中国で植林活動をされているJICAのみなさん、GEN大同事務所所長、渥美財団理事長、そして北京大学の学生さん等、100名を越える参加者が集まりました。また、ウルムチでは、新疆大学化学学院長をはじめ、教員の皆さん、そして大勢の学生さんが集まり、300用意した同時通訳用のヘッドセットが足りなくなりました。ふたつのフォーラムを実現してくださったお二人のSGRA会員、北京大学の孫建軍さんと、新疆大学のアブリズさんに感謝いたします。（今西 淳子）

## ■ 孫 建軍

「土地の行政を超えた協力はあり得ない」と講師の高見さんは言いました。せつかくはるばる外国から協力に来たのに、現地の人々の心だけでなく、行政の「心」も捕まえなければならないという心労は並大抵のものではなかったでしょう。村民と寝食をともにし、心と心のふれ合いができて、いわゆる政府の幹部の妨害に遭っては堪らないものです。初期の失敗はこのような「無理解」から来たものが多かったかもしれません。行政との付き合いは、中国人ですら難しいのに、外国人の高見さんの努力に頭が下がります。

「賢い順に消えていく」日本のパートナー。事の始まりは簡単なものだったようですが、持続の難しさを語る高見さんは、実は持続の大切さを教えてくださいました。事を成功させるには、困難に向かって、一步一步、続けなければなりません。言葉の勉強はさることながら、人生そのものに生かしたいものです。北京会場には、多くの日本語学科の学生が来ていました。日本語そのもの、或いは小説、ドラマ、アニメ、ゲームのような日本文化にしか触れてい

ない学生にとって、高見さんの講演、高見さんの行動は異様なものだったかもしれません。日ごろほとんど接する機会がないからです。でも、質疑応答の時に出了た質問から見れば、彼らの心に相当な衝撃を与えたように思えます。「大同から脱出した人をどうすれば大同に呼び戻せるのか」という質問は、実は自分に言い聞かしているように思えました。少し離れたところから見ることによって、改めて自己を認識できるという意識の芽生えにつながるいいと思います。



## ■ アブリス

今回のフォーラムを通して感じたことは多いのですが、それを読み易い文章にすることは理科系の研究ばかりやっている私にとって難し過ぎます。3日間同行させて頂き、講師の高見さんは、植物を研究する大学教授のように思えました。緑化は自然環境を取り戻すための唯一の手段です。高見さんが15年間続けて来た緑化運動の貴重な経験は元々乾燥地域で、砂漠化がだんだん酷くなっている新疆ウイグル自治区に取っても宝ものであると強く感じました。

フォーラムが開催されるまでは、会場がいっぱいになるか、最後までどのぐらいの人が残るかなど色々心配していました。今日、院生から受け取った参加者名簿を見てびっくりしました。なんと391名のサイン！そのなかには新疆大学化学学院、資源環境学院、人文学院、新聞学院、生命学院、物理学院などの教官と学生、日本人留学生、新疆教育学院で研修している高校の先生などがいました。この講演を通して、若い学生が中日両国の民間人の相互理解、国際交流と国際協力に深い関心を持っていることが分かりました。

高見さんの講演は、新疆大学の学生にとって、非常に強い印象を与えたと感じました。フォーラムの後で学生や教官たちが講演内容も通訳も素晴らしかったと私に語ってくれました。今回のフォーラムは新疆大学の歴史では初めて同時通訳で行われたフォーラムとなりました。またSGRAフォーラムでも参加者が一番多いフォーラムになりました。またこの交流活動を続けていくことを願っています（疲れますが）。





## 活動報告（2007年4月～2008年3月）

☆メルマガ【SGRA かわらばん】無料購読メールを配信（購読者 570 名）

☆年4回のSGRAフォーラムを開催

■ 2007 年 5 月 27 日 第 27 回 SGRA フォーラム in 秋葉原「アジアの外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」  
（於：秋葉原 U D X 南 6 階カンファレンス）

総合司会：全 振煥（鹿島建設技術研究所研究員、SGRA 運営委員）

開会挨拶：木村建一（国際人間環境研究所代表、SGRA 顧問）

【基調講演】「外来生物とどう付き合うか～ アジアの淡水魚を中心に～」

多紀 保彦（自然環境研究センター理事長、長尾自然環境財団理事長、東京水産大学名誉教授）

【発表 1】「外来生物問題への取り組み～いま日本の水辺で起きていること～」

加納 光樹（自然環境研究センター研究員）

【発表 2】「インドシナの外来種問題～魚類を中心として、フィールドからの報告～」

プラチャー・ムシカシントン（カセサート大学水産学部講師、SGRA 研究員）

【パネルディスカッション】

進行：今西淳子（SGRA 代表）

パネリスト：上記講演者 3 名

→ SGRA レポート No.40

■ 2007 年 7 月 21 日 第 28 回 SGRA フォーラム in 軽井沢「いのちの尊厳と宗教の役割」  
（会場：鹿島建設軽井沢研修センター）

総合司会 ミラ・ゾンターク（富坂キリスト教センター研究主事、SGRA 研究員）

【基調講演】「いのちの尊厳と日本の宗教文化」

島 蘭 進（東京大学文学部宗教学宗教史学科教授、SGRA 顧問）

約定質問者：金 外淑（兵庫県立大学看護学部心理学系助教授、SGRA 会員）

【発表 1】「カトリック＜人格主義＞生命倫理学の日本における受容可能性」

秋葉 悦子（富山大学経営法学科教授）

約定質問者：アブドシュクル・メジテ（東京医科大学大学院博士課程、SGRA 会員）

【発表 2】「悲しむ力と育む力：本当の自分に出会える環境づくり」

井上ウィマラ（高野山大学文学部スピリチュアルケア学科准教授）

約定質問者：権 明愛（日本社会事業大学大学院博士課程、SGRA 会員）

【発表 3】「『尊厳ある死』という思想の生成と『いのちの教育』」

大谷いづみ（立命館大学産業社会学部教授）

約定質問者：李 垠庚（東京大学大学院博士課程、SGRA 会員）

【パネルディスカッション】「いのちの尊厳と宗教の役割」

進行：ランジャン・ムコパディヤヤ（名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授、SGRA 研究チーフ）

パネリスト：上記講演者

→ SGRA レポート No.41

# ■ 2007 年 11 月 18 日 第 29 回 SGRA フォーラム「広告と社会の複雑な関係」

(会場：東京国際フォーラム G510 会議室)

総司会：イコ、プラムディオノ（NTT 情報流通プラットフォーム研究所、SGRA「人的資源・技術移転」研究チーム・サブチーフ）

## 【基調講演】「広告と社会の複雑な関係」

関沢英彦（東京経済大学コミュニケーション学部教授・博報堂生活総合研究所エグゼクティブフェロー）

## 【発表 1】「中国における社会変動と企業のマーケティング活動」

徐 向東（（株）中国市場戦略研究所代表取締役・SGRA 研究チームチーフ）

## 【発表 2】「ウクライナにおける広告と社会の複雑な関係～広告がなかった時代からグローバル化の中へ～」

オリガ・ホメンコ（早稲田大学国際教養学部訪問学者、学術振興会外国人特別研究員、SGRA 研究員）

## 【オープンフォーラム】

進行：関沢 英彦 パネリスト：徐 向東、オリガ・ホメンコ

→ SGRA レポート No.44 近日発行

# ■ 2008 年 1 月 26 日 第 30 回 SGRA フォーラム「教育における『負け組み』をどう考えるか～日本、中国、シンガポール～」

(会 場：東京国際フォーラム G610 会議室)

総司会：林 少陽（東京大学教養学部特任助教授、SGRA 研究員）

## 【研究報告 1】「日本の高校にみる教育弱者と社会的弱者」

佐藤 香（東京大学社会科学研究所准教授）

## 【研究報告 2】「中国の義務教育格差～出稼ぎ家庭の子ども達を中心に～」

山口真美（アジア経済研究所研究員）

## 【研究報告 3】「高校教育の日星比較～選抜度の低い学校に着目して～」

シム・チュン・キャット（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

## 【オープンフォーラム】

進行：孫 軍悦（東京大学大学院総合文化研究科博士課程） パネリスト：発表者全員

→ SGRA レポート No.45 編集中

第 27 回



第 28 回



第 29 回



第 30 回



## ■ 渥美奨学生 2007 年度著作・発表論文・特許リスト

### 【1995 年度奨学生】

#### ■ 高 偉俊

1. 審査論文, Possibility and potential of clean development mechanisms in China, 2007/11, Environ. Res. Lett. 2 (2007) 044005, 1 月 8 日, Weijun Gao, Nan Zhou, Haifeng Li, Daniel M Kammen
2. 国際講演論文, Pattern of city and architecture in Japan from the viewpoint of global environment, 2007/09, "Joint Hong Kong Hangzhou Seminar for Sustainable Building, Hangzhou 2007", 299-313, Weijun GAO, Dian ZHOU, Xingtian WANG, Toshio OJIMA,
3. 国際講演論文, "PLANNING, DESIGN AND MAINTENANCE OF DISTRIBUTED ENERGY RESOURCE", 2007/10, "The Sixth International Conference on Indoor Air Quality, Ventilation and Energy Conservation in Buildings, 2007, Sendai, Japan", 919-926, Weijun Gao, Yongwen Yang, Yingjun Ruan
4. 特集, アジアの持続可能な都市環境, 2007/10, 早稲田建築学報 2008 年, 22, 高偉俊
5. 書評, Enviromental Research Letters, 2007/09, 学鑑秋号 Vol.104 No.3, 55, 高 偉俊
6. 学会論文発表, 市立医療センターのコージェネレーションシステムの運転実態 北九州市における病院のエネルギー消費量に関する研究 (その 2), 2007/09, 2007 年度 (福岡) 日本建築学会大会学術講演会 D-1 分冊, 855, 高偉俊, 玄姫, 李海峰

#### ■ マキト、フェルディナンド

「フィリピン国際競争力と対中関係」、『中国 -ASEAN の FTA と東アジア経済』トラン・ヴァン・トゥ、松本邦愛編著、文眞堂 pp.94-117 2007 年 11 月

#### ■ 朴 貞蘭

1. 韓国における「少子・高齢化問題」の現状と課題. 『社会福祉学研究』第 98 号、財団法人鉄道弘済会、2007. 4
2. 『韓国社会事業史』ミネルヴァ書房、2007. 11

### 【1996 年度奨学生】

#### ■ 金 雄熙

「日中韓物流協力と物流レジーム構想」、『日本研究論叢』、第 26 号、pp237-270、2007 年 12 月

#### ■ 李 來賛

1. "Network Neutrality, Understanding its Background and Theoretical Aspect," (in Korean) Korean Telecommunications Policy Review, 2008.
2. "Issues of Relevant Market Definition of IPTV in an Era of Convergence between Broadcasting and Telecommunications," (in Korean) Journal of Cyber Communications, Vol. 24, 225-262, December 2007.
3. "Issue of Bundling: Market Definition and Cross-subsidization," (in Korean) Korean Telecommunications Policy Review, Vol. 14, No. 2, June 2007.
4. "Bundling Regulation for Increasing Efficiency of Telecommunications Services Industry," (in Korean) Productivity Reviews, Vol. 21, No. 3, September 2007.

#### ■ トレーデ、メラニー

1. Book : Melanie Trede with Lorenz Bichler: One Hundred Famous Views of Edo, Cologne, New York: Taschen, 2007.
2. Banknote Design as the Battlefield of Gender Politics and National Representation in Meiji Japan. in New Gender Constructs in Literature, the Visual and the Performing Arts of Modern China and Japan (1880s to 1930s), edited by Doris Croissant, Joshua Mostow, and Catherine Yeh, Leiden: Brill, 2008 (in print)
3. Edo: Images of a city between visual poetry and idealized reality / Edo: Bilder einer Stadt zwischen visueller Poesie und idealisierter Wirklichkeit / Images d'une ville entre poésie visuelle et réalité idéale in One Hundred Famous Views of Edo, Cologne, New York: Taschen, 2007, 7-27.
4. Comment/Komento, Session II: Lives and culture depicted in illustrated materials: the early modern period in East Asia, in Kanagawa daigaku 21seiki COE puroguramu shinpojiumu hōkoku 4, dai 2kai kokusai shinpojiumu Zuzō, mingū, keikan: Himoji

shiryô kara jinrui bunka wo yomitoku: Kanagawa University 21st Century COE Program Conference Series, Bulletin No. 4: The 2nd International Symposium: Interpreting Human Culture through nonwritten materials: Perspectives on Illustrated Material, Folk Implements and Landscape [in Japanese and English], edited by the 2nd International Symposium Organizing Committee, Yokohama: Kanagawa daigaku 21seiki COE puroguramu, 2007, 145-150.

# ■ 朱 庭耀

1. Tingyao Zhu, and Toshiyuki Shigemi: "Design Loads Used for Direct Strength Assessment of Merchant Ship Structures", Transactions of the ASME, Journal of Offshore Mechanics and Arctic Engineering, Vol. 129, pp. 120-130, 2007.
2. Tingyao Zhu, Toshiyuki Matsumoto, Toshiro Koiwa, Norikazu Abe and Ryuji Miyake: "A Study on Practical Design Loads due to Green Water Used for Structural Strength Assessment of a Water Breaker of Container Ships", the Proceeding of International Conference on Marine Research and Transportation, Naples, Italy, June, 2007.
3. Masashi Kashiwagi, Changhong Hu, Ryuji Miyake and Tingyao Zhu: "A CIP-Based Cartesian Grid Method for Nonlinear Wave-Body Interactions", the Proceeding of 10th Symposium on Practical Design of Ships and Other Floating Structures, Vol. II, pp. 220-230, Houston, USA, 2007.
4. 三宅竜二, 朱庭耀, 松本俊之, 熊野厚: "コンテナ船のパウフレア形状が波浪縦曲げモーメントに及ぼす影響について(第二報)", 日本船舶海洋工学会講演会論文集第 5E 号, pp. 5-8, 2007.
5. Minoru Harada, Toshiyuki Shigemi, Tingyao Zhu and Norio Yamamoto: "Structural Reliability Analysis for Ultimate Limit State of Hull Girder Longitudinal Strength of Double-Hull Tanker", the Proceeding of the 21st Asian-Pacific Technical Exchange and Advisory Meeting on Marine Structures, Yokohama, Japan, September, 2007.

# 【1997 年度奨学生】

# ■ デマイオ、シルバーナ

1. S. De Maio, C. Negri, J. Oue (ed. by), Corso di lingua giapponese 1 [italian edition of: ICU (ed.), Japanese for College Students (Basic) 1, Tokyo, 1996], Milano, Hoepli, 2007.
2. S. De Maio, C. Negri, J. Oue (ed. by), Corso di lingua giapponese 2 [italian edition of: ICU (ed.), Japanese for College Students (Basic) 2, Tokyo, 1996], Milano, Hoepli, 2007.
3. S. De Maio, < Per un ampliamento delle conoscenze storiche sul Giappone della seconda met • del XIX secolo: i giornali di bordo c [十九世紀後半の日伊関係史の展開をもとめて: 伊太利亜王国海軍司令官報告書を基に ], Italia tosho, 37 (nuova serie), 2007, pp. 13-18.
4. P. Calvetti and S. De Maio (ed. by), Proceedings of the Second Conference on Japanese Linguistics and Language Teaching, Naples, March 20th-22nd, 2002, Series Minor, Napoli, Universit • degli Studi di Napoli < L'Orientale c , 2007.
5. S. De Maio, C. Negri, J. Oue (ed. by), Corso di lingua giapponese 3 [italian edition of: ICU (ed.), Japanese for College Students (Basic) 3, Tokyo, 1996], Milano, Hoepli, 2008.
6. 木本忠昭・シルヴァーナ・デ・マイオ 「科学アカデミーの発祥」『学術の動向』2007, 3, pp. 78-84.

# ■ 方 美麗

1. 教科書: Spoken Chinese: A textbook and CD for basic Chinese. Mandarins Publishing, London, UK. 2007.
2. 「中国語から見た日本語文法—使役表現を中心に」、『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 1 月号 (2008 年)1 月 1 日 pp.114 — 130

# ■ 片桐カノックワン・ラオハブラナキット

1. カノックワン・ラオハブラナキット・片桐他 2007 「タイ人学習者のための初級文法項目の設定—日本語教育文法の視点からの 4 つの案—」(『バンコク日本文化センター日本語教育紀要 第 4 号』国際交流基金バンコク日本文化センター
2. Kanokwan Laohaburanakit Katagiri. 2007. "The Learner-centered Grammar Teaching for Intermediate Japanese Course" Journal of Faculty of Arts. 36. Chulalongkorn University Press.

# ■ 金 外淑

1. 「糖尿病への認知行動的介入」 Medicina 44 (11) 2043-2045 2007
2. 「健康行動理論を用いた患者指導 —認知行動的観点から—」『糖尿病ケア』5 (2) 26-31 2008
3. 「認知行動療法」『肥満と糖尿病』 7 (2) 183-185 2008

■ 李 香哲

1. 著書：『東アジア高等教育の再構築』（ソウル：Woomul House、2007. 12、416 ページ）
2. 著書：『逝けば逝く』（ソウル：Woomul House、2007.8、460 ページ）
3. 研究報告書：『法人化以降の日本国立大学のガバナンスと財政運用』（ソウル：教育人的資源部、2007.5、160 ページ）
4. 論文：「高度成長期における日本農村の政治経済構造の変化と農業団体」『韓国協同組合研究』（2007.12）

■ 李 恩民

1. 李恩民著『戦後日台経済外交の政治過程：「一つの中国」理念下の日本と台湾』、2007 年 9 月 日本学術振興会 平成 16 ～ 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書 東京 全 221 頁
2. 朱雲漢、賈慶國編、丁偉・由翼・李恩民他著『従国際関係理論看中国崛起』（繁体字版） 2007 年年 10 月 五南図書出版・台北 全 340 頁

■ 王 岳鵬

Michael, S. K., Surks, H. K., Wang, YP., Zhu, Y., Blanton, R., Jamnongjit, M., Aronovitz, M., Baur, W., Ohtani, K., Wilkerson, M. K., Bonev, A. D., Nelson, M. T., Karas, R. H., Mendelsohn, M. E. "High blood pressure arising from a defect in vascular function". Proc. Natl. Acad. Sci. U. S. A. 2008; 105:6702-6707

【1998 年度奨学生】

■ 何 祖源

1. K.-Y. Song, Z. He, and K. Hotate, "Effects of intensity modulation of light source on Brillouin optical correlation domain analysis," IEEE/OSA J. of Lightwave Technology, Vol. 25, pp. 1238-1246, 2007
2. W. Zou, Z. He, A. D. Yablon, and K. Hotate, "Dependence of Brillouin frequency shift in optical fibers on draw-induced residual elastic and inelastic strains," IEEE Photonics Technology Letters, Vol. 19, pp. 1389-1391, 2007
3. K.- Y. Song, W. Zou, Z. He, and K. Hotate, "All-optical dynamic grating generation based on Brillouin scattering in polarization-maintaining fiber," OSA Optics Letters, Vol. 33, pp. 926-928, 2008

■ 胡 潔

「「嫡」・「庶」考（１）——七世紀・八世紀の王室の系譜を中心に——」『言語文化論集』 29 巻 1 号

■ 李 周浩

1. "Human Centered Ubiquitous Display in Intelligent Space," Joo-Ho LEE, The 33rd Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society (IECON), pp22-27, 2007.11
2. 「移動投影装置を用いた強化現実システムの開発」李周浩、日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会 2007、2A2-L03、2007.5
3. "Hybrid tracking based on color histogram for intelligent space," K.Morioka, J.-H.Lee, Y.Kuroda, H.Hashimoto, Artificial Life and Robotics Vol.11, No.2 pp.204-210, 2007

■ マイリーサ

「中国型環境問題と黒河流域」沈衛榮等編『黒水城人文与環境研究国際学術論討会文集』中国人民大学出版社 2007 年 4 月

■ 許 曉原

1. Xiaoyuan Xu, Stuart Weisberg, Rachel Ngo, Anthony W. Ferrante Jr. "Macrophage Production of Adipose Tissue derived TNFa," American Diabetes Association 67th Scientific sessions, June 22-26, 2007. Chicago, IL
2. Xiaoyuan Xu, Stuart Weisberg, Rachel Ngo, Anthony W. Ferrante Jr. Macrophage Production of Adipose Tissue derived TNFa. American Diabetes Association 67th Scientific sessions, June 22-26, 2007. Chicago, IL, Page:A364
3. Juraj Kosk, Emilo Ortega, Xiaoyuan Xu, Ann Marie Francisco, Michael Scalise, Joy C. Bunt, Anthony W. Ferrante JR, Jonathan Krakoff. Macrophage Content in Subcutaneous Adipose Tissue is not Associated wit Insulin Resistance Independent of Adiposity. American Diabetes Association 67th Scientific sessions, June 22-26, 2007. Chicago, IL, Page:A338

【1999 年度奨学生】

■ コインブラ、マリア ハケウ モウラ

1. PINHEIRO, A. C. A. S. ; LIMA, A. P. S. DE ; SOUZA, M. E. DE ; LIMA NETO, E. C. DE ; ADRIÃO, M. ; GONCALVES, V. S. P. ; COIMBRA, M. R. M. " Epidemiological status of Taura syndrome and Infectious myonecrosis viruses in *Penaeus vannamei* reared" in Pernambuco-Brazil. *Aquaculture*, v. 262, p. 17-22, 2007.
2. LUCENA, B. T. L. DE ; SILVA FILHO, E. A. ; COIMBRA, M. R. M. ; SIMOES, D. A. ; JUNIOR, M. "Chromosome instability in industrial strains of *Saccharomyces cerevisiae* batch cultivated under laboratory conditions". *Genetics and Molecular Research*, v. 6, p. 1072-1084, 2007.

■ 李 鋼哲

1. 著書：『東アジアのグローバル化と地域統合』（共著）2007.5 ミネルヴァ書房（第 14 章「東北アジアのパラダイムの転換」、pp.313-28）
2. 「朝鮮族のグローバルネットワーク構築の構想と戦略」中国『黒龍江新聞』2007.8.25（朝鮮語）。
3. 「核実験後の中朝間の政治・経済関係の変化と展望」2007.9 韓国ソウル極東問題研究所『日中韓学術セミナー：北朝鮮の改革可能性』論文集。
4. 「北朝鮮の経済改革はどこまで進んでいるか」（2007）時事通信社『時事トップ・コンフィデンシャル』（10 月 16 日号）、pp.2-7。
5. 「移行経済期における朝鮮の改革・開放—中朝関係の視点から—」『北陸大学紀要』第 31 号（2008 年）。
6. 「朝鮮族社会の動向と政策方向」韓国東北亜歴史財団研究プロジェクト、2007.12（韓国語）。
7. 「六者協議の進展と中朝間の政治・経済関係」2008.2 聖学院大学総合研究所『日中韓学術セミナー：北朝鮮の改革可能性』論文集。

■ ブ・ティ・ミン・チィ

「グローバル化のベトナム人へ適応性をめぐる～」、『人間研究誌』 2007 年 10 月号

■ 楊 接期

1. Wu, Y. C., Yang, J. C., & Lee, Y. S. (2008, January). A Weighted String Pattern Matching-based Passage Ranking Algorithm for Video Question Answering. *Expert Systems with Applications*, 36(1), 1-32.
2. Chen, C. H., Yang, J. C., Shen, S., & Jeng, M. C. (2007, August). A Desktop Virtual Reality Earth Motion System in Astronomy Education. *Educational Technology & Society*, 10(3), 289-304.
3. Lai, C. H., Yang, J. C., Chen, F. C., Ho, C. W., & Chan, T. W. (2007, August). Affordances of Mobile Technologies for Experiential Learning: The Interplay of Technology and Pedagogical Practices. *Journal of Computer Assisted Learning*, 23(4), 326-337.
4. Yang, J. C., Chen, C. H. (2007, July). A Mobile Learning Environment for Supporting Science Inquiry Experiments in Elementary School. In *Proceedings of Technology Enhanced Learning Conference (TELearn 2007)*. Jhongli, Taiwan. 9-16.
5. Yang, J. C., Chen, C. H. (2007, July). Development and Evaluation of a Web-based Reading Environment for Children Based on Goal Setting Theory. In *Proceedings of Technology Enhanced Learning Conference (TELearn 2007)*. Jhongli, Taiwan. 241-248.
6. Yang, J. C. (2007, June). National Central University e-learning Project Sharing, In *Proceedings of International Conference on OpenCourseWare and e-Learning*. Taipei, Taiwan. 131-148.
7. Yang, J. C., & Pan, W. M. (2007, May). Design and Evaluation of an Inquiry-based Experimental Activity in a Mobile Learning Environment. In *Proceedings of the 2nd Workshop on Wireless, Mobile, and Ubiquitous Technologies in Education*. Taipei, Taiwan. In Chinese.

■ 葉 文昌

1. Wenchang Yeh, Dunyuan Ke (M), Chunjun Zhuang (M), Hsiangen Huang (M), and Yubang Yang (M), "Light absorptive underlayer enhanced excimer-laser crystallization of Si thin-film", *J. Mater. Res.*, 22, pp.2973-2981, (2007).
2. Wenchang Yeh, Chunjun Zhuang(M), and Dunyuan Ke(M), "Growth rate measurement of lateral grains in silicon film during excimer laser annealing", *Jpn. J. Appl. Phys.*, 46, pp. L611-L613,(2007).
3. Wenchang Yeh, Hsiangen Huang(M), Ingchieh Niu(M), Chienchou Chen(M), "Light Absorptive Underlayer Enhanced Super

Lateral Growth in Excimer Laser Crystallization of Amorphous Silicon Film", Jpn. J. Appl. Phys., 46, pp.1466-1468,(2007).

【2000 年度奨学生】

■ 鄭 成春

1. 「日韓企業の東アジア生産ネットワークの比較研究：自動車産業を中心に」（共著）、2007 年 12 月、対外経済政策研究院
2. 「韓国の主要国家別・地域別中長期通商政策：総括報告書」（共著）、2007 年 12 月、対外経済政策研究院
3. 「韓国の主要国家別・地域別中長期通商政策：日本」（共著）、2007 年 12 月、対外経済政策研究院
4. 「バリロードマップの主な内容と今後の展望」（単著）、2007 年 12 月、対外経済政策研究院

■ 林 泉忠

1. 林泉忠「『辺陲東亜』地区民衆身分認同的 Dynamism：沖縄、台湾、香港、澳門四地跨国民調之報告分析」『台湾民主的实践：責任、制度与行為』台湾政治学会論文集、2007 年 11 月。
2. 林泉忠「北京圧力下の『公投』変局：総統大選後台湾港澳化的先兆？」『明報月刊』（香港）2008 年 3 月号、38-41 頁。
3. 林泉忠「馬謝殊死戦後の新契機：透視台湾総統大選与兩岸關係」『明報月刊』（香港）2008 年 1 月号、86-89 頁。
4. 林泉忠「香港人？中國人？：『一国』与『兩制』拉鋸中的身分認同」『明報月刊』（香港）2007 年 8 月号、44-48 頁。

■ モナール、マルギッド

1. "Globalization and OECD Labour Markets" (With N. Pain and D. Taglioni) in OECD Economic Studies, 2008/1.
2. "The contribution of Economic Geography to GDP per capita" (with H. Boulhol and A. de Serres), OECD Economics Department Working Paper Series No. 602.

■ 任 永

Ren Yong and Jian Feng. "Rotenone selectively kills serotonergic neurons through a microtubule-dependent mechanism". Journal of Neurochemistry. 2007, Oct;103(1):303-11

【2001 年度奨学生】

■ 蔣 恵玲

1. H. Jiang, R. Yamaguchi and K. Cho, "Investigation of Mutual Coupling Reduction of Slot-Coupled Planar Antenna," Proceedings of The 2007 International Symposium on Antennas and Propagation, 3B2-4, Aug. 2007.
2. 蔣, 山口, 長, "短冊状素子によるスロット励振パッチアンテナの送受信間結合低減特性", 信学技報, AP 2007-83, pp.55-60, Sep. 2007.
3. 蔣, 山口, 長, "短冊状素子により送受信間結合を低減したスロット励振パッチアンテナ", 電子情報通信学会 ソサエティ大会講演論文集, B-1-121, Sep. 2007.
4. 蔣, 山口, 長, "短冊状素子の台形化による送受別構成スロット励振パッチアンテナ間の結合低減特性", 信学技報, AP 2007-114, pp.69-73, Nov. 2007.
5. 蔣, 山口, 長, "短冊状素子をオフセット配置したフィルター一体型 MSA の帯域特性改善", 電子情報通信学会 総合大会講演論文集, B-1-78, Mar. 2008.
6. H. Jiang, R. Yamaguchi and K. Cho, "Slot-coupled Planar Antenna's Mutual Coupling Reduction Characteristics due to Reed-shaped Element," Proceedings of PIERS 2008 in Hangzhou, 5A8-7, Mar. 2008.

■ 金 香海

1. "North Korea Issue on the Northeast Regional Cooperation", The Collection of Treatises of Korean Studies, Fudan University No.15,(February,2008)
2. "Northeast Community Building:Conflict Transformation by Peaceful Means", The Annual Bulletin of The Institute of Policy and Cultural Studies Chuo University No. 6,(January, 2008)
3. "The Construction of Harmonious Society in East Asia and Japan's Historical Identity", Journal of Renmin University Press, China, No.2, (March, 2008)

■ 梁 興国

1. Liang, X.G.; Takenaka, N; Nishioka, H.; Asanuma, H. Molecular Design for Reversing the Photoswitching Mode of Turning ON and OFF DNA Hybridization. *Chem. Asian. J.* 2008, 3, 553-560.
2. Liang, X.G.; Nishioka, H.; Takenaka, N; Asanuma, H. A DNA Nanomachine Powered by Light Irradiation. *ChemBioChem.* 2008, 9, 702-705.
3. Liang, X. G.; Komiyama, M.; Asanuma, H. Diastereomer Separation of Azobenzene-Tethered Oligodeoxyribonucleotides and Determination of Their Absolute Configurations by Enzymatic Digestion. *Nucleosides, Nucleotides & Nucleic Acids* 2008, 27, 332-350.
4. Liang, X.G.; Takenaka, N; Nishioka, H.; Asanuma, H. Photoregulation of DNA hybridization by introducing an azobenzene: Molecular design for more stabilization of DNA duplex with cis-azobenzene than with its trans-form. *Nucleic Acids Res. Supplement No.51*, 2007, 169-170.
5. Liang, X.G.; Kato, T.; Asanuma, H. Unexpected efficient ab initio DNA synthesis at low temperature by using thermophilic DNA polymerase. *Nucleic Acids Res. Supplement No.51*, 2007, 351-352.
6. Liang, X.G.; Wakuda, R.; Tsuda, Y.; Nishioka, H.; Asanuma, H. Effective photoregulation of gene expression by photoresponsive T7 promoter. *Nucleic Acids Res. Supplement No.51*, 2007, 349-350.
7. Ito, H.; Nishioka, H.; Liang, X.G.; Asanuma, H. Development of photoresponsive RNA towards photoswitching of RNA functions. *Nucleic Acids Res. Supplement No.51*, 2007, 171-172.
8. Nishioka, H.; Liang, X.G.; Kashida, H.; Asanuma, H. 2',6'-Dimethylazobenzene as an efficient and thermo-stable photo-regulator for the photoregulation of DNA hybridization. *Chem. Commun.* 2007, DOI: 10.1039/B708952J.

■ 奇 錦峰

Effect of Matrine on Activity of Mouse Sperm When Oral Dosing <海峡薬学>、2007.09 (corresponding author)

■ スリスマンティヨ、ヨサファット テトオコ

1. Yashon Ouma, J.T. Sri Sumantyo and R. Tateishi, "Analysis of co-occurrence and wavelets transform textures for classification of vegetation types in very-high resolution imagery: brief theoretical review aspects and experimental results," *International Journal of Remote Sensing* (London: Taylor and Francis)(accepted 28 May 2007)
2. Yashon Ouma and J.T. Sri Sumantyo, Multiscale remote sensing data segmentation and post-segmentation change detection based on logical modeling: theoretical exposition and experimental results for forestland cover change analysis, *Computers & Geosciences* (Elsevier) (accepted : 27 February 2007)
3. J.T. Sri Sumantyo and Basari, "Compact Circularly Polarized Truncated-tip Triangular-Patch Array Antenna," *International Journal on Information and Communication Technologies (IJICT)* (Accepted : 31 March 2008) (invited)
4. 特許 : Antennas for Communications (Circularly polarized antennas), International patent No. PCT/JP2007/51351

【2002 年度奨学生】

■ イミテ、アブリズ

1. Highly Sensitive and Selective Optical HCl Gas Sensor Based on Polymer Thin Film with Immobilized Congo Red, *Sensors Letters*, 2008, 6(2), 290 -294.
2. Development of Data Sampling and Analyzing Software of Optical Waveguide Sensor, *Computers and Applied Chemistry*, 2008, 25(2), 177-180. (Chinese)
3. A Planar Optical Waveguide Sensor for Hydrogen Sulfide Detection, *Sensors Letters*, 2007, 5(2), 395-397.
4. High Sensitive Optical Waveguide Sensor for Detection of H<sub>2</sub>S Gas, *CHINESE JOURNAL OF SENSORS AND ACTUATORS*, 2008, 9, 1937-1939. (Chinese)
5. Fabrication of hydrochloride vapor sensor based on glass optical waveguide, *JOURNAL OF XINJIANG UNIVERSITY*, 2007, 24 (2), 200-203. (Chinese)
6. Gas Sensing Properties of Methl Green / Polyvinyl Alcohol Composite Film, *Chinese Journal of Applied Chemistry*, 2007, 24(S uppl), 440-442. (Chinese)
7. Application Research of Congo Red Crosslinked PVA Thin Film in Acid Gas Detection, *Chinese Journal of Applied Chemistry*, 2007, 24(Suppl), 306-309. (Chinese)
8. Study of Glass Optical Waveguide Device for Chloroform Vapor Detection, *Micronanoelectronic Technology*, 2007, 44(7/8),

404-406. (Chinese)

9. Speciation Analysis of Manganese in Water Sample Using Flame Atomic Absorption Spectrometry with Hydrolysis Separation System, Spectroscopy and Spectral Analysis, 2007,27(1) ,190-193. (Chinese)

10. Trying on Improvement of Ability of Self-Study and Writing Skills of Students by Writing Thesis, Higher Education of Chemical Engineering, 2007,97(5)60-62. (Chinese)

#### ■ 于 曉飛

1. 「旧約聖書から題材をえたホジェン族口承文芸」『口承文芸研究第 31 号』日本口承文芸学会 2008 年 3 月

2. 「テキスト化を通してみたイマカン像— 1982 年に録音されたイマカン ムドリ・モルゲン—」千葉大学ユーラシア言語文化論集 9 号 2008 年

3. 「ホジェン族のイーシン（一新）シャーマン」『聖徳大学言語文化研究所論叢 15』2008 年 2 月

4. 「赫哲族伊玛堪主题探索」『萨满文化解读 2007 年度』吉林人民出版社 2007 年 4 月

#### 【2003 年度奨学生】

#### ■ 張 桂娥

1. 「台湾における日本の子ども絵本の受容概要とその意義—台湾絵本の今:「圖畫書」時代から「繪本」時代へ—」『論文集「台湾の絵本」・シンポジウム報告書「台湾と日本の絵本」』（三宅興子編、財団法人大阪国際児童文学館）pp.118-150、191-199、2007.03

2. 「絵本ブームの影で低迷気味の創作単行本—台湾における日本児童書の翻訳受容について—」『日本児童文学』第 53 巻第 6 号アジアを読む（小峰書店）pp.40-42 2007.12

3. 訳書 低学年児童向け物語『愛挖耳朵的國王』（原著タイトル:『耳かきのすきな王さま』、小蘭江圭子著、阿部肇絵、講談社）台北東方出版社、2007.7

#### ■ フスレ

1. 「1945 年の内モンゴル人民革命党の復活とその歴史的意義」『内陸アジア史研究』No.22, pp.82-102, 2008 年 4 月 .

2. 「1930 年のモンゴル会議とその意義」『学苑』No. 799, pp.90-102, 2007 年 5 月 .

3. 「持続可能な環境保護の原点とは——エジャンホロー旗の環境保護を事例に——」『砂漠誌ノート』No.5, pp.11-18, 2008 年 1 月 .

4. 書評「内蒙古自治区図書館学会編『内蒙古歴史文献叢書』解説」『近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター』No.19. pp.69-76, 2007 年 12 月 .

#### ■ 郭 智雄

「企業における成長・発展と組織イノベーション —三星（サムスン）の人材戦略と組織イノベーションを中心に—」『商経論叢』第 48 巻第 1 号、九州産業大学商学会、2007 年 9 月、pp.155 ~ 182。

#### ■ 林 少陽

1. 「矛盾という概念——近代中国と近代日本の文脈において、」『言語・情報・テキスト』14 巻（2007 年 5 月）、東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻紀要、2007 年 5 月、69 - 107 頁。

2. 「章炳麟の「音」から歌謠徴集運動の「音」へ——白話文運動を捉えなおす、」『九葉読詩会』第 3 号、駒沢大学・九葉読詩会、2007 年 11 月刊行、1 - 25 頁。

3. 「「反」または「イロニイ」の思想」『西脇順三郎コレクション・第 IV 巻・評論集 1』（解説）、慶応大学出版社、2007 年 9 月 10 日、433 - 443 頁。

4. 「外国から見た西脇順三郎の「イロニイ」の詩論」『三田文学』第 87 巻 92 号（2008 年冬号、2008 年 2 月 1 日、「西脇順三郎詩論の国際影響特集」）、慶応大学出版社、138-149 頁。

5. 書評「東西哲学の対話に耳をすます：『残響の中国哲学』、」『東方』2008 年 3 月、325 号、28-31 頁。

#### ■ 朴 貞姬

1. 「日中韓場所成分の対象化と言語の主観化」『日語研究』第 5 期 商務印書館 2007.12

2. 「経路表現の日中韓対照」『清華大学論文集』清華大学出版社 2008. 3

■ 尹 熙淑

1. Hui-suk Yun, Hao Shen Zhou, Makoto Kuwabara, and Itaru Honma, "Synthesis of heteropoly oxometalate/block copolymer thin films with cubic-, and lamellar-self-ordered mesostructures", *Thin Solid Films*, 525, 2842-2846, 2007
2. Hui-suk Yun, Seung-eon Kim, Yong-teak Hyeon, "Highly Ordered mesoporous bioactive glasses with Im3m symmetry", *Materials Letter*, 61, 4569-4572, 2007
3. Hui-suk Yun, Seung-eon Kim, Yong-teak Hyeon, "Design and preparation of bioactive glasses with hierarchical pore networks", *Chemical Communications*, 2139-2141, 2007 (Cover paper & Hot article)
4. Hui-suk Yun, Seung-eon Kim, Yong-teak Hyeon, Su-jin Heo, Jung-wook Shin, "Three-dimensional Mesoporous-Giantporous Inorganic/organic Composite Scaffolds for Tissue Engineering", *Chem. Mater.* 19, 26, 6363-6366, 2007
5. Hui-suk Yun, Seung-eon Kim, Yong-teak Hyeon, "Fabrication of hierarchically porous bioactive glass ceramics", *Key Engineering Materials*, 361-363, 285-288, 2008
6. Patent: Huisuk Yun, Seongeun Kim, "Nano-Macro sized porous biomaterials with 3-D hierarchial pore structure and method for preparation thereof", 751504, Korea
7. Patent: Huisuk Yun, Seongeun Kim, "Porous ceramic materials with various pore configuration and preparation thereof", 10-0805303, Korea
8. Patent: Huisuk Yun, Seongeun Kim "Porous material having hierarchical pore structure and preparation method thereof", 11/775,463, USA
9. Patent: Huisuk Yun, Seongeun Kim, Yongtaek Hyun, " Bio-degradable triple pore ceramic-polymer scaffold and preparation method thereof" 2007-0124786, Korea

■ 臧 俐

1. 教科書：「現代日本の教育—理念と現実—」共著、2007.5. 北樹出版
2. 「初任者研修政策の展開過程における変容の一考察—文部省（文部科学省）の政策文書の分析—」単著、2008.3. 東海大学短期大学紀要第 41 号。

【2004 年度奨学生】

■ 叶 盛

1. Xinan Huang, Renzhou Yang, Yingjie Hu, Sheng Ye and Xiaoling Cai. Analysis of New Benzo-di-lactones and Quinones Lysimcahia fordiana Oliv. *J. Mol. Struct.* 2007, 83, 100-105.
2. Sheng Ye, Yoshitaka Miyajima, Toshiyuki Ohnishi, Yoji Yamamoto and Makoto Komiyama. Combination of PNA Beacon and Nuclease S1 for Clear-cut Genotyping of SNPs. *Anal. Biochem.* 2007, 363, 300-302.
3. Tullia Tedeschi, Stefano Sforza, Sheng Ye, Roberto Corradini, Arnaldo Dossena, Makoto Komiyama, Rosangela Marchelli. Fast and Easy Colorimetric Tests for Single Mismatch Recognition by PNA-DNA Duplexes with the Diethylthiadicarbocyanine Dye and Succinyl-beta-cyclodextrin. *J. Biochem. Bioph. Meth.*, 2007, 70: 735-741..

【2005 年度奨学生】

■ 包 聯群

「中国黒龍江省ドルブットモンゴル族の言語教育実態」、『東北アジア研究』第 12 号、57-78 頁

■ 韓 珺巧

Junqiao Han, Mary Ann Piette "Solutions for summer electric power shortages:Demand Response and its applications in Air Conditioning and refrigerating systems" *Refrigeration, Air Conditioning & Electric Power Machinery*, Vol.29, No.1, (Serial No.119), 2008, Page: 1-4

■ 韓 京子

「執着と狂気の悲劇、浄瑠璃」『グロテスクから読む日本文化』2008 年 2 月、チェックセサン

■ 金 娟鏡

1. 金娟鏡 2007 母親を取り巻く「育児ネットワーク」の機能に関する PAC (Personal Attitude Construct) 分析 保育学研究 第 45 巻 2 号 Pp.47-57

2. 金娟鏡 2007 就業形態、学歴と子育て観が母親役割行動に及ぼす影響—幼児の母親を対象にした日韓比較— 家庭教育研究所紀要 第29号 29-37
3. 金娟鏡 2007 「育児ネットワーク」の規範機能の日韓比較（1）—ネットワーク構成員による違い— 日本心理学会第71回大会発表論文集 p.253
4. 金娟鏡 2008 育児期の母親における精神的健康—母親役割満足感との関連からみた日韓比較— 日本発達心理学会第19回大会発表論文集 p.679

■ 藍 弘岳

「荻生徂徠の思想形成における医学と兵学——『徂徠先生医言』と『孫子国字解』を中心に」『日本思想史学』第39号、2007年10月

■ テネグラ、ブレンダ

1. Tenegra, Brenda Resurecion (2007) "Migrant Belongings, Organizing Spaces, and Project of Visibility: Alliances of Foreign Domestic Workers in Hong Kong", in Ruri Ito (ed.) Hong Kong ni Okeru Saiseisan Rodo no Kokusai Iten to Jenda Haichi [The Gender Reconfiguration and International Transfer of Reproductive Labor: The Case of Hong Kong], F-GENS Publication Series No. 23, Tokyo: Ochanomizu University, pp. 57-71.
2. Ito Ruri, Ogaya Chiho, Tenegra Brenda, Inaba Nanako (2008) "Ika ni shite kea jousu na Firipinjin wa tsukurareru ka?" in Ito Ruri and Adachi Mariko (eds.) Kokusaidou to Rensasuru Jenda Saiseisan Ryouiki no Gurobaruka, Tokyo: Sakuhinsha, pp. 117-143.

■ ヴォー・チー・コン

C. Vo, M. Muramatsu and M. Kojima, "Equality Based Contraction of Semidefinite Programming Relaxations in Polynomial Optimization", December 2006. /Journal of the Operations Research Society of Japan/ Vol. 51 (1) 111-125 (2008).

■ 王 雪萍

1. 王雪萍「改革・開放後の中国『国家公費派遣留学生』派遣政策の変遷」『中国研究月報』社団法人中国研究所、2007年8月号、19－32頁
2. 王雪萍「中国の文化外交—留学生派遣を含めた人材交流に見る戦略」『中国の外交—自己認識と課題』山川出版社所収、2007年8月、55－72頁
3. 中川秀直著、王雪萍・張劍波・楊志輝・祁景澄・朱建榮訳『漲潮時代—日本GDP倍増構想』（中国世界知識出版社、2008年3月）

■ 王 健歡

1. Wong KFK, Maki Y, Sadato N, Ozaki T (2007) Akaike Causality in State Space: Application in Neuroscience and Behavioral Science, 二〇〇七年度統計関連学会連合大会
2. Wong KFK, Ozaki T (2007) Akaike causality in state space: Instantaneous causality between visual cortex in fMRI time series, Biological Cybernetics, Volume 97, Pages 151-157

【2006年度奨学生】

■ 胡 秀英

1. Hu Xiuying. Effects of Tai Chi of on functional fitness and subjective health status in older Japanese Returnees from China: A randomized controlled trial. Japanese Journal of Physical Fitness and Sports Medicine Vol.56(4) 385-450,2007.
2. Hu Xiuying, Kazuko Ishigaki, Noriko Yamamoto-Mitani. Mental health status and related factors among first generation Japanese returnees from China and Chinese spouses living in Japan for ten years or more. Japanese Journal of Public Health Vol.54(7) 454-464,2007.

■ 孫 軍悦

「中国大陆における『ノルウェイの森』の受容—出版過程を中心に—」（高麗大学『日本研究』2007.8）  
『日中文化の交差点』（共著、三和書籍、2008.3）

■ ウィーラシンハ、ナリン

Nalin S. Weerasinghe, D. Chen, T.Hashimoto, "Space-Code CS-CDMA Systems over MISO Frequency-Selective Rayleigh Fading Channels", IEEE Transactions on Wireless Communications, vol.7, no.3, pp. 769-773, 2008

■ 禹 成勲

「高麗太祖代の開京への遷都と都城空間化に関する研究」、『日本建築学会計画系論文集』第 619 号、2007 年 9 月、pp.231 ～ 237

【2007 年度奨学生】

■ 詹 彩鳳

「ナガ民族自決運動とネルー政権（1947 - 56）」日本南アジア学会 『南アジア研究』第 19 号（2007.12.15 発行）

■ 鄧 飛

- 1."Evaluating the orientation and dispersion of carbon nanotubes inside nano composites by a focused-ion-beam technique" Materials Letters 61 (2007) 5095-5097
- 2."Tensile properties at different temperature and observation of micro deformation of carbon nanotubes-poly(ether ether ketone) composites" Composites Science and Technology 67 (2007) 2959-2964
- 3."Experimental Characterization of Poly (Ether Ether Ketone)/Multi-Wall Carbon Nanotube Composites" Key Engineering Materials Vols. 334-335 (2007) pp. 721-724

■ 金 玖淑

- 1.「1937-1940 年の修徳寺大雄殿の修理工事について」『2007 年度日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2、2007 年 8 月、pp.359 ～ 360
- 2.「日帝強占期における歴史的建造物保存修理工事の記録についてー日本佐賀県立名護屋城博物館所蔵小川敬吉資料を中心としてー」『韓国建築歴史学会 2007 秋季学術発表大会資料集』、2007 年 11 月、pp.147 ～ 154
3. 審査付論文：「修徳寺大雄殿修理工事における修理のあり方と修理方針ー「朝鮮宝物古蹟名勝天然記念物保存令」における宝物建造物の保存及び修理工事ー」『日本建築学会計画系論文集』No.622、2007 年 12 月、pp.245 ～ 251
4. 報告書：「韓国における海の信仰について」『日韓交流史から捉えた玄界灘における政治・文化・礼拝ネットワークに関する研究』、早稲田大学建築史研究室、2007 年 12 月、pp.13 ～ 24
5. 報告書：「海神を祀る韓国の祭堂及び祭祀遺跡の立地条件についてー韓国西南海岸地域を中心にー」『日韓交流史から捉えた玄界灘における政治・文化・礼拝ネットワークに関する研究』、早稲田大学建築史研究室、2007 年 12 月、pp.115 ～ 132

■ メジテ、アブドシュクル

1. Naoto Matsuno, Yuki Nakamura, Abudushukur Mejit, Koichiro Hama, Hitoshi Iwamoto, Osamu Konno, Yoshimaro Jojima, Isao Akashi, Tohru Iwatori, Tatsuhito Ashizawa and Takeshi Nagao; Long-term follow-up ABO- in compatible adult living donor liver transplantation in cirrhotic patients; Clin Transplant 2007; 21: 638-642
2. Abuduxukuer Mijiti, Naoto Matsuno, Tohro Iwatori, Takayoshi Yokohama, Kohichiro Hama, Hitoshi Iwamoto, Tatsuto Ashizawa, Takeshi Nagao, Kitaro Oka, Toshihiko Hirano; Lymphocyte sensitivity to tacrolimus correlates with clinical outcome in living donor liver transplantation; Am.J.Transplantation 12(suppl); 547, 2007
3. Abuduxukuer Mijiti, Naoto Matsuno, Tohro Iwatori, Hironori Takeuchi, Takeshi Nagao, Kitaro Oka, Toshihiko Hirano; Tacrolimus Sensitivity of PBMCs and its Influence on Clinical Outcome of Liver Transplantation Hepatology International 1(1);214, 2007(abstract)

■ 王 劍宏

Jianhong Wang, Atushi. Koizumi and Xinrong Liu: Advancing Sustainable Urban Development in China, Proceedings of the Institution of Civil Engineers journal Municipal Engineer, volume 161, issue 1, pages 3-10, ICE, 2008.3.

■ ヤロスラブ、シュラトフ

1. 「Re-establishing Economic Relations between Russia and Japan after the Russo-Japanese War: The 1907 Treaty of Commerce and Navigation」Acta Slavica Iaponica, Tomus 24. 2007.

2. 「日露関係における朝鮮問題（1905-1907）」『スラヴ研究』No.54、2007.

【2008 年度奨学生】

■ 馮 凱

1. Kai FENG, Shigehiko KANEKO, "Numerical Calculation Model of Multi Wound Foil Bearing with the Effect of Foil Local Deformation", Journal of System Design and Dynamics, JSME, Vol. 1, No.3, 2007, pp. 648-659
2. Kai FENG, Youyun Zhang, "The Effect of Low Environment Pressure on the Bearings in Internal Combustion Engine": Lubrication Engineering, Vol. 187, 2007(3), pp. 12-17 (In Chinese)
3. Kai FENG, Youyun Zhang, Yongsheng, Zhu, "Study of the Coupling Influent of Sand & Dust and Low Environment Pressure on the Bearings in ICE", Lubrication Engineering, Vol. 188, 2007(4), pp. 72-76 (In Chinese)

■ 洪 琬伸

1. 「ひとりひとりが証言者—宮古の慰安所調査研究発表」『宮古毎日新聞』2007 年 4 月 8 日
2. 翻訳『海外情報—「ベトナム戦争における性犯罪を謝罪しよう」（韓国『ハンギョレ 21』）『女性戦争人権学会』2007 年 7 月第 8 号）

■ 王 偉

王偉, 平田光男, 野波健蔵, 宮沢修, 「超小型・超軽量マイクロフライングロボットのモデリングと自律制御」, 日本ロボット学会誌, Vol.25, No.1, pp.121 ~ 129, 2007

■ 張 建

都市部における高校段階教育の格差と階層」『東京大学教育研究科紀要』 第 47 巻 pp.461-470、2008

■ 顔 海念

1. Yan H, Koyano S, Inami Y, Yamamoto Y, Suzutani T, Mizuguchi M, Ushijima H, Kurane I, Inoue N. Genetic variations in the gB, UL144 and UL149 genes of human cytomegalovirus strains collected from congenitally- and postnatally-infected Japanese children. Arch Virol. 153:667-674. 2008.
2. Trinh QD, Nguyen TA, Phan TG, Khamrin P, Yan H, Hoang PL, Maneekarn N, Li Y, Yagyu F, Okitsu S, Ushijima H. Sequence analysis of the VP7 gene of human rotavirus G1 isolated in Japan, China, Thailand, and Vietnam in the context of changing distribution of rotavirus G-types. J Med Virol. 79:1009-1016. 2007.
3. Trinh QD, Pham NT, Nguyen TA, Phan TG, Khamrin P, Yan H, Hoang PL, Maneekarn N, Li Y, Kozlov V, Kozlov A, Okitsu S, Ushijima H. Amino acid substitutions in the VP7 protein of human rotavirus G3 isolated in China, Russia, Thailand, and Vietnam during 2001-2004. J Med Virol. 79:1611-1616. 2007.
4. Nguyen TA, Yagyu F, Okame M, Phan TG, Trinh QD, Yan H, Hoang KT, Cao AT, Le Hoang P, Okitsu S, Ushijima H. Diversity of viruses associated with acute gastroenteritis in children hospitalized with diarrhea in Ho Chi Minh City, Vietnam. J Med Virol. 79:582-590. 2007.

## ◇ 設立の趣旨について

近年の交通・通信手段の発達により、海外旅行者の数はめざましく増加し、また、世界中の出来事が即座に伝えられるようになりました。このような時代に生きる私達は、もはや国家という単位ではなく、国際社会の一員として物事をとらえていかなければならないのではないのでしょうか。しかし、現在経済大国となった日本は、国際的な活動をもっと積極的に押し進め、世界に対してより大きな役割を果たすことができるのではないかと指摘されています。

渥美国際交流奨学財団は、1993年10月14日に物故いたしました渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志により、このような状況にあります日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて設立されました。当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に対し、奨学援助をいたします。日本にやって来た留学生が、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができますようお手伝いさせていただきたいと思います。

渥美氏は、アジア、西太平洋建設業協会国際連盟（I F A W P C A）会長、世界建設業連盟（C I C A）会長、及び社団法人C I S V日本協会会長を長年にわたって勤め、国際交流に尽くしてまいりました。C I S V（国際こども村）とは、「世界の平和を築くためには子供の時から機会を与え、国籍・人種・言語を越えて同じ人間であることを肌で実感させることが何より大切」という理想のもとに1951年アメリカで始められた平和運動で、毎年世界各地で子供達を集めてキャンプを行なっています。

また、渥美健夫・伊都子夫妻は、ニューヨークのコロンビア大学に日本美術史の冠講座を寄付いたしました。これによりコロンビア大学では、日本美術史の教授職が常置されることになりました。

渥美国際交流奨学財団は、渥美氏の国際交流の促進への信念を引き継ぎ、一層の発展をめざして、活動してまいりたいと思います。若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道がひらかれてゆくことを願っております。



## ◇ 2007年度業務日誌

- 4月 4日 4月例会：食事会（於：和風創作料理 結庵）
- 5月 7日 5月例会：個人面談（10日まで）
- 18日 2006年度会計監査
- 27日 第27回SGRAフォーラム in 秋葉原  
「アジアの外来種問題：ひとの生活との関わりを考える」  
（於：秋葉原UDXカンファレンス）SGRAレポート#40
- 6月 4日 2006年度年報発行
- 4日 第27回理事会・評議員会（2006年度事業報告と決算報告）・親睦会（6月例会）
- 7月 1日 募集要項配布開始（関東地方の大学に通知・ホームページに掲載）
- 3日 7月例会：富ヶ谷首都高速地下シールド工事現場見学
- 20日 軽井沢リクリエーション旅行（22日まで）
- 21日 第28回SGRAフォーラム in 軽井沢 「いのちの尊厳と宗教の役割」  
（於：鹿島建設軽井沢研修センター）SGRAレポート#41
- 9月 1日 2008年度奨学生応募受付開始
- 3日 9月例会：個人面談（7日まで）
- 14日 第2回SGRAチャイナフォーラム・北京
- 17日 第2回SGRAチャイナフォーラム・ウイグル  
「黄土高原緑化協力の15年：無理解と失敗から相互理解と信頼へ」  
（於：14日・北京大学生命科学学院、17日・新疆大学図書館二階報告庁）SGRAレポート#42
- 30日 2008年度奨学生応募締め切り（応募者総数 142名）
- 10月 7日 2008年度奨学生書類審査
- 11日 10月例会：食事会（於：ロシア料理 スンガリー）
- 25日 2008年度奨学生候補者予備面接（11月1日まで）
- 11月 2日 渥美奨学生の集い 平川均先生をお迎えして「鹿島守之助とパン・アジア主義」  
（於：鹿島新館／渥美財団ホール）SGRAレポート#43
- 11月18日 第29回SGRAフォーラム「広告と社会の複雑な関係」  
（於：東京国際フォーラム）SGRAレポート#44
- 12月 2日 2008年度奨学生最終選考・面接
- 4日 12月例会：個人面談（7日まで）
- 1月12日 新年会（1月例会）
- 1月26日 第30回SGRAフォーラム  
「教育における『負け組み』をどう考えるか～日本、中国、シンガポール～」  
（於：東京国際フォーラム）SGRAレポート#45
- 2月18日 2月例会：個人面談（20日まで）
- 27日 第28回理事会・評議員会（2008年度事業計画と収支予算について）
- 3月 1日 2007年度奨学生研究報告会（3月例会）
- 24日 2007年度奨学生最終食事会（於：コスタリカ料理 二葉）

◇ 2007年度収支決算明細書

(単位：円)

| 収入の部      |             | 支出の部     |             |
|-----------|-------------|----------|-------------|
| 科目        | 金額          | 科目       | 金額          |
| 基本財産運用収入  |             | 事業費      | 38,728,042  |
| 基本財産配当金   | 30,000,000  | 管理費      | 12,283,376  |
| 基本財産債券利息  | 11,159,673  | 次期繰越収支差額 | 73,918,742  |
| 寄附金収入     |             |          |             |
| 寄附金       | 16,300,000  |          |             |
| 雑収入       |             |          |             |
| 運用財産受取利息  | 60,372      |          |             |
| 貸与奨学金返戻収入 | 100,000     |          |             |
| 前期繰越収支差額  | 67,310,115  |          |             |
| 収入合計      | 124,930,160 | 支出合計     | 124,930,160 |

◇ 貸借対照表 (2008年3月31日現在)

(単位：円)

| 資産の部      |               | 正味財産の部     |               |
|-----------|---------------|------------|---------------|
| I. 流動資産   |               | I. 基本金     |               |
| 1. 現金     | 13,139        | 1. 基本財産    | 1,628,000,000 |
| 2. 普通預金   | 23,905,603    | II. 当期収支差額 | 73,918,742    |
| 流動資産計     | 23,918,742    |            |               |
| II. 固定資産  |               |            |               |
| 基本財産      |               |            |               |
| 1. 投資有価証券 | 1,625,342,540 |            |               |
| 2. 普通預金   | 2,657,460     |            |               |
| 基本財産計     | 1,628,000,000 |            |               |
| 奨学資金積立基金  |               |            |               |
| 定期預金      | 50,000,000    |            |               |
| 固定資産計     | 1,678,000,000 |            |               |
| 資産合計      | 1,701,918,742 | 正味財産合計     | 1,701,918,742 |

◇財団人名簿

(2008 年6月現在)

★ 理事・監事

|      |        |                                      |
|------|--------|--------------------------------------|
| 理事長  | 渥美 伊都子 | CISV 日本協会会長・日本ユニセフ協会常務理事・アジア婦人友好会副会長 |
| 常務理事 | 今西 淳子  | 関口グローバル研究会代表・CISV International 副会長  |
| 理 事  | 渥美 直紀  | 鹿島建設株式会社代表取締役兼執行役員副社長                |
|      | 片岡 達治  | 元癌研究会癌化学療法センター主任研究員                  |
|      | 加美山 節  | 国際基督教大学評議員                           |
|      | 加藤 秀樹  | 構想日本代表・慶應義塾大学教授(総合政策)                |
|      | 佐藤 直子  | プロテニスプレーヤー・コメンテーター・スポーツジャーナリスト       |
|      | 田村 次朗  | 慶應義塾大学教授(法学)                         |
|      | 遠山 友寛  | TMI 総合法律事務所パートナー(弁護士)                |
|      | 永山 治   | 中外製薬株式会社社長                           |
|      | 野辺地 篤郎 | 聖路加国際病院顧問                            |
|      | 宮崎 裕子  | 長島・大野・常松法律事務所パートナー(弁護士)              |
| 監 事  | 石井 茂雄  | 石井公認会計士事務所所長                         |
|      | 松岡 誠司  | 株式会社日本債券信用銀行元取締役会長                   |

★ 評議員

|       |                         |
|-------|-------------------------|
| 青木 生子 | 日本女子大学名誉教授(国文学)・理事      |
| 明石 康  | ジョイセフ(家族計画国際協力財団)会長     |
| 渥美 雅也 | 東京水産振興会振興部長             |
| 蟻川 芳子 | 日本女子大学副学長・理事・教授(環境分析化学) |
| 岩崎 統子 | フォニックス英語研究会代表           |
| 植田 兼司 | 弁護士                     |
| 嶋津 忠廣 | 渥美国際交流奨学財団事務局長          |
| 長岡 實  | 資本市場研究会顧問               |
| 堀田 健介 | 株式会社堀田総合事務所代表取締役会長      |
| 水谷 弘  | 専修大学名誉教授(比較文化)          |
| 山縣 睦  | 山縣有朋記念館理事長・栃木産業株式会社社長   |
| 八城 政基 | 株式会社新生銀行シニアアドバイザー       |

★ 選考委員

|     |        |                          |
|-----|--------|--------------------------|
| 委員長 | 畑村 洋太郎 | 東京大学名誉教授、工学院大学教授(産業機械工学) |
|     | 井上 博允  | 独立行政法人日本学術振興会監事(情報工学)    |
|     | 片岡 達治  | (理事)                     |
|     | 佐野 みどり | 学習院大学教授(美術史学)            |
|     | 田村 次朗  | (理事)                     |
|     | 平川 均   | 名古屋大学教授(経済学)             |

★事務局

事務局長 嶋津 忠廣  
事務局 谷原 正  
高木 和子

◇奨学生名簿

【1995年度奨学生】

Bambling, Michele バンプリング、ミッシェル：博士（美術史）（在アブダビ）  
Gao Lingna 高 玲娜：博士（社会学）（在横須賀）  
Gao Weijun 高 偉俊：博士（建設工学）早稲田大学：北九州市立大学国際環境工学部教授、西安交通大学兼職教授（在北九州）  
Jin Xi 金 熙：博士（物理情報学）東京工業大学：日本SGI(株)  
Kwack Jae-Woo 郭 在祐：博士（美術史）学習院大学：日本大学文理学部講師  
Maquito, Ferdinand マキト、フェルディナンド：博士（経済学）東京大学：アジア太平洋大学（フィリピン）研究助教授  
Park Chul-Ju 朴 哲主：博士（商学）慶應義塾大学：三育義明大学経営学部副教授（在ソウル）  
Park Jungran 朴 貞蘭：博士（社会福祉学）日本女子大学：仁済大学社会福祉科副教授（在釜山）  
Shi Jianming 施 建明：博士（数理工学・社会工学）筑波大学：室蘭工業大学情報工学科准教授（在室蘭）  
Yao Hui 葉 会：早稲田大学（日本文学）：法政大学国際文化情報学部非常勤講師  
Youn Seokhee 尹 錫姫：博士（商学）（在ソウル）  
阪神大震災被災特別奨学生  
Chen Xiao 陳 曉：神戸大学（医学）  
Horng Der-juinn 洪 徳俊：博士（経営学）神戸大学：国立中央大学企業管理系副教授（在台湾桃園）  
Wang Libin 王 立彬：神戸大学（自然科学）：(株)東洋インキ製造

【1996年度奨学生】

Chantachote, Viravat チャンタチョテ、ピラバット：博士（法学）慶應義塾大学：タマサート大学法学部講師（在バンコク）  
Gulenc, Selim Yucel ギュレチ、セリム・ユジェル：東京大学（政治学）：宗教法人京都ムスリム協会理事、イスラーム文化センター代表（在京都）  
Khin Maung Htwe キン・マウン・トウエ：博士（応用物理）早稲田大学：Ocean Resource Production Co., LTD. 社長（在ヤンゴン）  
Kim Woong-Hee 金 雄熙：博士（国際政治経済学）筑波大学：仁荷大学校国際通商学部副教授、独協大学交換客員教員（在埼玉）  
Lee Nae-Chan 李 來賛：博士（管理工学）慶應義塾大学：漢城大学経済学部副教授（在ソウル）  
Nam Kijeong 南 基正：博士（国際関係論）東京大学：国民大学国際学部副教授（在ソウル）  
Park Keunhong 朴 根弘：博士（生命理工学）東京工業大学  
Qiao Xin 喬 辛：博士（無機材料工学）東京工業大学：（在ボストン）  
Trede, Melanie Maria トレーデ、メラニー・マリア：博士（美術史）ハイデルベルク大学[学習院大学]：ハイデルベルグ大学東アジア研究センター教授（在ハイデルベルグ）  
Zhao Qing 趙 青：お茶の水女子大学（比較文化）：（在北京）

Zhu Tingyao 朱 庭耀：博士（船舶海洋工学）東京大学：（財）日本海事協会技術研究所首席研究員 / ハルビン工科大学客員教授

【1997年度奨学生】

De Maio, Silvana デマイオ、シルバーナ：博士（日本語学）東京工業大学：ナポリ国立大学オリエンターレ専任講師（在ナポリ）

Fang Meili 方 美麗：博士（言語学）お茶の水女子大学：インペリアル大学非常勤講師（在ロンドン）

Isananto, Winursito イサナント、ウィルヌシト：博士（応用科学）慶應義塾大学：

Kim Woesook 金 外淑：博士（健康科学）早稲田大学：兵庫県立大学看護学部心理学系教授（在神戸）

Katagiri, Laohaburanakit Kanokwan (Noi) 片桐カノックワン・ラオハブラナキット：博士（言語学、日本語教育）筑波大学：チュラロンコン大学文学部日本語講座助教授

Lee Hyang-Chul 李 香哲：博士（経済学）一橋大学：光云大学日本学科教授（在ソウル）

Li Enmin 李 恩民：博士（社会学）一橋大学：桜美林大学リベラルアーツ学群教授

Nizamidin, Jappar ニザミディン、ジャッパル：博士（応用化学）東京大学：キモト・テック（在米ジョージア）

Wang Yuepeng 王 岳鵬：博士（医学）東京大学：タフツ大学医学部タフツ医療センター分子心臓病研究所研究員（在ボストン）

Williams, Duncan ウィリアムス、ダンカン：博士（宗教学）ハーバード大学 [ 上智大学 ]：カルフォルニア大学バークレー校日本研究センター教授（在米バークレー）

Zhang Shao-Min 張 紹敏：博士（医学）東京大学：ペンシルベニア州立大学医学部神経と行動学科助理教授（在米ハーシー）

【1998年度奨学生】

Adiole, Emmanuel アディオレ、エマニュエル：博士（政治学）東京大学：ナイジェリア・エネルギー環境研究所主任研究員（在ナイジェリア）

Cao Bo 曹 波：博士（建設工学）早稲田大学：NTT データクリエーション(株)（在川崎市）

He Zuyuan 何 祖源：博士（先端学際工学 / 光電子工学）東京大学：東京大学大学院工学系研究科電気系工学専攻准教授

Hu Jie 胡 潔：博士（文学）お茶の水女子大学：名古屋大学大学院国際言語文化研究科准教授（在名古屋）

Kim Jaesung 金 宰晟：東京大学（仏教学）：（在米ミシガン）

La Insook 羅 仁淑：博士（経済学）流通経済大学、早稲田大学博士課程修了：国士舘大学政経学部非常勤講師

Lee JooHo 李 周浩：博士（電子工学）東京大学：立命館大学情報理工学部情報コミュニケーション学科准教授（在滋賀）

Mailisa マイリーサ：博士（社会学）一橋大学：立教大学非常勤講師

Sun Yanping 孫 艶萍：博士（医学）東京大学：ハーバード大学ブリッグス病院放射線科准教授（在ボストン）

Wu Hongmin 呉 弘敏：博士（精密工学）東京工業大学：フクダ電子(株)

Xu Xiaoyuan 許 曉原：博士（農学生命科学）東京大学：コロンビア大学ナオミベリーセンター研究員（在ニューヨーク）

【1999年度奨学生】

Coimbra, Maria Raquel Moura コインブラ、マリア・ハケウ・モウラ：博士（資源育成学）東京水産大学：ペルナンブコ州立大学農水学部応用遺伝子研究室助教授（在ブラジル）

Hong Kyung-Jin 洪 京珍：博士（化学環境工学）東京工業大学：韓国環境省環境部環境政策室化学物質安全課（在ソウル）

Hou Yankun 侯 延琨：博士（物理電子化学 / 薬学）東京工業大学：リーマンブラザーズ香港支店（在香港）

Ju Yan 具 延：博士（農学）筑波大学：メッツォペーパージャパン（株）

Li Gangzhe 李 鋼哲：立教大学（経営学 / 経済学）：北陸大学未来創造学部教授

Mushikasinthorn, Prachya ムシカシントーン、プラチャー：博士（資源育成学）東京水産大学：カセサート大学水産学部助教授（在バンコク）

Vu Thi Minh Chi ブ・ティ・ミン・チィ：博士（教育社会学）一橋大学：ベトナム社会科学院人間科学研究所研究員（在ハノイ）

Wang Dan 王 旦：博士（音楽）東京芸術大学：バイオリニスト／昭光物産㈱

Yang Jie Chi 楊 接期：博士（教育工学）東京工業大学：国立中央大学網路学習科技研究所准教授（在台湾桃園）

Yeh Wen-chang 葉 文昌：博士（電子物理工学）東京工業大学：台湾科技大学電子工程科助教授（在台北）

Zhou Haiyan 周 海燕：博士（医学）東京医科歯科大学：金沢大学付属病院第一内科（金沢）

## 【2000年度奨学生】

Jin Zhengwu 金 政武：博士（物質科学）東京工業大学：東芝㈱

Jung Jae Ho 鄭 在皓：博士（物質科学）慶應義塾大学：三星電子 LCD 総括 LCD 開発室開発 3Team(在韓 CheonAnn)

Jung Sung Chun 鄭 成春：博士（経済学）一橋大学：対外経済政策研究院（KIEP）日本チーム長（在ソウル）

Ko Hee Tak 高 熙卓：博士（総合文化）東京大学：高麗大学日本研究センター研究教授、世界文化総合研究所副所長（在ソウル）

Lim Chuan-Tiong 林 泉忠：博士（国際政治学）東京大学：琉球大学法文学部准教授、ハーバード大学客員研究員（在ボストン）

Molnar, Margit モルナール、マルギット：博士（経済学）慶應義塾大学：OECD研究員（在パリ）

Naiwala Pathirannehelage, Chandrasiri ナイワラ・パティランネヘラゲ、チャンドラシリ：博士（電子情報）東京大学：日本大学特別研究員（日本学術振興会特別研究員）、東京大学客員研究員

Ren Yong 任 永：博士（医学）群馬大学：ニューヨーク州立大学医学部研究員（在米バッファロー）

Suzuki Sato, Hiromi スズキサトウ、ヒロミ：慶應義塾大学（経済学）：（在東京）

Wu Yuping 武 玉萍：博士（医学）千葉大学：理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター（CDB）（在神戸）

Xu Xiangdong 徐 向東：博士（社会学）立教大学：中国市場戦略研究所代表取締役

Zeng Zhinong 曾 支農：博士（アジア文化）東京大学：（在武漢）

## 【2001年度奨学生】

Borjigin, Burensain ボルジギン、ブレンサイン：博士（東洋史）早稲田大学：滋賀県立大学人間文化学部准教授（在彦根市）

Fan Jianting 範 建亨：博士（経済学）一橋大学：上海財経大学国際工商管理大学院助教授（在上海）

Jeon Jin Hwan 全 振煥：博士（建築材料）東京工業大学：鹿島建設㈱技術研究所主任研究員

Jiang Huiling 蔣 恵玲：博士（電子情報工学）横浜国立大学：(株)NTT ドコモ・総合研究所研究主任

Jin Xianghai 金 香海：博士（政治学）中央大学：延辺大学アジア研究センター副センター長、副教授（在延吉）

Kostov, Vlaho コストブ、ブラホ：博士（システム工学）東京都立科学技術大学：松下電器産業株式会社 R&D 部門（在英レディング）

Lee Hyun-Young 李 炫瑛：博士（比較文化）お茶の水女子大学：建国大学校師範大学日本語教育科助教授（在ソウル）

Lee Young-Suk 李 英淑：博士（教育学）筑波大学：釜山大学校師範大学数学教育科非常勤講師（在釜山）

Liang Xingguo 梁 興国：博士（化学生命工学）東京大学：名古屋大学物質制御工学専攻専任講師（在名古屋）

Lwin U Htay ルイン・ユ・ティ：博士（公衆衛生学）東京医科歯科大学：東京大学医学部社会疫学科訪問研究員

Qi Jin Feng 奇 錦峰：博士（薬理学）東京医科歯科大学：広州中医薬大学中薬学院教授（在広州）

Sri Sumantyo, Josaphat Tetuko スリ スマンティヨ、ヨサファット・テトコ：博士（人工システム科学）千葉大学：千葉大学環境リモートセンシング研究センター准教授

### 【2002年度奨学生】

Baek Insoo 白 寅秀：博士（商学）早稲田大学：（在ソウル）

Chen Tzu-Ching 陳 姿菁：博士（国際日本学）お茶の水女子大学：開南大学応用日本語学科学科長、台湾大学日本語学科兼任助理教授（在台北）

Hu Bingqun 胡 炳群：博士（システム工学）日本工業大学：日豊興業株式会社（在名古屋 / 広州）

Iko, Pramudiono イコ、プラムディオノ：博士（電子情報工学）東京大学：NTT情報流通プラットフォーム研究所

Jo Gyuhwan 曹 奎煥：博士（地質学）早稲田大学：地球科学総合研究所主席研究員 / 早稲田大学客員研究員

Mandah, Ariunsaihan マンダフ、アリウンサイハン：博士（地域社会学）一橋大学：（在米カンザス）

Mukhopadhyaya, Ranjana ムコパディヤーヤ、ランジャンナ：博士（宗教学宗教史）東京大学：名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授（在名古屋）

Park Young-June 朴 栄濬：博士（国際関係論）東京大学：国防大学校安全保障大学院副教授（在ソウル）

Sun Jianju 孫 建軍：博士（日本語学）国際基督教大学：北京大学外国語学院日本語文化学部助教授（在北京）

Wang Xi 王 溪：博士（電子情報工学）東京大学：

Yimit Abliz イミテ、アブリズ：博士（人工環境システム）横浜国立大学：新疆大学化学化工学院教授（在ウルムチ）

Yu Xiaofei 于 曉飛：博士（社会文化科学）千葉大学：日本大学法学部准教授

### 【2003年度奨学生】

Chae Sang Heon 蔡 相憲：博士（生物生産学）東京農工大学：天安蓮庵大学産学協力担当教授（在韩国天安）

Chang Kuei-e 張 桂娥：博士（学校教育学—言語文化）東京学芸大学：台湾致遠管理学院応用日本語学科専任助理教授（在台南）

Husel フスレ：博士（地域文化）東京外国語大学：昭和女子大学非常勤講師

Kim Hyeon Wook 金 賢旭：博士（総合文化—表象文化）東京大学：仁荷大学・国民大学非常勤講師（在ソウル）

Kwak Jiwoong 郭 智雄：博士（経営学）立教大学：九州産業大学商学部商学科専任講師（在福岡）

Lin Shaoyang 林 少陽：博士（総合文化—言語情報科学）東京大学：東京大学総合文化研究科・教養学部特任助教授

Lu Yuefeng 陸 躍鋒：東京海洋大学（海洋情報システム）：Merit Intelligence Development Centre, Director（在トロント）

Piao Zhenji 朴 貞姫：博士（応用言語学）明海大学：北京語言大学外国語学院日本語学部教授（在北京）

Tisi, Maria Elena ティシ、マリア エレナ：博士（児童文学）白百合女子大学：ペルージャ外国人大学、サレント大学非常勤講師（在ボローニャ）

Yamaguchi Ana Elisa ヤマグチ、アナ エリーザ：一橋大学（社会学）：上智大学外国語学部嘱託講師

Yun Hui-suk 尹 熙淑：博士（材料学）東京大学：韓国機械研究院附属材料研究所（KIMS）（在慶南道昌原）

Zang Li 臧 俐：博士（学校教育学—教育方法論）東京学芸大学：東海大学短期大学部児童教育学科特任准教授

### 【2004年度奨学生】

Ampong, Beryl Nyamekye アンボン、ベリル ニャメチェ：博士（薬理学）東京医科大学：Children's National Medical Center（在ワシントンD.C.）

Chin, Angelina Yanyan チン、アンジェリーナ ヤンヤン：博士（ジェンダー研究）お茶の水女子大学：（在カリフォルニア）

Khomenko, Olga ホメンコ、オリガ：博士（地域文化研究）東京大学：早稲田大学研究員、学術振興会外国人研究員

Lee Jea Woo 李 済宇：博士（地盤地震工学）早稲田大学：鹿島建設（株）技術研究所主任研究員

Lee Sung Young 李 承英：博士（応用言語学）筑波大学：慶北大学校日語日文学科非常勤講師（在大邱）

Meng Zimin 孟 子敏：博士（言語学）筑波大学：松山大学人文学部教授（在松山）

Mullagildin, Rishat ムラギルディン、リシャット：慶応義塾大学（環境デザイン）：RAUM Architects 社長（在ロシア、ウファ）  
 Napoleon ナポレオン：博士（機械制御システム）東京工業大学：日産自動車（株） 総合研究所  
 Sonntag, Mira ゾンターク、ミラ：東京大学（宗教史学）：富坂キリスト教センター総主事  
 Tsai Ying-hsin 蔡 英欣：博士（法学）東京大学：国立台湾大学法律学系助理教授（在台北）  
 Yang Myung Ok 梁 明玉：博士（人間発達科学）お茶の水女子大学：お茶の水女子大学大学院人間創成科学研究科研究員  
 Ye Sheng 叶 盛：博士（先端学際工学）東京大学：香港城市大学生物化学係研究員（在香港）

【2005年度奨学生】

Bao Lian Qun 包 聯群：東京大学（言語情報科学）：東北大学東北アジア研究センター客員研究員（在仙台）  
 Han Junqiao 韓 珺巧：博士（建築学）早稲田大学：国立ローレンス・バークレー研究所訪問研究員（在カリフォルニア）  
 Han Kyoung Ja 韓 京子：博士（日本文化研究）東京大学：徳成女子大学非常勤講師（在ソウル）  
 Jiang Susu 江 蘇蘇：博士（物理情報工学）横浜国立大学：東芝セミコンダクター社  
 Kim Bumsu 金 範洙：博士（学校教育学—社会系教育（歴史））東京学芸大学：東京学芸大学特任准教授、（韓国）国立公州大学校客員教授  
 Kim Yeonkyeong 金 娟鏡：東京学芸大学（心理学）：近畿大学九州短期大学非常勤講師（通信教育部保育科）、YMCA 健康福祉専門学校（厚木校）  
 Lan Hung Yueh 藍 弘岳：東京大学（地域文化研究）：二松学舎大学 COE プログラム事務局研究員  
 Tenegra, Brenda Resurecion Tiu テネグラ、ブレンダ レスレション ティウ：博士（人間発達科学）お茶の水女子大学：ノッティンガム大学アイデンティティ・シティズンシップ・移民センター（ICMiC）研究員（在英ノッティンガム）  
 Vo Chi Cong ヴォー・チー・コン：東京工業大学（数理計算科学）：DaiTri Joint Stock Company CEO  
 Wang Xueping 王 雪萍：博士（政策メディア）慶応義塾大学：関西学院大学言語教育研究センター常勤講師  
 Wong Kin Foon 王 健歡：博士（統計科学）総合研究大学院大学：ハーバード大学医学部 MGH 病院研究員（在ボストン）  
 Zhao Changxiang 趙 長祥：博士（商学）一橋大学：中国海洋大学法政学院管理経済学（在青島）

【2006年度奨学生】

Chu Xuan Gao チュ・スワン・ザオ：東京外国語大学（文化人類学）：ベトナム社会科学院文化研究所研究員（在ベトナム）  
 Hu Xiuying 胡 秀英：博士（看護教育学）千葉大学：四川大学華西看護学部・華西病院准教授（在成都）  
 Hyun Seungsoo 玄 承洙：博士（地域文化）東京大学：韓国外国語大学ロシア研究所研究員（在ソウル）  
 Li Chengri 李 成日：博士（政治学）慶応義塾大学：慶應義塾大学法学部訪問研究員  
 Liang Yun-hsien 梁 蘊嫻：東京大学（比較文化）  
 Mohottala Shirmila モホッタラ、シャミラ：東京大学（情報理工学）  
 Pantcheva, Elena Latchezarova パンチェワ、エレナ：博士（日本研究）千葉大学：日永インターナショナル（株）  
 Seo Kyoung Sook 徐 景淑：慶応義塾大学（美学美術史）：（在ソウル）  
 Sim Choon Kiat 沈 俊傑：博士（教育学）東京大学：東京大学教育学研究科研究員、日本学術振興会外国人特別研究員  
 Sun Junyue 孫 軍悦：東京大学（言語情報科学）：明治大学政治経済学部非常勤講師  
 Weerasinghe Nalin ウィーラシンハ、ナリン：博士（電子工学）電気通信大学：シュルンベルジェ（株）電子エンジニア  
 Woo Seonghoon 禹 成勲：博士（建築学）東京大学：東京大学建築学研究科、学術振興会外国人特別研究員

### 【2007年度奨学生】

Chan Chai-fong 詹 彩鳳：東京大学（地域文化研究）：（在台北）

Deng Fei 鄧 飛：東京大学（先端エネルギー学）：学術振興会外国人特別研究員

Gangbagana ガンバガナ：東京外国語大学（地域文化研究）

Kim Minsuk 金 玟淑：博士（建築学）早稲田大学：早稲田大学理工学術院総合研究所客員研究員

Lee Eungyong 李 垠庚：東京大学（地域文化研究）

Mijiti, Abuduxukuer メジテ、アブドシュクル：博士（外科学）東京医科大学：東京医科大学研究員

Park Sohyun 朴 昭炫：東京大学（文化資源学）：韓国芸術総合大学非常勤講師（在ソウル）

Porras Rojas, Oscar ポラス・ロハス、オスカル：博士（応用環境システム学）東京海洋大学：コスタリカ大学航海・水産学部長（在コスタリカ、Puntarenas）

Quan Mingai 権 明愛：日本社会事業大学（社会福祉学）

Wang Jian Hong 王 剣宏：早稲田大学（建設工学）：早稲田大学理工学術院創造理工学研究科助手

Yan Hainian 顔 海念：博士（国際保健学）東京大学：（株）中外製薬安全性データマネジメント部

Yaroslav, Shulatov ヤロスラブ、シュラトフ：慶応義塾大学（政治学・歴史学）

### 2008年度奨学生

Feng Kai 馮 凱：東京大学（機械工学）

Hong Yunshin 洪 ユン伸：早稲田大学（国際関係学）

Kautzsch, Vroni Friederike カウチ、フローニ フリデリケ：東京芸術大学（文化財保存学）

Lkhamsuren, Lkhagvasuren ハムスレン、ハグワスレン：早稲田大学（国際関係学）

Nemekhjargal ネメフジャルガル：亜細亜大学（経済学）

Phuong, Kimchhayarasy プアン、キムチャイヤラシー：宇都宮大学（物性工学）

Song Gang 宋 剛：桜美林大学（地域文化）

Vörnö, Heli-Liis ヴェルノ、ヘリ リース：学習院大学（哲学）

Wang Wei 王 偉：千葉大学（人工システム）

Xiu Zhen 修 震：東京工業大学（機械制御システム）

Yuk Jaehwa 陸 載和：武蔵野美術大学（造形芸術）

Zhang Jian 張 建：東京大学（教育学）

### 渡日前選考特別渥美奨学生

Liu Jian 劉 健：北京大学（早稲田大学在学）（日本語学）

## ◇ 2009年度渥美奨学生（国内採用）募集概要

渥美国際交流奨学財団は、関東地方の大学院博士課程に在籍する留学生を対象に、2009年度渥美奨学生を下記の通り募集します。

### （１）応募資格（奨学期間に下記のすべてに該当すること）

1. 日本以外の国籍を有し、関東地方の大学院博士課程に在籍し、当財団の奨学金支給期間に博士号を取得する見込みのある方。正規在籍年限を超えたために、或いは、他国の大学院より博士号を取得するために、研究員等として日本の大学院に在籍する方も含む。
2. 自分の所属する大学院研究科(研究室)および自分の居住地が、関東地方(東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・茨城県・栃木県・群馬県)にある方。
3. 国際理解と親善に関心をもち、当財団の交流活動に積極的に参加する意思のある方。

### （２）交流活動

1. 当財団は、毎月の例会で学業や生活について報告していただいた上で、奨学金を支給します。
2. 毎年数回奨学生や元奨学生と当財団の理事・評議員ならびに選考委員を招き親睦会を催します。年度末には当該年度奨学生の研究報告会を催します。
3. 毎年7月に2泊3日の軽井沢リクリエーション旅行に招待します。
4. 海外学会派遣プログラム：渥美奨学生で博士号を取得した方には、海外で開催される学会等に一回参加するための旅費・宿泊費および参加費を支給します。ただし、海外にいる方は日本への旅費にあてることができます。

### （３）奨学金の詳細

1. 奨学金は月額20万円です。2009年度は10名採用します。
2. 奨学金の支給は1年間です。継続は認められません。

### （４）応募方法

1. 奨学金希望者は、2008年7月1日以後、各大学院の留学生担当課または当財団事務局まで、応募要項と申込書をご請求ください。また、同日以後、当財団ホームページ（<http://www.aisf.or.jp>）からもダウンロードできます。
2. 2009年度申込は、2008年9月1日から9月30日まで、郵便にて受け付けます。

### （５）選考の方法

事務局における書類審査と予備面接の後、選考委員による書類選考と面接により審査します。選考の結果は12月上旬に通知します。



# 財団法人 渥美国際交流奨学財団

Atsumi International Scholarship Foundation

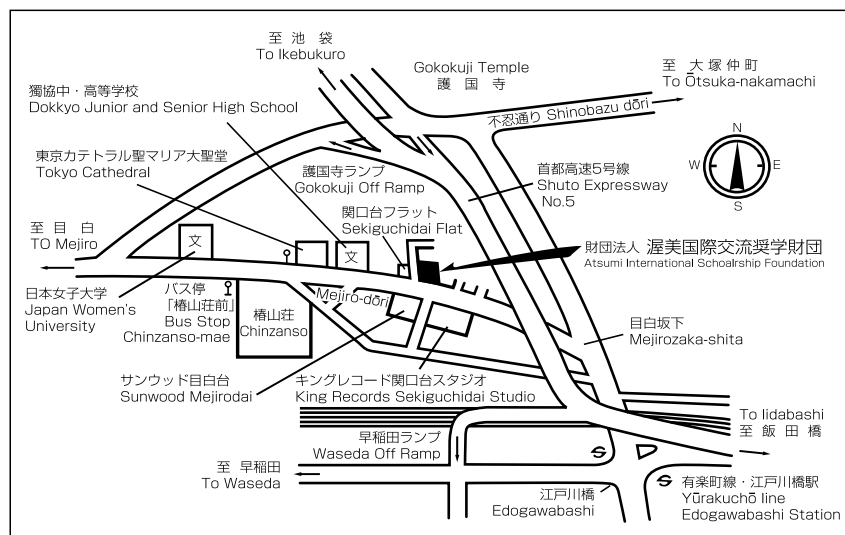
〒112-0014 東京都文京区関口3丁目5番8号

3-5-8 Sekiguchi Bunkyo-ku Tokyo 112-0014 Japan

Phone:03-3943-7612 Fax:03-3943-1512

<http://www.aisf.or.jp>

E-mail:aisf-office@aisf.or.jp



★JR山の手線目白駅より、都バス61番 新宿駅西口行、「椿山荘前」下車・徒歩3分  
Take The 61 bus from Mejiro Station (JR Yamanote line) and get off at the "Chinzansomae" stop. 3 min. walk.

★営団地下鉄有楽町線「江戸川橋」(出口A1)下車・徒歩10分  
Get off at Edogawabashi station from the Yurakucho subway line. (A1 exit 10 min. walk)

